

岳 山

年 三 十 二 第

號 一 第

山 岳

第二十二年第一號

昭和三年十二月發行

目 次

本 欄

黒部下廊下より得たる地形上の觀察一つ二つ

黒部川上流の印象

冬の大朝日岳附近

祝瓶山

越後赤谷口より飯豊連峯へ

英國の山旅

圖 版

○赤花澤より祝瓶山を仰ぐ

○神潭

○棒小屋泊り場より十字峽に續く岩石段丘○劔澤落口の壁

○カベケ原岩魚釣の小屋○赤城澤落口の瀑と上ノ岳

田 中 薰 . . . 一頁

角 田 吉 夫 . . . 一〇

別 宮 貞 俊 . . . 一八

岩 水 信 雄 . . . 三八

藤 島 源 太 郎 . . . 五三

別 宮 貞 俊 . . . 六五

對頁 卷頭

四

二

一六

- 赤城澤落口附近○カベケ原より黒部五郎岳を望む 二〇
- 朝日鑛泉より大朝日岳○熊越シの雪庇 二四
- 朝日俣澤よりクシノ峯を望む○下の大澤 二八
- 五本楢マヘカタ峯の登路よりヨコフツツケのガンガラ○五本楢のマヘカタ峯より袖朝日 三二
- 百間乗りの雪溪○五本楢のマヘカタ峯より小朝日のクロガラ 三六
- 桂谷部落及三體山○背面より望める桂谷部落○三體山南面尾根上より三方面を望む 四〇
- 横澤上尾根途中より御影森山を望む 四四
- コウガイより木地山廣河原を望む○丸森より大玉山を望む 四八
- 丸森より祝瓶山を望む○同上 五二
- 祝瓶山大玉山間尾根上より大玉山を望む○葉山神社 五六
- 湯ノ平溫泉附近の飯豊川○北股川觀音瀑 六〇
- 湯ノ平溫泉浴槽○不動瀑と残雪 六四
- センダク澤下部○北股岳の鞍部より見たる烏帽子岳 七二
- Snowdon 登路○Glaslyn 及 Llyn Llydaw 兩湖 八〇
- Penn y Pass Hotel ○Great End より Scawfell Pike を望む 九六
- Pikes Crag ○Mickle door より Great Moss を望む 一〇四
- Pillar Rock ○Pikes Crag 一〇八
- 英彦山高住神社祕藏の高麗犬○英彦山 一一二
- 妙高山の寢牛○妙高山 一三六
- 杖植峠の北望○星尾峠より八風山及淺間山を望む 一三六

スケッチ

○第一圖飛驒山脈北部假想斷面圖○第二圖黒部峽谷の横断面○第三圖棒小屋泊り場附近の谷の断面○第四圖十字峽の谷の形、棒小屋泊り場附近の岩石段丘を示す、東谷温泉附近の岩石段丘を示す○神潭泊り場より對岸を見る(以上四葉) 八

雜錄

自一八〇
至一四〇

○續船上談山(八代準)○英彦山のことども(竹内亮)○雪の岩手山(上關光三)○朝日岳雜話(別宮貞俊、沼井鐵太郎)○太平山・寒風山及男鹿の本山(沼井)○守屋山(高畑棟材)○赤久繩山(黒田初子)○石南に就いて(大平晟)

雜報

自一四一
至一五七

○秩父宮殿下名譽會員を御受諾○ウエツテルホルン西尾根の初登攀○邦人のロツキ一登山○珍らしい存在○クラカトア島陥没

○故志賀氏の碑○富士山麓に研究所○大島氏の死體發見○早大遭難者發見○山の慘事

○會員通信

○山岳圖書紹介

會報

自一五八
至一六六

○第二十一回大會記事○第四十回小集會記事○物故幹部及會員追悼會○有志晚餐會○大平晟氏歡迎會○新入會員紹介○會員章再交附○退會者○除名者○會員の計報○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

附錄

會員名簿 (會員のみに配布す)



ぐ仰を山瓶視りよ深花赤
影撮氏雄信永岩

黒部下廊下より得たる地形上の觀察一つ二つ

田 中 薫

此は去る昭和二年八月十八日より二十七日にかけて冠松次郎氏、石井鶴三氏等（一部は別宮貞俊氏、岩永信雄氏も共）に随伴して黒部下廊下に入つた時の極めて印象的な觀察である。或は自然の壯重なるものに打たれ歡喜に燃え過ぎて思はぬ誤謬をしてゐるかも知れない。併し次の夏には屹度黒部に入る人が驚く程多くなり其の中には同好の士もあつて私が此處でする誤謬位は譯なく訂正せられるであらうことを信じ、兎も角も書き記す事とした。此の話は同じ表題で昨秋の城南山岳會で一度語つたものである。

尙ほ此の小文を讀まれる方は本誌第二十二年第二號（黒部號）の冠氏作「立山東面と黒部下廊下」なる地圖を參照せられ、ば幸である。但し同圖では後に私が越中山民に従つて「谷」と云ふ處のものを全部「澤」として統一してある。此は同氏の談によれば「澤」の方が一般的に通りが良いから便宜上用ひたのであるとのことと全く理由ある譯であるから其の點を明にして置きたい。

一、飛驒山脈北部の地史

飛驒山脈は（一）最初古生層の褶曲に依つて山地としての大體の地域が定まつた。（二）後其の大部分に亘つて噴出岩が現れて山の高さを増した。其の主なる岩種は花崗岩、角閃花崗岩、石英斑岩、小紋岩等で今日廣く露出してゐるものである。（三）此處に剝削作用が行はれ準平原化（Peneplanation）の結

果一時準平原 (Penplain) となつた。此は全部でなくて部分的であつたかも知れず、又一度でなく二度三度繰り返されたかも知れない。(四) 其處へ最近の隆起運動が始まつた。此に伴つて斷層が縦横に走り、弱線に沿うて新火山岩 (主に安山岩) が噴出した。それが乗鞍火山脈である。土地の隆起の結果として川には若返り (Rejuvenation) が行はれ、多くの峡谷が穿たれた。其の峡谷は河水の絶えざる侵蝕に依つて谷幅を擴げられ、谷壁を緩にせられて中年の平調なる姿に進まんとするのであるが未だ今日では充分の若さを保ち溪谷の耽美家を魅了すると同時に電力企業家を垂涎に堪えざらしめてゐる。以上は大體諸家の認むる地史の大略である。

北部飛驒山脈附近に出来た決定的な斷層は山脈の東邊を限つて遠く南方に走る姫川斷層線である。そして群小の斷層線は恰も此に従屬する様に或は此に平行し、直交し、斜して加へられてゐる。梓川や高瀬川の上流、鹿島川、黒部川等の流路は此等の斷層線に當りて居る。逆に云へば此等の川は斷層を利用して峡谷を穿ち得たといふものである。

峡谷の作製は最早や地史ではなくて現實に我が目に映ずる地の動きである。激湍の中の水沫の一つ一つに宿る不思議な自然の力の表現である。眞の表現は此を觀るといふよりも感ず可きである。私は最もよくそれを黒部川の下廊下に於て感ずる事を得た。

二、黒部川の若返り

黒部川の流程は大體左の六つに分ける事が出来る。(一) 源流 (水源より薬師澤の落口まで) (二) 上廊下 (薬師澤落口より東澤落口まで) (三) 平附近の廣河原 (東澤落口より小スバリ澤落口附近まで) (四) 下廊下 (小スバリ澤落口より黒薙川落口附近まで) (五) 宇名月附近の廣河原 (黒薙川落口より愛本まで) (六) 平原の川 (愛本より河口まで)。

偕て黒部の流路に當つて起つた隆起運動は凡そ二ヶ所に於て極點に達したものと見え其處に上廊下、下廊下が出現したのである。そして此の二つの素晴らしい峡谷の次には如何にも人が一息入れてゐる様に廣河原が發達してゐるのである。二つの廊下に於ける隆起は同時に起つたか否か不明であるけれども同時に起つたものとしても若返りは下流より漸次上流に及ぶものであるから下廊下より上廊下の方が年齢が若いのが當然である。私は上廊下を見ないから判然と云へないが冠氏の話に依れば上廊下は壁は随分高いが未だ漂石が河床に轉々してゐて何處か峡谷としての安定な感がないといふ事である。未だ發達の中途にあるものと思はれる。

此に反し下廊下は壯年期に入り侵蝕も餘程進み、岩岸は滑らかに研磨され漂石も少く稀にあつても皆巨大なるものばかりで、河床全體が行く處まで行つたといふ安定さを持つてゐる。下刻と共に側浸蝕も進み、流れの届く範圍内には土砂は全く見當らないから少くとも現在に於ては流水の力は母岩を刻む仕事に費されてゐる。従つて母岩其のものが雛段になつて舊の河床の位置を示す所謂岩石段丘 (Felsenasse) が處々に作られてゐる。又下流に至れば甌穴の類も見られる。

本流の下刻が素晴らしく早く進むので水量の劣る支流の下刻が甚だしく遅れ勝となることは當然である。此の故に合流點は毎時も懸谷の狀をなし、所謂不協和的合流 (Discordant junction) の著しい例を作つてゐる。中には全く瀧となつてゐるものもある。鳴澤、新越、下のタル澤、劔川、東谷、仙人谷等の瀧はそれである。

三、谷の斷面の形

下廊下の壁は兩岸が一樣に只高く迫つてゐるのではない。立山側は壁は極めて高く二千米以上の處から一息に切り落してゐるが傾斜は比較的に緩い。岩石は露出して殆んど樹木が無いから河床から仰

いだ姿は比類なく見事である。丸山の壁、大タテガビン、別山の壁、ガンドウ尾根、仙人山の壁等は其の著しいものである。

此に反し後立山側は壁は低くせいへく、百米乃至二百米であるが殆んど直立に近い。赤澤の壁、新越の壁、奥鐘山の壁、名劔山、百貫山等其の例である。そして此の壁の上は急に緩かな斜面になつて普通の山腹の感で其の儘分水界に登つてしまふ。第二圖は大へズリ附近から十字峽附近までの感を平均して作つた假想断面である。

此の様な東西兩岸の對比は素、斷層が行はれた時に大體定つたものでなければならぬ。即ち斷層線を境として立山の山塊と後立山の山塊とが異つた角度で傾きつゝ動いたものと想像される。後立山は稍々傾動山塊の傾向があると思はれる。従つて後立山は正規斷層の場合に取る可き位置よりも遙かに東方に其の山頂を立てゝゐるから、山腹は緩かに西に面し其の裾の一部のみが河水の下刻を受けて直立してゐるのであらう。

四、黒部特有の地形に關する方言

偕て、此の稀なる峡谷の種々相は山民に依つて如何に呼びなされてゐるか、其の中には黒部特有と思はれる地形名も含まれてはゐるまいか。此に就いて私の知り得た處は左の數語である。

信州側山民の地形名

瀬戸、澗、澤。

越中側山民の地形名

吊懸谷、窓、廊下、谷(ダン)、割れ谷。

信州で云ふ瀬戸、澗等の名稱は全國に普及してゐるものと殊更ら異つた内容を持つものとは思はれ

影坡氏黨 中田 層断な事見の岸河側山立 潭 神



ない。そして黒部の特色を指すには餘りに物足りないものである。矢張り黒部は越中のもののであるだけに越中側では良く其の要を得た名稱が行はれてゐる。吊懸谷、割れ谷等は楔形に切り込んだ本谷は固より Hanging valley を爲す支流の瀧と瀨の連続し來る状をよく現し、併せて其の極めて鋭い斷層谷であるといふ意味をも含めてゐるかの様である。吊懸谷を仰ぐと上端は多くU字型に碧空を切り取つて正しく「窓」といふ感を與へる。實に窓なる名稱は勝れたる着眼である。劍岳の大窓、小窓等は誰も知る處であるが其の他廊下から仰ぐと到る處に此の窓を發見するのである。又其の位置の高さも様々である。立山山脈の東側は一段下つて二千米臺の棚狀地をなし其の上に仙人山、池の平、黒部別山、丸山、内藏助平等が並ぶ。第一圖では F・D・G・E の列である。其處に流れ集まつた雪解水が恰も堤防を破つて溢流する濁水の勢を以て直立に近い壁を黒部本流眼掛けて落ちて行く。其の堤防の抉り口こそは自然の窓の形成せらるゝ部分であつて、谷底より直接に此の窓の列を仰ぎ得る事が黒部の大きな特色である。又其の窓の列は斷層線の位置を示す場合もあり、又其の低所にあるものゝ中には最近の浸蝕の起る前の支流の落口を示すらしいものもある。後立山の鳴澤岳の西側から眺めると此の形勢は明で内藏助澤の窓等は實に大きく窓の感を失つてゐる程である。

「廊下」なる名稱も亦他に聞かぬ處である。辻村太郎氏の「地形學」には「信州山民の所謂廊下」と説かれてゐるが、此は越中山民のものであるらしく冠氏も此を認めて居られる。兎も角も谷壁 (Tal-schance) を壁と見立て、河床全體を廊下と見た一種不可思議なる觀察と比喻とに依つて作られた名稱である。私等も以前には谷壁の基部に岩石段丘があつて其を「廊下」と云つてへずつて行くものばかり考へてゐた。石井氏等も此の仲間であつたらしい。

信州側で「澤」と云ふものを越中側で「谷 (ダン)」と云つてゐるのは別に問題はない。針ノ木澤を針ノ木谷、越中澤を温谷と云ふ行き方である。けれども少しく黒部に親しむと此の「谷」といふ言葉

が何處か澤とは異つた偉いものを指してゐる様に思はれて来る。岩石の裂罅へ水の滞り行く様なもの姿が「谷」によつて表はされてゐる様な、併し此は只氣持の上だけの事であるが。

五、平から棒小屋まで

平小屋を出て日電歩道に従つて東岸を降つて行くと赤澤岳から西に派出する尾根の上に猫の耳の形をした巨岩の亂立するのを認める。水邊に此を仰がんと河原に降れば直ぐ下流に小スバリ澤の落口が見える。本流に向つて舌状に押し出された漂石の著しい堆積があり、其の中を迫る様に流れて来た水が堆積の末端に来て數米の段を作つて本流に注ぐ。此處に始めて針の木谷や、温谷の落口に見られなかつた不協和的合流を見て下廊下に近づきつゝあることを思ふ。

小スバリ澤と大スバリ澤との間に小さな無名の空澤がある。此を西岸から眺めると見事な崩石の状である。此から愈々岩壁が眉に迫る。

大スバリ澤と御前澤との中間の西岸に日電の工事場があつて其處に宿を借りる。東岸を見るとピラミッド型をなして其の鋭い角を天に向けてゐる花崗岩の壁がある。將來貯水池の堰堤が此處に作られる時其の一端の託される壁であるが會社の爲めに地質調査をされた平林教授が首をひねられたといふ斷層らしい怪しい裂線が左下から右上にかけて巨岩の裾を貫いてゐる。それが數十米を隔てた對岸の夕暗の中に何時までも見えてゐた。

翌日は舊東信道上り鳴澤岳の山腹から大タテガビンを見る。南北に走る黒部別山の最南端を黒部川へ切り落す壁である。幾重にもピラミッドの浮彫を重ね上げた様な型である。追分の尾根に坐して靜かに此を見れば指呼の中とは此の事であらう、岩石の細い縋の一つ一つがお濠の石垣でも見る様に判然と見える。四谷丸太を立てかけた様に、或は又銃の型と云つた方が良いかも知れない。兎も角も

そんな風に幾本かの斷層線が縦に貫いてゐる。其の間に挟まれて水平に近いのや垂直に近い岩層が入り亂れてゐる。全體の線が相待つて櫓に組み上げられた足場の様である。

此から下流は驚く程斷層線の入り亂れた絶壁の連續である。日本電力の設計圖を見ると、黒部別山の腹に隧道を穿つて水を導く事になつてゐるが此の工事を始めたら此の邊が何んな箇所であるかはつきりわかるだらうと思ふ。

六、岩石段丘の發達

棒小屋泊り場に天幕を張る。此の平は猫の額程ではあるが堅い岩の棚である。河水からは十五米程の高さ、對岸少しく上流に同様の棚が微かに認められ其と此とが對立してゐる。泊り場から水邊に降るには一段の石階を降らねばならぬ。降ると其處は矢張り低い岩の棚である。これが水面上二米位の高さですつと上流に續いて行く。十字峽へは暫くの間此の棚の上を行くのである。此が正しく岩石段丘である。別宮氏の測定に依ると河幅は十五米段丘に於て三十八米ある。そして河身が少し屈曲してゐるから岩岸の陰に僅かながら砂礫層の堆積を見る。増水の時はず水面上十米の邊まで來るらしい。其の邊に僅かな段があつて岩石の色が異つてゐる。稀には水面が十五米段丘の表面に近づく事もあるらしい。(第三圖及第四圖參照)

次に東谷温泉附近を見ると此處にも岩石段丘が發達してゐる。温泉湯は段丘中に作られた甌穴の一つに導かれ飛沫を浴びる様な低い位置に假の浴槽を満してゐる。吊橋の下手に巨岩があつて其の中にも甌穴が穿たれてゐる。東谷の水は浴槽を載せてゐる同じ岩石段丘の上を越して數米の瀧をかけて注いでゐる。段丘の高さは約五米である。

棒小屋泊り場附近では段丘の高さは二米と十五米の二種で二段に認められたが、東谷では五米が一

段であつた。何分にも川通し踏査する譯に行かない。又事實に於て段丘は決して川筋全體に亘つてゐる様な事はないらしい。併し流路の屈曲する部分はず外側に多少は發達してゐる事を認め得た。

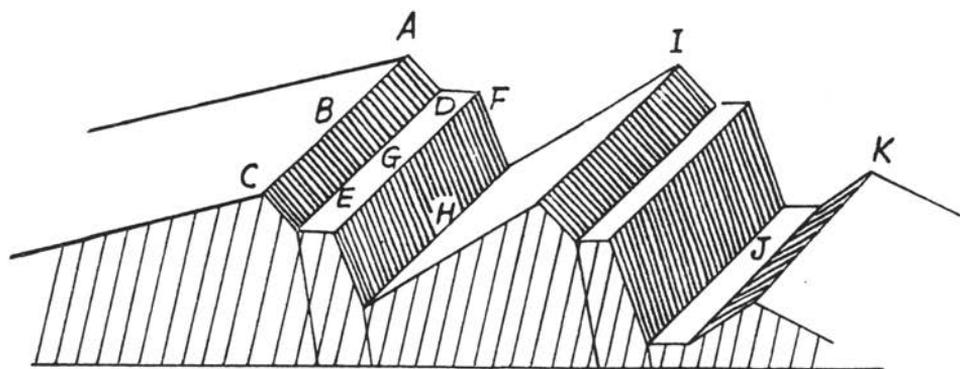
上廊下には此の種の段丘は未だないのでないかと思ふ。さうすると下廊下の段丘は可成り新しいもので現在も隆起が繼續してゐる證據になつてゐるのかも知れない。さう考へて來ると棒小屋泊り場に於て二米であつた下段の段丘が東谷に於て五米になつてゐる事實にも意味があるらしい。即ち現在を支配しつゝある浸蝕が下流より漸次上流に傳はらうとしてゐる狀況であると見られるのである。

七、神潭の斷層河岸

棒小屋の泊り場から後立山側の二米段丘上を上流に進むと河流の屈曲が止む處で段丘も終りて絶壁となる。其處をピトンとロープで通過すると十字峽に達する。峽見ヶ丘といふ巨岩の上に立つと先づ正面に本流の上流を見る。そして右手から來る劔川と、左から落ちる棒小屋澤の瀧しぶきを浴びる。谷が極めて狭く壁が高いから井の中に居る感である。摩天樓に圍まれたアメリカ町の陋巷の感である。十米の距離に近づいて居ながら未だ川の落合に來た事に氣付かなかつた程である。それ程であるから陸地測量部の五萬分の一圖に誤記されてゐるのも無理はない。冠氏は此處の光景に對して實に適切な名稱を與へられたものである。十字峽とは正しく直交する斷層線に沿つて穿たれた楔形の鋭い谷の交叉を表すにふさはしい言葉である。二つの支流は一度斷層線を利用して流下した以上永久に其の因となり、其れ自身を深めることを許されてゐるが決して左右に其の位置を變ずることを許されてゐない。運命的な偶然が此れ程はつきり見えることはない。

此處から棒小屋の瀧の中間を渡り、長次郎越をロープで匍ひ上つて十字峽の上流數百米の河岸に降る。此處が冠氏の所謂神潭である。棒小屋の落口の釜が稍々上流に向つて口を開いてゐるので此處か

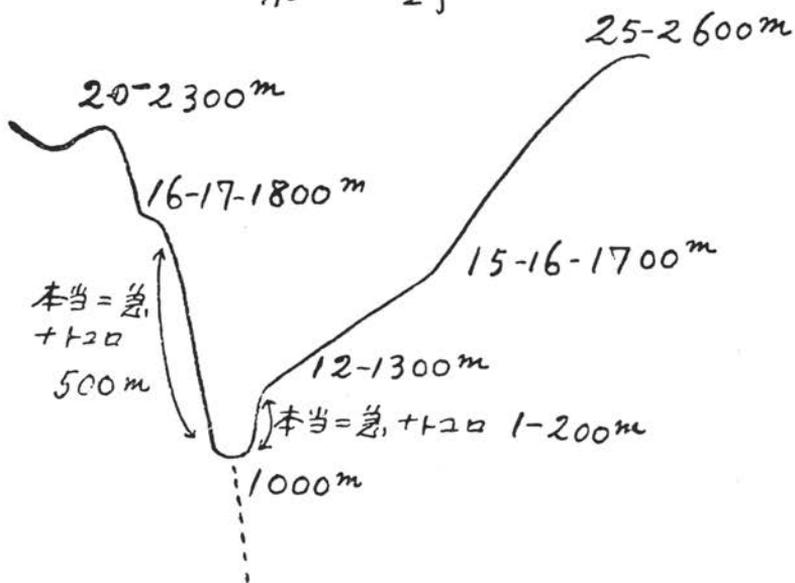
第一圖



A 劍岳 B 雄山 C 淨土山 D 池平
 E 内藏助平 F 黒部別山 G 丸山
 H 黒部川 I 後立山山脈 J 姫川 K 筑摩山脈

〔飛驒山脈北部假想斷面圖〕

第二圖

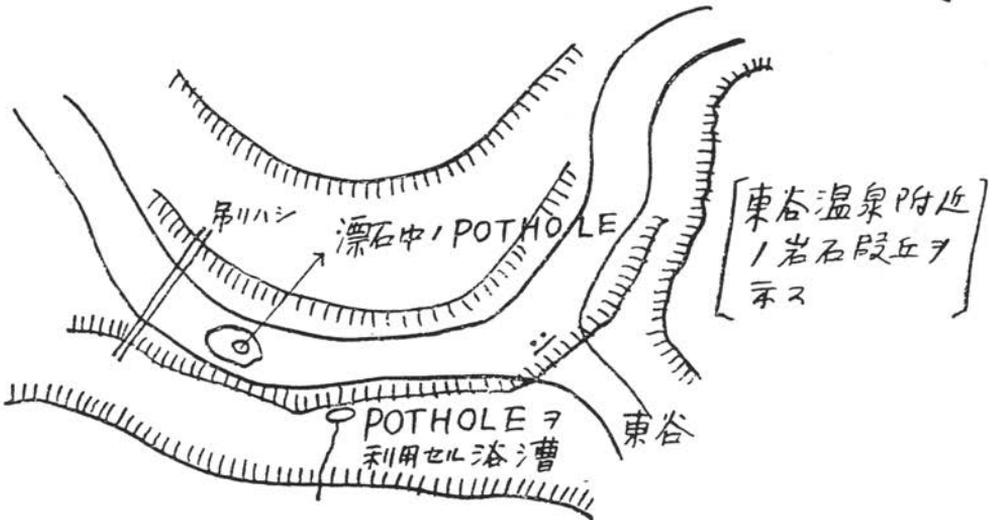
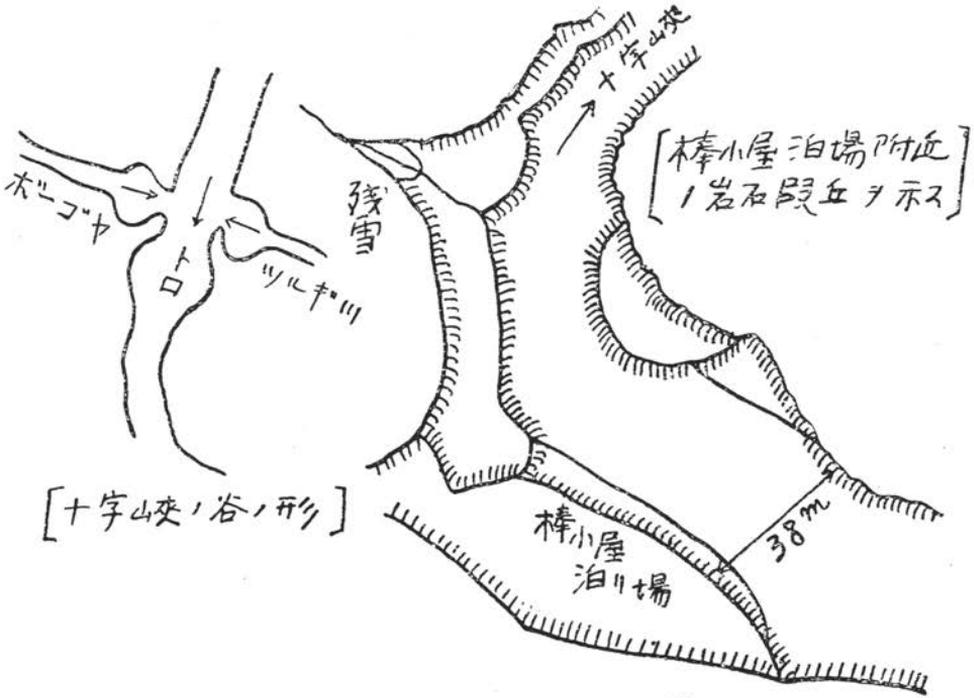


第三圖

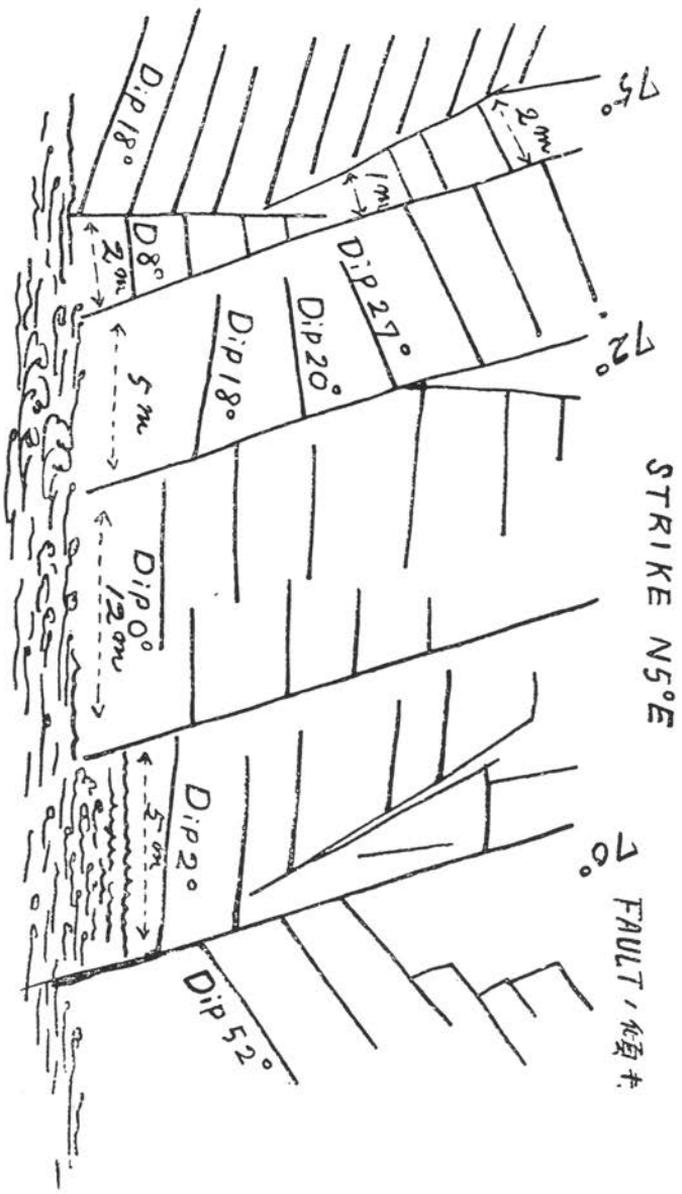


[棒小屋泊川場附近, 谷, 断面]

第四圖



第五圖



神潭泊り場ヨリ對岸ヲ見ル

ら見ると十字峽の構造は下流からよりも割合に早く見て取れる。これから十字峽の釜に滑り込まうとすす前の水が一層激しい咆哮を續けて奔流してゐる。その白泡を隔とし立山側の岸を見ると、其處に見事な斷層の標本が作られてゐる。第五圖は對岸よりの粗略な見取圖である。七十度程に傾いた斷層の滑面が平行して數條、殊に中央の二條に挟まれた部分は十二米程の幅を有する岩柱となつて菱餅を立てた様に河中に突出してゐる。そして左右の同様の岩柱は岩質が脆い爲か斷層に付きものゝ弱層になつてゐる爲か深く水蝕を受けて同じ菱餅狀に凹入してゐる。此の斷層の走向は略々東西で此に應ずるものは不明瞭ながら後立山側にも認められる。それ故此も又本流に直交する斷層であつて優に劍川たり得たる資格だけは備へてゐるのである。實に此の邊は小斷層の網狀に密集してゐる處でその爲に思ひ切つた谷の構造があるのだと云はなければならぬ。

黒部川の溪谷は下流樺平の邊から安山岩となり、石英粗面岩となり、鐘釣山附近で美しく堅い石灰岩に出遭ふが、上流の殆んど全部は花崗岩を穿つものであつて谷が極めて明く井の底の様な河床にあつても尙ほ明快である。峽の核心に進めば滑らかに研磨された花崗岩の面に赤褐色の水彩が施されて其れが何か廊下でなければ見られぬ色の様に思はれる。私は早く上廊下をも見て置きたいと思ふ。

(昭和三年一月稿)

附記。廊下なる語は疑ひもなく信州語である、越中の入夫はカベとはいふが廊下とはいはない。若し今廊下といふ語を使つてゐる者があれば、それは近頃覺えたのであらう。私は三十餘年前に平の小屋に泊つた時、其處にゐた信州の岩魚釣から初めて其言葉聞いた。恐らく此語は黒部別山附近まで釣りに出懸けたことのある遠山品右衛門などの創唱に係るものであらう。

(木暮)

黒部川上流の印象（カベケ原に就いて）

角 田 吉 夫

これは今年の七月の末に、友人一名と黒部川の上流をほんたうに僅かの日数ではあつたが、訪れた時の印象である。

黒部川に就いては既に昨年夏、山岳二十一年第二號黒部號に冠松次郎氏の發表された記文があり、又友人田中菅雄氏は今年六月發行の「山想」第二號に黒部川の源流より平の小屋迄の紀行を載せてゐる。僅かに源流より薬師澤までしか歩かない私が黒部川に就いてかれこれ論じ立てるのはおこがましい話ではあるが、上廊下、下廊下と天下の嶮を以て著名な黒部川の上流には、想像だけに許さなかつた程、のび／＼とした静かな流れのある事を再び此處に御知らせ致し度いのである。

私達の今度黒部川に入つた理由は、殺到する登山者の群から離れて暢氣に鯿を釣りながらキャンプをする希望であつた。

今迄特殊な人のみに限られた感じのある黒部川も、上廊下迄及び薬師澤は恐らく何人にも親しむ事が出来ると思ふ。即ち澤は比較的水量の小さい事、急流でない事及び草原の豊富な事等である。高原といふよりは寧ろ草原と感ぜられる平地は、地圖に現れた以上に廣く且つ數多くある。源流から云へば祖父澤落口の東に祖父平（又は奥平、日本平）と稱するもの、五郎澤落口の東に出水平（上平又は芋平）と呼ぶ美しい草原がある。而し之は祖父平程の廣さはなく、兎平と同程度のものである。兎平

とは赤城澤の瀧の上へ黒部五郎岳より發して北流して落込むクマノ澤の東の草原。又赤城澤落口の對岸にも相當廣い草原を見た。

次にあるのが薬師澤落口附近南面のカベケ原である。このカベケ原の名は有峯の人々が呼んだのが起りだと聞いたのであるが、何町歩あるか一寸豫測も出来兼ねる程の廣さで、今迄述べた草原の總てを一緒に合せた程もあらう。高い位置にある五色ケ原や彌陀ケ原の如く、偃松帯ではなく、均衡のとれた美しい、すつきりとした枝をひろげた唐檜、梅などの針葉樹帯に緑の草原が程よく織り混せてある。南には黒部五郎岳の迫つた岩膚を仰ぎ、北には薬師岳の一角を梅の樹間に眺め得られる風情は、第二の神河内と言ひたい所である。

要するに薬師澤落口までの黒部川は、草原の中をぬつて流れてゐる様な感がある。

薬師澤落口から太郎兵衛平迄は昨年まで數年間試掘に入つてゐた其鑛山の道が出来てゐるので全然澤傳ひ、岩へズリの苦もなく、薬師岳を仰ぎ三俣蓮華岳を振り返りつゝ二時間もあれば太郎山の高原に達することが出来る。道は三尺程の立派な切開けになつてゐて、落口より三俣までは左側を通り、左俣を渡つて中俣との尾根を越し、中俣の右側を上の上の二俣まで行き、尾根を傳つて太郎兵衛平に出てゐる。

このカベケ原に就いては冠松次郎氏も田中菅雄氏も川傳ひに歩かれたので、別に書かれてはゐない様である。實際川沿ひに来ては一寸氣付かない所であつて、水面より三、四十米程熊笹の密生した斜面を登り切ると、其處に廣大な草原の展開されるのは驚く。カベケ原には二十年近くも毎年來てゐる島々の上條新一といふ鯒釣の小屋があり、側には清水の小さな流れがある。この小屋は夏より秋の初めまで建て、あり、歸る時は再び屋根板から棟木まで下ろして行くのだと聞いてゐる。(小島島水氏著日本アルプス第二卷一四六頁参照)

一一

七月廿八日。晴、夕立。五郎澤まで。

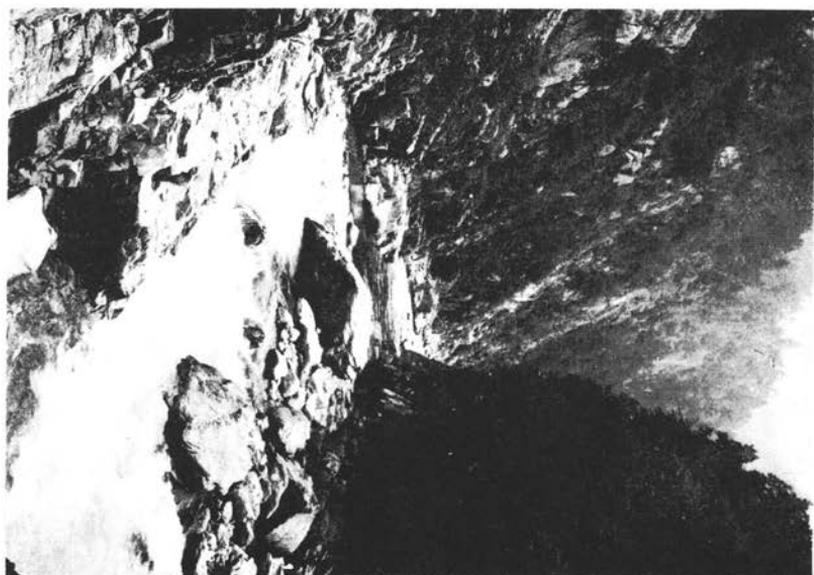
七月の中旬から下旬にかけては天候の安定する季節であるが、今年は調子悪く十六日から毎日雨が降り續き、上高地と中尾にブラ／＼暮し、十日目の廿六日にはどうやら天候も定つたので笠の小屋へ登つたが、此の日も午後は長い夕立に會つてゐる。廿七日の双六小屋迄の一日が、ほんたうの夏らしい天候だつたと言へよう。

双六小屋迄食料をあげさせた人夫を中尾に歸したので、廿八日の朝は珍らしく早く起き、午前六時半にはもう双六小屋を出て三俣蓮華の小屋に向ふ。乗鞍の山頂に一片の雲を見たゞけで、後は澄んだ青空のみ、黒部への旅を祝福する様である。

三俣蓮華の小屋に九時着。客の出た後の小屋はこんな晴れ渡つた日には實に長閑なものだ、小屋の若主人も一日の滞在をしきりと勧めてくれた。私達の黒部に入る事を聞いて、明日は島々の上條新一が薬師澤へ小屋を建てに行くから一緒に رفتらどうかと話してくれた、そして今日は湯股川へ魚釣りに行つて留守だと云ふ。上條新一といふ人は昨年の夏、私と一緒に烏帽子の小屋で一週間降り込められ、顔見知りの事とて私達も彼との同行を望まない譯ではない。然し未だ時間も早いし、どうせ同じ川を下るのなら先へ行つても會へるので、滞在よりは早く下つて錨を釣る事にした。上條老人（未だ四十五歳の働き盛りの彼を老人と呼ぶのは失禮かも知れないが、私は親しみを以て老人と言ひ度い）は先年冠氏も薬師澤附近で會つた人で、當時彼が島々より徳本峠を越え、槍より西鎌を通つて三俣蓮華より黒部川に下つて錨釣りに來てゐるのを聞いて驚き、且つ黒部気分であると云はれてゐる。然し現在は又その島々より黒部川へのコースを變更してゐる。昨年もさうであつたが、彼は今では大町よ



磐澤落口の壁



榛小屋泊り場より十字峽に続く岩右段丘

り高瀬川に沿うて入り、濁小屋より山毛樺尾根を登つて烏帽子小屋に泊り、三ツ岳、野口五郎岳などを越え三俣蓮華に来るのである。彼に云はせると徳本峠を越えるより、寧ろ樂であると言つてゐる。尙ほ烏帽子、蓮華小屋共に親類關係である事もそのコースを變更した一原因であらうけれども。

十一時、草鞋と若干の食料を補充して黒部川の源流へと下つて行つた。細い路ではあるが暫らくの間は明かについてゐた、魚釣りの道である。間もなく澤傳ひに緩かな斜面を下つて行く内に三箇所程雪で本流を埋め、長い雪溪となつてゐたので歩行も著しく捗つて行く。田中氏から聞いてゐた岩小屋は小屋から三、四十分で行けるとの事であつたが、雪に埋れてゐる爲に遂に發見する事も出来ず、ただそれらしい岩を見たゞけで下つた。雪の残つてゐる箇所は三俣蓮華側から出た大きな雪崩地の様である、岳樺などの折れたのを見たし、後に會つた上條老もさう云つてゐた。

右側を澤傳ひに一時間程下ると可成り水量も増し、徒渉もありさうなので、大きな石の上で靴を草鞋に履き替へた。私達は正直に澤傳ひに歩いて來たが、右側の草の中には罾釣りの歩く道が出来てゐるのだ、明かに見分けは出来ない迄も踏み跡がある。

川沿ひに歩いたり、道を行つたりして二、三十分も下ると祖父平の廣い草原に出た。此處は可成よく踏み跡もわかつたので、しばらくは澤の響も遠くに聞きながら暢氣に下る。黒部五郎岳の雄大な姿と上の岳の高原を眺めながら、そしてその後浮ぶ白い大きな入道雲を氣にしながら行く。間もなく祖父澤へ出た、本流への落口の僅か程上流であつた。

祖父澤の落口へ出て、道も見當らないので澤傳ひに下ろうと思つてゐると、大きな岩蔭に罾釣が一人ゐる。先方では不思議さうな顔をしてゐた、しかし私達は小屋で主人が魚釣りに下つてゐると聞いてゐたので、むしろ會つたのが待遠しかつた様な氣がした。魚籠を覗き込むと、既に八分目程罾で満たされ、見てゐる前でも二、三匹釣上げた。

薬師澤落口迄行く事を話したら、水量の多いのを案じ、鯿釣の通る比較的浅い徒渉箇所を知らないと危険だと言つて心配してくれた。要するに今の水量は盆過ぎに比べて四倍もあり、赤城澤附近から悪くなるこの事である。私達は別段急ぐ旅でもなし、明日になれば上條老が来る事もわかつてゐるので、五郎澤出合の出水平でテントを張り鯿釣りに半日を送る事に決めた。

出水平にテントを張つたのは午後一時。源流より二時間足らずで来てゐる。此の草原を中心として送つた午後の半日は眞實にのび／＼とした生活であつた。太郎兵衛平の上層に現れた美しい大きな入道雲の刻々と面白く變化して行く様は、何時まで眺めてゐても飽く事を知らない。

又五郎澤の落口の白い岩の上に腰を下して糸を垂れると、元氣のいゝ魚は岩蔭から身を跳らして、毛針に飛付いて来る。最初に糸を下した時であつた。餘り大きな魚の爲に一つしか持たなかつた毛針を残念ながら持去られてしまつた。然し黒部川の鯿は未だ岳の雷鳥以上に人を恐れず、體に止まる蛇をつけても、水中の岩蔭にゐる小さな蟲を餌にしても飛付いて来る。針とか糸の撰擇に苦しむ事もなく樂に釣れるから面白い。

魚釣りに夢中になつて日の暮れるのを忘れ、今日の收穫の鹽焼を食べ終つたのは八時過ぎであつた。夕立の來たのを幸と、明日の薬師澤附近の鯿の大きさを思ひ浮べながら消燈。

七月廿九日。快晴。薬師澤まで。

九時に上條新一老人が下つて來た、大きな荷を負つて、左手には長い釣竿を持つてゐる。大急ぎでテントを疊み、重いリュックサックを負つて歩き出したのが十時十五分前。

五郎澤の出合迄は左側を飛石傳ひに下り、落口の下手で右側に涉つた。膝を一寸没した程度の深さである。此處から兎平迄約半里の間は河原を離れ熊笹と草地の中を朝露にぬれながら行く。

毎年夏が來れば訪れる彼にとつては、自然と道が出來てゐて、それは總てに無理がなく最も樂な所

を通り、浅い所を徒渉してゐる。三、四十分も歩くと兎平へ涉るべく河原に出る、老人はしきりと徒渉箇所を探してゐる様だ。然し聞けば徒渉する所の石が一つ無くなつたと言つてゐた、今度の増水で押流されたのであらうが、彼は澤の石一つに迄變化の起つたのを知つてゐるのには驚いた。増水時にかゝはらず、對岸に樂に越した所が兎平である。緑の毛氈の中に白いバイケイ草の花が咲亂れてゐる。そして兎の豊富な事によつて名付けられた平だけに、一面に草は踏みにじられてゐる、兎の亂舞の跡であらう。

十分程歩くといよ／＼赤城澤の壁が現れて来る、此處で又右側に移り、氣持のいゝ草原を流れに沿うて下る。赤城澤落口の深淵を眺めながら、やゝしばらく下つて河原に出る、この附近より澤も黒部川らしくなり、さすがの魚釣の道も二箇所程ピッケルを置いてへズル所がある。

僅かの岩壁ではあるが、岩へズリから解放された所が廣河原になつてゐる。丁度本流が右へ大きく曲つてゐて、對岸には川柳が密生してゐる。此處を對岸に渡つて、少し笹を分けて登つた所がカベケ原であるが、老人の同行がなければ私達は藥師澤落口の本流に架けられてある蓬萊橋迄行つてしまふであらう。然しカベケ原へ到る登り口が不明の場合は藥師澤より僅か上流に、落口が三米程の瀧になつてゐる小さな澤を登れば、魚釣の小屋の側に出る事が出来る。

熊笹の急斜面を登り切ると其處がカベケ原である。想像以上に廣い平であり、その草原の南に盡きる所が黒部五郎岳となつてゐる。時に正午である、出水平より二時間十五分で來てゐる。

小屋は柱と棟木のみが残されてあり、他の總ての材料は側に、冬を越して積まれてゐる。要するに小屋は組立てるばかりなので、大した時間も要さず屋根板を葺き、石を置き、四方は板を立てかけ、米梅の枝を指込むだけである。二時間足らずで、七、八人は充分に泊れる立派な小屋が出來た。老人は附近の何處かにある倉庫と稱する大木の洞から、鍋を初め、あらゆる食器類を運んで來た。

小屋も出来上り、一服した後で、期待してゐた魚釣に出かけた。然し鯿の姿は何處にも見えず、一時間に七匹といふ不漁さであつた。水量の多い爲に岩に水苔が附かないからだと言はれた。私達の竿に一匹もかゝらなかつたのはむしろ當然であらう。

眞實にこのカベケ原の四圍の眺望は幾度小屋の外に立つても美しかつた、この川にこの廣い草原のあるのが不思議に思はれる程である。薬師岳の一角が赤々と照る夕べも、月が黒部五郎岳の残雪を青白く輝かす夜も又とない、忘れる事の出来ない眺めであつた。

翌日も晴、終日薬師澤を中心として老人と共に鯿釣に面白く暮し、老人は魚籠に五十匹程、私は飯盒に一パイといふ收穫をなした。夜は鹽焼、鯿めし、鹽からといふ鯿攻めに會ひ、歸京の土産迄も出来た。

卅一日はカベケ原に名残りを惜しみつゝ、厚く御世話になつた上條老人に別れを告げ、薬師澤を登つて太郎兵衛平に出て、眞川、有峯を経て大多和の農家に一泊、飛驒街道を富山に向ひ、こゝに黒部川の旅は終りを告げた。

三

黒部川の上流に就いて、くどくしく書立てた事は、上條老人に教へられた魚釣の道に就て詳説した爲である。源流より來るも、五郎澤を下るにしても薬師澤迄は、河床傳ひに來ても増水期を除けば決して不可能なものではない。然し鯿釣の如何にも當を得た歩方に感服し、之を知れば如何なる増水期でも腰を没する様な徒渉の苦はなくなり、自由にカベケ原の仙境を訪れる事が出来る譯である。又薬師澤につけられた鑛山の道も、深く草原に苜分けられ、或所は掘下げられた道であるから、小さな橋は流されてゐるけれども、直ぐに消失する様な事もなからう。



屋小の釣魚岩原ケベカ



岳ノ上と瀑の口落澤城赤
影撮氏夫吉田角

藥師澤の眞の價値は矢張り河床傳ひに岩壁をへズリ、左岸、右岸と徒渉をする所にあるが、鑛山の道も決して失望する様なものではない。カベケ原の延長の様な草原が幾度も現れ、赤牛、黒岳、鷲羽を初め、黒部五郎岳に續く山稜を針葉樹の間に仰ぎ見る事の出来る所である。

源流よりカベケ原までは四、五時間、上の岳の小屋より藥師澤を下つても二、三時間あれば充分に達せられる。上條老人の話に依れば、今年中には完全な小屋を建て、魚釣りの側、登山者を歓迎するとの事である。私が最初の晩は鯔食べほうだいの條件を付けなければ駄目だと云へば、老人は承諾し、むしろ鯔攻めを得意とする様に見えた。確實に、鯔の鹽焼に、鯔飯を出せば、如何に鯔を望んで來た人も翌晩は閉口するらしい。

又近い内に奥ノ平に切開けを付けて、黒部川に入る人の便に供すると聞いてゐたが、彼一人の手でやるとすれば短時日に出來上らないであらう。

然しカベケ原に完全な小屋が建てば、私達には又新しい別天地が現れた譯である、以前の上高地の様な仙境が。

カベケ原を思ひ浮べつゝ。(三・八・七房州館山にて)

冬の大朝日岳附近

別宮 貞俊

昭和二年一月二日―八日

二日 鮎貝―朝日鑛泉、三日 鑛泉―二ツ俣小屋、四日 鳥谷原山に登る、五日 平岩山に登る、六日 小朝日岳に登る、七日 御影森山を経て、朝日鑛泉、八日 朝日鑛泉より鮎貝、夜行にて歸京。

一行 岩永信雄、別宮貞俊。

案内者古川政治、人夫後藤熊藏、今 文三郎。

朝日鑛泉迄

大正十三年の紀元節の休みに、沼井君と朝日鑛泉をスキーで訪ね、袖朝日へ登つて以來、私は外國旅行に出るし、歸つてからは病氣のため、其後の朝日行には、沼井君等と行を共にすることが出来なかつたのは實に遺憾であつた。只山葡萄の搾汁を飲みながら、皆の氣焔に聽き入つて、過ぎた愉快な山旅を想ひ起して居た。

昭和二年の一月には、私の足の調子も良いので、岩永君と相談の上、行く先は一議に及ばず、大朝日岳麓の二ツ俣小屋に決めて了つた。いつも一所の沼井君が遠く臺灣に居るので、非常に物足りない氣するのも致方ない。元日の夜の奥羽線急行で出發する。幸ひ列車は空いて居て樂であつたし、殊に好都合なのは、列車時間の改正のため、急行が赤湯驛へ停車して、長井線に連絡することであつた。以前には米澤で緩行列車に乗り換へ、そしてまた赤湯で長井線に乗換へなければならなかつた。

米澤驛の歩廊で緩行列車の仕立を持つ間、まだ夜は明けず、淡雪のちら／＼降る、そのわびしさを私はよく覚えて居る。

始めて来た時は、行く手に對する不安などや何かでよく氣にも留めなかつたが、列車がまだ鮎貝には餘程間がある邊から、日影大平の大斜面が眞白な屏風を立てた様に見えたので、岩永君と一所に第一回の快哉を叫んだ。

鮎貝の停車場には、古川政治、後藤熊藏の兩名が待つて居て、先づ政治の家で一と休みして支度をする。荷物も大してないつもりで、最初はこの二人だけを連れて行くつもりにして居たが、荷物をまとめて見ると、やはり相當に量高になつて居る。丁度そこへ、最初の年に連れられた今文三郎が、客にあぶれて來合したので、頭殿越しの困難を慮つて、文三郎にも行つて貰ふことにした。

鮎貝の町で鈴木太市氏の宅へ一寸寄る。僅の間に鮎貝も大分開けて、電話も出来るし、郵便局も見かけは西洋式の建物になつて了つた。道路には雪は殆ど無く、赤土で文三郎の家へ寄り、早速水瀝しをして了つたので、シッを一枚脱ぐ。

途中は別に變つたことはなく、橋下の橋を渡つて、一息登つた所でいつもの通り一と休みする。中平を過ぎて、日影の上へ來た所で、始めてスキーをつけ、横澤庄松氏の家へ着いたのは、正午を少し廻つた頃だつた。

朝日鑛泉からは、房吉、徳次の二人が丁度用事もあつたので、吾々の一行を迎ひがてら來て居たので、案じて居た頭殿の雪の模様も判つて、すつかり安堵して了つた、頭殿越しに、まる一日もかかつては、少い休みが益々利用出來なくなるので、その話を聴くまでは心配の種であつた。

中食をすまし、スキーに海豹ウミネコをつけて鳥小屋峠に向ふ。人夫達は踏めた所を行くし、吾々二人及び鮎貝から一所に横澤方へ泊りに來た政治の息子と、そのスキー相手の庄松氏の息子との四人は、都合

のよい斜面を足にまかせて登ることにする。太陽の光こそ見えないが、遠方がよく見えて、日影大平の大斜面が登るに従つて展開して来ると、尖山の形がまた段々變つて見えて来る。雪は割合に固かつたが、峠の上まではやはり小一時間かゝつて了つた。荷を持つた人達もすぐに到着した。一と休みして二人の小供と別れ、吾々はいつもの道を頭殿に向ふ。山左の斜面から一寸した鞍部を越して、山右の斜面を登り切ると間もなく、痩せ尾根の所へ出る。今迄私が此所へ来た時は、二回とも曇つて居て、この痩せ尾根から頭殿に連る山稜——ナベコワシ——を明瞭に見ることが出来なかつたが、今日は始めて、曇つてこそ居れよく見える。近か相に思つて居たが、眼のあたり見て見ると、頭殿の頂上は中々遠い。雪の状態が良くないので、此所で私達はスキーを脱いで輪カンジキを穿いた。今日はしかし、實に良い日だつた。雪もぬからず、また此の痩せ尾根で風にも遭はず、太平樂を並べながら、水漚しをして歩くことが出来た。そしてナベコワシ——ゴンスケザカを通過して、頭殿の第一直下、雪庇の下で休憩をする。

再びスキーを着けて、頭殿第一峯から第二峯(主峯)を越したが、大朝日方面は見えず、ヌルマタ澤の源流が美しく展開して来る。やはり海豹をつけたまゝ、主峰から滑降して、後小さな隆起を登つたり、下つたりして、漸く最後の降りにかゝつたので、始めて海豹を外す。今年はまだ雪が少く、十三年に來た時の如く、ヤブが相當に出て居るので氣樂な滑降は出来なかつた。何度となくキックタインをするので、中々陟らず、三分の一も降らない内に、日がすっかり暮れて了つたのでスキーを脱ぎ、輪カンジキに換へて、ラテルネの光で足許を注意しつゝ、鑛泉へと急いだ。房吉、徳次の二人は、日が暮れない内に鑛泉へ歸ると云ふので、吾々より一と足先きに走つて行つたが、吾々が降り切つて、置賜橋へ來た時に、提燈をつけて迎へに來た。そして間もなく鑛泉の古川屋で靴の紐を解いた。

鑛泉でも三年前と別に變つたこともなく、カンジキのおとし話をしてくれた老人も達者だし、只變



上 赤城 澤 落 口 附 近

下 カベヶ原より黒部五郎岳を望む

角田吉夫氏撮影



つたことは小兒が大きくなつたこと、一人殖えて居た位なことで、夕食には例によつて、ゼンマイやバンドリが出て、すっかり山の氣分に浸つて了つた。

二ツ俣小屋まで

翌日はゆつくり寐て了つて、起きた時は八時頃であつた。静かな、實によく晴れた日で、一步外へ出れば、朝日川の源頭に、白く大朝日の頭が陽光に輝いて居る。どうせ今日は小屋まで行けばよいと云ふのでゆつくり構へ、二人が丸で競争の様に寫眞を撮つた。殊に冠さんと谷の旅にはステレオカメラがいゝだらうと話し合つてから、矢も楯もたまらず買ひ込むだコスモクラクの使用始めと云ふので中々忙しい。鑛泉宿の建物と朝日岳とを一所に入れて、寫眞をうつしてくれと云ふ政治の要求で、いゝ位置を見つけて寫さうとすると運悪く、大朝日に雲がかゝつて了つた。いくら待つて居ても晴れないので業を沸かして室へ歸り、仕度をして居ると政治が山が晴れたと知らせに來たので、大急ぎで飛び出す。何しろ雪の景色を繪葉書にたくても、冬は寫眞屋がどうしても來ないからと云ふのも無理もない。そんなことで出發が馬鹿に遅れて了つた。これから上は雪がよくてもスキーには不向きな崖際の道なので、スキーは人夫に預け、私達はまた輪カンジキを穿いた。二ツ俣の小屋へしばらく籠城するので、必要な米、味噌を持つたから荷物はまた増したが、鑛泉から徳次が一所に行つてくれるので、一行は賑かにすぐ前に架けてある橋で朝日川を渡る。そこは前年に借地して開墾し、畑とした僅かばかりの平地だが、そこに出來たと云ふ犬の尻尾位の大根が今朝の味噌汁の實になつて居た。

朝日川の右岸を二十分も行くと、第一の架橋地に着く。今までは鑛泉から、川の左岸を歩いて、ここで橋を架けて右岸に移つたものだが、橋が無いかも知れないと云ふので、足場の悪い右岸をへずつて來た。しかし來て見ると橋があつたので、左岸を來た方が遙かに樂だつたことを發見した。まだ今

年は雪が少いと云ふが、川の中の石にはやはり雪が白饅頭のように堆高く積つて居て、その周囲を冷い溪水が潺湲と音を立て、流れて行く有様はやはり冬季獨特の景色で、微風すら無く、まばゆい程の陽光を浴びて私等はいつもの様に、山に這入つて来た悦びに陶醉した。

そこから上流もやはり悪い道だ、幾分よくなつた様に聞いて居たが、来て見ると、最初の時にスキを穿いたり、脱いだりして苦闘した時と、少しも變つて居ない様に思はれる。只前途が十分に判つて居るので氣持だけは前とは比較にならない程軽い。少し高みを廻ると兩岸が迫つて、水はその深い底に暗く澱んで居る。谷淵と云ふ名所の一つで、すつかり葉を落して了つた、樹の木立をすかして、小朝日のクログラが遠く聳えて居る。そこから少し鼻を廻ると、樹の大木がまばらに生えて居て、先年袖朝日からの歸途、疲れ切つてこゝに仰臥し、梢に輝く星に眺め入つて、何處からともなく飛んで來る淡雪に、熱した頬を冷した思出の深い平である。そこを過ぎるとすぐ水際まで下り、釣橋の下手の橋を渡つて左岸に移り、すぐ上の平——孫兵衛平——で中食を攝る。食事のあとでも吞氣に日向ぼつこをしながら漫談にふけつたが、人夫達はしきりと此邊の官林を拂下げて貰つて、炭を焼いたら素晴らしいと話し合つて居る。

そこを出發する時々木立をすかして、大朝日が青空に浮んで見える、道はまた下つて水際を少し歩き、それから一寸高みへ出るとそれから少し川と離れる。コダテ澤の手前の高みからは中ツルから大朝日、またその左には平岩山方面が實に美しく眺められ、殊に中ツルの樹坂附近は、大木を一本づゝ數へられる程明かに見えるので、先年の印象が、今も昨日の経験であつた様に私の頭に甦へつて來る。私達は山を眺めたり、寫眞を撮つたりして居るので、人夫達は最早やすぐ下に見えて居る小屋に着いたらしい。コダテ澤は一寸深くえぐられて居るが、澤はやはり全部雪に埋つて居る。それを渡つて對岸に上れば間もなく、私等の數日の宿となる二ッ俣の小屋に到着した。

小屋の中には雪がすつかりつまつて居るので、人夫は中々多忙である。雪を掻き出したり、小屋から川まで行く道を作つたり、櫛の大木を切つて来ては手頃に挽いて薪としたり、——こんな時には人手の豊富なのが何よりで、見る見る仕事が始つて行く。しかし私達にはすることもないので、二人はぶら／＼黒俣澤の方まで行つて見ると、幸ひに雪で橋が出来て居るので、忙しく働いて居る人達を煩はさずに對岸へ渡ることが出来た。時間も早いので中ツルを少し登つて見ようと云ふので、岩永君が先登に立つて急な斜面を真直ぐに登り出した。こんな時こそ輪カンジキの有難味を沁々感じる。スキ一ならば中ツルのこの登りは最も苦しい所であるが、カンジキなればこそ、何の無駄もなく、只重力に對する仕事だけで、割の良い展望をすん／＼獲て行く。も少し上まで、も少し上までと云ひながら、ヒメコの連生する邊まで登つて了ひ、小屋は遙か下方になつて了つた。この邊こそ私は中ツルの最初のいゝ展望場だと思ふ。何と云つても最も印象的なのは小朝日岳である。正面に見える櫛とヒメコが縞の様に混生した斜面は鳥谷原に連り、鳥谷原から山稜はずつと延びて、甲の様な小朝日岳となる。小朝日岳の側面は周圍とは全く異つて、只岩とクロ木で、何處にも白さを見せて居ない。百間乘りの雪溪は白布を懸けた様で、どの位急峻であるかの想像さへつかない。稜線は小朝日から百間乗りの乗越——熊越——まで下つて再び上り、ヨコツツケのガンガラからずつと大朝日に來て居るのだが、大朝日は中ツルの一部に隠れて居る。昨日越した頭殿もその丸い頭を見せ、御影森から平岩山に連る邊も益々私達の遊意を惹く。殊にスキ一をやる者を惹きつけるのは平岩山の眞白な斜面——闊い大澤——である。

小屋の附近はすでに陽がかけつて了つて居るが、此所はまだ陽があたつて居るし、微風もないので私達二人はポケットに忍ばせた甘味を出しては日向ぼつこをした。そして下に見える小屋から煙が盛んに上つて、爐邊の暖さが確實になるまでは、私達はこの眺望のいゝ雪の高殿から動かうとはしな

つた。

一月三日。午前十一時二十五分鑛泉出發、午後一時孫兵衛平にて食事、一時二十分出發、二時十分ニッ俣小屋着。

鳥谷原山

昨夜は非常に暖かであつたが、夜半から大分強風が吹き荒んで居る。いつもスキーに来ると、天候のことは別として勝手なプランを作つて、大抵の場合その計畫は天候のために實行が出来ずに終つて了ふ。昨夜も楽しい夕食が終つてから、パンを焼いて今日の辨當の準備をしながら、やはり馬鹿氣た様な計畫を樹てた。先づ朝日俣澤を溯つて平岩山へ登り、それから尾根傳ひに大朝日に來て中ツルを下る。朝日俣ではどうしても四箇所架橋しなければならぬから、これは日が暮れては困る。中ツルを下るのは一度日の暮れた経験があるから大したことはない。處で平岩山から大朝日へ連るあたりのクラストが心配になるが、こゝでクラムボンをつけてスキーを擔いで行くのに風が吹き出したら困つたことなどが、散々取越し苦勞をして居たが、このひどい風、殊に雪を混へた荒天では、そんな計畫はてんで問題にならない。眼醒しを早くかけて置いたが、暖い馴鹿の寢袋の中から、二人とも中々出ようとしない。朝飯が出来たと云ふので止むを得ず、二人とも寢袋から這ひ出して、ズンベを引つけて外へ出る。ひどい風ではあるが、雪は大したことはない。しかし雲が低くて山の高みは到底見えず、只時に雲の切目から、山のクロ木がかすかに見える。

食事が終つてから、これでは到底山は望みがないので、小屋裏の鳥谷原に連る斜面で、スキーの享樂でもすることにして、政治一人を連れて出かける。すぐスキーには海豹をつけて小屋の後ろの斜面をジグザグに登り出した。ヤブがまだ可なり出て居るので、ヤブの薄い所を見當をつけて登る。少し登つたドダシの下巻狩と云ふ所で、政治は羚羊の足跡を見つけて、そしてその附近で灌木の芽を喰べ



上 朝日鏡泉より大朝日岳（袖朝日）

下 熊越シの雪庇（左に遠く御影森山を望む）

別宮貞俊氏撮影



散らかして居るのを指摘してくれた、足跡から判断して、昨日此處に居たのだらうと云ふ。

一二箇所ひどいウインドクラストになつて居て、渾身の力を込めて、スキ一の角づけをして行かなければならなかつたが、大體に於て雪の状態がよく、やがて浅い粉雪になつて、スキィの下でキユーキユー音を立てる様になつた。出かけた時より雪は大分小降りになつたが、風は中々収まらず、斷雲の間から左方黒俣澤の谷を距て、中ツルが時々チラと姿を見せる。それはまるで屏風の様で、吾々に歴しかぶさる様にすら感ぜられた。

スキィを穿いた二人は大きな樹の間を縫つて進み、カンジキの政治はともすれば遅れ勝ちになる程登りが捗つた。そして出發後丁度二時間、その間雪がぬからないので極めて樂な爲め、少しも休まずに、鳥谷原に續く尾根上の隆起（一三三〇米）に來て了つた。

風はやはり収まらないが、天候は大分恢復して來て、時々薄く太陽が見える。谷を距て、前面には鳥谷原の谷地が展開して居て、ヒメコの小さな森の中に鳥谷原の神社が見える。山をあてにせずにも、此處まで來れば天氣が悪くても頂上へ行つたらう。まして天氣がよくなつたのだから、二人は各自勝手に頂上を越して神社まで行くことにきめて了つて、谷地の寫眞をうつしてから尾根の上を鳥谷原の三角點へと急いだ。これから頂上まで二百米弱の登りであるが、雪がいゝので骨は折れず、間もなく頂上に來たが小朝日、大朝日の方面は少しも展望がなく、風はやはり猛烈に吹くので、急いでスキィから海豹を外して神社の森に向つて滑降した。體は風を切つて進む。小さく見えて居た森もすぐ近づいて、あつけない間に神社に着いて了つた。カンジキの政治は後の方に小さく見えて居る。

早速扉を開けて中に這入ると大分中には雪が吹き込んで居る。この神社こそ先年沼井、岩永、吉田の三君が風雪に閉ぢ込められて、煙に苦しむた所であるが、今日こそこの建物のお蔭で、暖かく中食を撮ることが出來た。炭を上げて置いて、此處に籠城すれば申分ない享樂が出來るが、惜しいことに

は少し狭過ぎる。今しがた滑降して來た頂上からの降りも實にいゝ場所だが、神社から下手、暫くの間も尙この状態が續くらしい。小さな凹みを隔で、すぐ前には所々にクロ木のある谷地がずつと擴がつて居る。

一時間ばかり小屋に居て出發する。風は益々強く、顔が痛い。頂上に戻つて、それから尾根通し一三三〇米の隆起まで下る。雪がいで面白程滑る。こゝで一と息入れてから、大櫛の生えて居る斜面を下り出す。少し下りると私のスキーが非常に重くなつた。瘦我慢は損と知つて居るので、早速ワックスをつけにかゝつたが、バラに使ふメタがこの強風で中々うまく燃えなかつたのには少からず閉口して了つた。そんなことでワックスをつけるのに小三十分もかゝつて了つた。そして小屋へ着いた所が、下では雨が降つて居た。雪の重かつたのも無理はない。

まだ午後二時頃なので、明日は平岩山へ行くことにして、政治と文三郎とは朝日俣へ架橋工事に出かけて行つた。私達はすぐ爐邊に腰を据えて、漫談に花を咲かした。やがて二人は三箇所へ橋を架けて歸つて來た。そして食事をすませてから、私達は今朝見た足跡の主の羚羊を逐ひたくなつて、巻狩の計畫を立てた。

先づ明日は私達二人は政治、熊藏の二人をつれて、平岩山へ遊びに行き、文三郎は鑛泉へ下つて應援を頼む。鑛泉で皆が都合が悪くて來られなければ仕方がないから、文三郎は再び小屋へ食糧の不足分を持つて歸るし、若し應援に來て貰へれば明後日一同と一所に小屋に登つて來る。私達はそれで最早アヲを一匹手に入れた様な氣になつて、その夜は政治から熊の話や、アヲの話の聽いて面白がつた。

一月四日午前七時五十五分ニツ俣小屋出發、九時五十五分一三三〇米の隆起、十時三十五分頂上着、十時四十五分鳥谷原神社、一時四十五分出發、正午頂上着、零時三十五分一三三〇米の隆起、一時五十分ニツ俣小屋歸着。

平岩山

馴鹿の寝袋が暖いため、つい無精になつて了つて、食事の用意が出来るまでは二人とも決して袋から出ない。

風はやはり昨日に續いて相當に強く、雲の往來も激しいが、まあ天氣はどうやらよくなり相に見える。雪らしい雪は降らず、それに昨日の雨のために雪はすつかり凍つて、スキューは全然望みがない、それでも高みへ出て、粉雪になつたらばと云ふ慾目から、スキューは政治と熊藏に預け、始めからカンジキを穿いて、八時過ぎに小屋を出た。先づ黒俣澤を渡つて、中ツルの突端を左に廻る。朝日俣澤は合流點のすぐ上で、三階瀧と云ふ瀧になつて居るが、その上手で第一の橋を渡つて朝日俣の右岸に移る。雪はガサ／＼云ふだけで少しもぬからず、眼ざす行手はやはり雲が低くて定かには見えない。間もなく第二、第三の橋を渡つて。再び朝日俣の右岸を進む。雲は大分薄くなつて、かすかに今日登るクシノ峯尾根が聳えて居るのが見えて來た。樹の森林は中々美しく、振り返ると昨日登つた小屋裏の斜面が、朝日俣の谷の突き當りと云ふ感じを起させる程その全容を現はして居る。やがて右岸の支流、ヒノキ澤、御影澤を過ぎてから第四の架橋作業をやる。澤は大分深くなつて居て、二十米近くも下つて、左岸に移る。太陽が出て、樹の巨木が白い雪の上に影を投じて、たまらなく美しい。下の大澤を右岸に見て少し行くとアカダキと云ふ中ツルから落ちる小さな瀧の下に着く。雪の中に兎を見出した。雪の白い中に、真白な兎が居るので中々見付けにくい、眼の色と、耳の色とで辛うじて周圍から識別することが出来る。それ其所に居ると云はれても中々見出せなかつた。その兎は熊藏が追つかけて始めて逃げ出した。此の邊から朝日俣の澤は廊下式を脱して了つて、至る所雪の橋が出来て居るので、架橋の必要はない。間もなく右側の斜面に再び兎を見つけて、今度は政治が生け捕りにする

と云ふので、荷物を置いて、下手の方から背後へ廻つた。柴を手頃は何本も切つて、それを兎の居る場所より上から、風を切つて投げると、兎は鷹が来たものと思ふか、雪の孔へすくんで了ふ。そこを上から駆け下りて、カンジキで踏みつけて了つて、あとから掘り出すのだと云ふので、私達はこの原始的な方法が馬鹿に面白くなつて了つた。しかし兎は孔へすくまずに逃げて了つて失敗に終つたが、この方法はなまじ鐵砲より有效だと云ふことだ。右岸から上の大澤が合流し、それと朝日俣の本流との間に突出して居る尾根へ登る。

これは平岩山から來て居る瘦尾根——クシノミネ——の突端で、恰も三稜洲の様に尾根の突端から平らに延びて居る。徑一尺内外の大木が無残にへし折られて居るのが澤山あるがこれは過ぎた昔、上の大澤から押し出した大雪崩の慘を語つて居る。その後には生えた木はまだヤブの域を脱して居ない。空は晴れたり曇つたりするが、標高が高くなつたため、雪が非常にいゝので、私達は人夫に預けて置いたスキーを受取つてから中食を認めた。小憩後いゝ粉雪の上を少し進むとすぐ瘦尾根になる。尾根が急なのとヤブのひどいので、今穿いたばかりのスキーがすぐ厄介になつて、意氣地なくも、その立木へスキーを縛りつけ、再びカンジキの世話になつて、その瘦尾根を階段の様に登つて行つた。

この尾根は朝日俣の前方峯マヘカマと云ふのでやはり有名な獵場になつて居る。中ツルの支尾根には帶狀をなしてヒメコが群生して居る。それを長松峯と云ふ。そしてそれより上手の方、大朝日岳の側面の、可なりガラ／＼になつて居る邊を朝日ガンガラと云つて、よく熊を射止める處だ相だ。谷の中に居る時には氣のつかなかつた風は高みに出るに従つて漸々強くなつて來る。大朝日は亂雲に包まれ、ちらと姿を見せたかと思ふのも束の間、すぐまた雲の中に隠れて了ふ。また左上方の大澤及び下の大澤を距てた御影森は太陽を背後にして明暗極りなく、氣味の悪い程である。そして御影森から平岩山に連



下の大澤



朝日俣澤よりクシノ峯を望む

る山稜の雲の動きを見れば、その風の強さは察しられる。

三度はかり政治に教へられて、榊の木の上にある熊の櫓を見る。高い木の上に樹の枝を組んで櫓の様になつてある。熊が木の實を集めて貯へて置くのだ相だが垂直な木でもずん／＼登る熊の爪の強さには私達は驚歎した。政治はその樹幹に残された爪の跡を見て、その熊はまだ若い小さな奴だといふ。天氣は險惡だが、展望は可なりよく、頭殿の圓頂を越した彼方には、暖日山から大平が緩かに延び、尙遠く藏王方面をも望むことが出来た。登るに従つて風は益々強くなるが、急な登りも漸く終つて、瘦せた尾根の上部——文字通りのクシノミネへ來た。白花石楠やコマツガが岩の間がさ／＼して居て、尾根の上の幅は實に狭い。全くカンジキを辛うじて載せる位と云ふても過言ではない。その狭い尾根で、突風の來る時は體をすくめて風に耐へ、風の力のゆるむ隙間に走る様に進む。そして漸くクシノミネが終ると、そこは天狗角力取場で、赤褐色の小石の狭い平で、どんな時でも雪は吹き飛ばされて、地肌を露して居る。それから平岩山は只一と息に過ぎないが、灌木一つも出て居ない、白雪の斜面である。時間が大分晚いので、クラムポンを穿く時間を儉約しようとして、輪カンジキで最後の登りを試みたが、この強風ではその試みが全くの無謀であることを知つて、すぐ思ひ切つてクラムポンに穿き換へた。そして小さな隆起を越して平岩山の頂上に到着した。其所は三角點のある頂上と同じ位の高さの頭である。私達は只體をすくめて杖を振つてヤホーを叫んだだけで、野川の谷を見ることも出来なければ、祝瓶山の姿を眺めることも出来ず、逃げる様にして駆け下つた。

天狗角力取場まで來て見ると、風の強さは頂上とは全然異つて、先刻の烈風は何處を吹くかと思ふ位であつた。また輪カンジキを穿き、残して置いた荷物を持つて、もと來た道を下る。登つた時の足跡は風のために大半消えて了つて居た。この急な尾根をカンジキで滑降する様に下る。スキーを持ち、中食を認めた尾根の突端で、また第二回の食事をやり、惡場で暗くならない様にと、無暗に急いだ。

そして第二架橋地から提灯をつけたが、間もなく迎ひに來た文三郎に遭つた。今朝幸ひ鑛泉から鴨撃ちに出つて來たので、明日のアヲ狩の件を話したら、一行は鴨を撃たずに歸つた相で、文三郎は一日樂をしたことになつた。文三郎が小屋に居たため、焚火も盛に燃えて居て、例によつて私はレモン湯をむさぼり飲んだ。

一月五日午前八時二十分出發、八時四十分第三架橋地點、九時十五分ヒノキ澤、九時三十分御影澤、十時二十分アカダキ、十一時瘦尾根下中食、十一時三十五分出發、午後二時五分天狗角力取場、二時三十分平岩山頂上。三時五十分瘦尾根下食事、四時十五分出發、四時五十分第四架橋點、五時五十分二ツ俣小屋歸着。

アヲ狩——小朝日岳

今日は實によく晴れた。寒さも身に泌みる。谷はまだ暗いので、平岩山連山や大朝日に連るヨコフツツケのガンガラは早くも朝日を浴びて輝き始めた。私達も準備をすまして、鑛泉から人の來るのを待つ。今日はスキューは全く使はないので靴をやめ、靴下の上にズンベを穿き、それで輪カンジキをつける。やがて鑛泉からの一行が來た。古川屋から房吉、徳次の二人、新湯から鞠子朝七、同福榮の二人、これで人数は十分に出來た。熊藏は逐ひ落し、文三郎はセコをやる。徳次はトリキリになつて大黒岩に立つことになつた。朝七が上のタツ（鐵砲）、房吉中のタツ、福榮下のタツ、そして皆を統帥して、政治が前方になる。これで一同の部署が定り、私達二人は結局統監部附の寫真班の様になつて了つた。

今日は岩永君もヤホーを封じられて了つた。折角の獲物がヤホーの爲めに逃げて了つては形無しになる。一同が出發してから一と足遅れて、政治について私達も出發する。黒俣澤を渡つて中ツルの下へ出て右にからみ、黒俣澤の右岸をへずる。間も無く雪の橋で左岸に移る。所々に灌木の芽をアヲが

喰ひ散らかした跡があるので、奴さん近くに居ると思つて喜んで歩いた。また雪の橋で右岸に移る。險悪だと聞いて居た黒俣澤も、来て見れば存外簡單で、橋も架けず、水にも這入らずに歩けるのだから、朝日俣より仕末がいゝ。今迄は兩岸が迫つて陰鬱だつたのが、俄かに明るくなると、谷の正面には小朝日の素晴らしい姿が高く聳えて居る。

中ツル側の斜面は非常に緩くなつて、桧、檜、シナノキなどのある平——モワダ廻リ路——に出る。黒俣澤の流れとは少し遠ざかる。政治は川まで鴨が居るかどうかを見に行つたが、目ざす鴨は居ないらしい。私達は何の屈托もなく歩く。白雪の森林の中ではあるが、葉を振り落して了つた梢を通して、陽は豊富に注ぐ。やがてまた黒俣澤の流れに近づいたが、そこより少し下手で百間乗りの雪溪に源を發する百間乗りの澤が黒俣澤の本流に合流して居る。黒俣澤もこの邊からは全部雪に埋つて居る。政治は崖を下りて黒俣澤を渡り、對岸の尾根——五本檜の前方峯——に急いで行つた。私達は何枚となく寫眞を寫した。前方峯に登るに従つて、大朝日方面は美しく展開して來る。黒俣澤は私達の渡つた少し上手でまた二つに別れる。右が本谷で、左が支流ヨコフツツケの澤である。深い、屈曲の多い、急峻な澤で、雪に投じた影の隈取りがこよなく美しい。先年通つた中ツルの稜線もすぐ眼の前で、あの時はやはり今日の様によく晴れて居た。

尾根の上では政治がしきりと大聲で呶鳴つて居るので、私達も急いで駆け上つた。成る程獵にはいい所だ。直下は百間乗りの澤で、小朝日から鳥谷原に連る山稜——五本檜——は、ずつと屏風のように延びて居る。小朝日の側面——中ツルから最初に望んだ、私の腦裏に焼きつけられて居る黒い側面、クログラは此所で見れば、其のデテールがはつきり見える。その黒いのは岩より寧ろ岩の間から生えたクロ木のためである。クログラより下手の巨岩——大黒岩——にはトリキリの役を勤める徳次が立つて居る。熊藏と文三郎とは聲を立てながら對岸の中腹をへずつて居る。盛んに呶鳴つてもアアは遂、

に姿を見せなかつた。雪が固かつたので、一行の足音でアヲが逃げたのだらう。そして雪がぬからな
いもので、トリキリがアヲのヌケた足跡を見逃したのであらう。兎に角今日のアヲ狩りは失敗に終つ
たので、私は軽い失望を感じた。鑛泉から来た人々は小屋へ歸らずに、鳥谷原から鑛泉へ歸り、熊藏
と文三郎とは谷に下りて、谷の底からまた私達の居る尾根上まで登つて来た。雪さへあれば山は何處
でも歩けると云ふことを私は如實に感じた。それでも尾根の上へ着いた熊藏は玉の汗をかいて居た。

中ツルの方にもずつとアヲの足跡が見える。恐らくこれは昨日私達が平岩山の方面でヤホーの連發
をやつたので、朝日俣澤から黒俣澤の方へ安住の地を求めて逃げて来たのであらう。

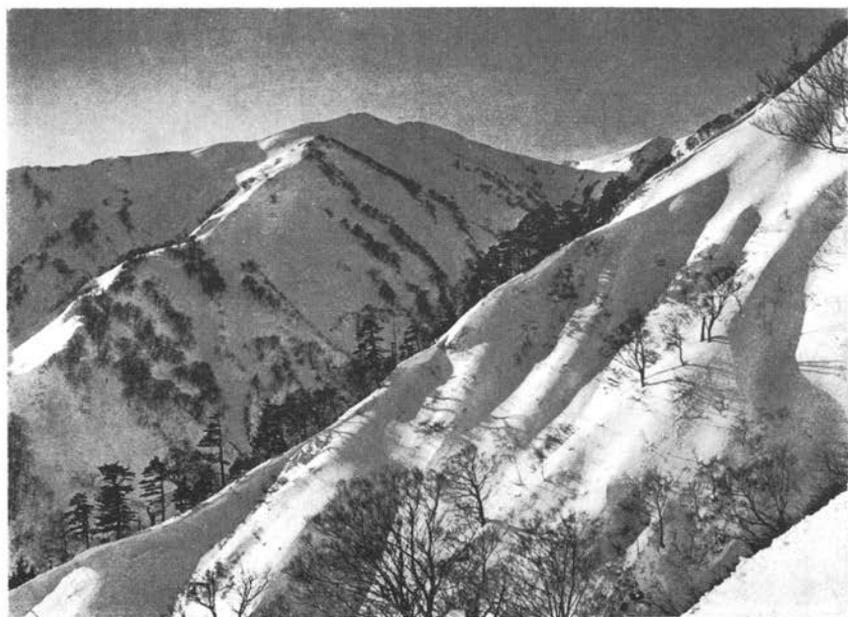
私達は氣樂に食事をしながら、少し前までアヲを獲つたら、それをどうして小屋まで持つて行くか
と云ふ事に馬鹿に興味を感じて居た自分がおかしくなつた。食事の途中に、岩永君が小朝日の頂上ま
で何時間かゝると政治に聞いたのがきつかけとなつて、直ちに小朝日行きに相談がきまつて了つた。
この雪ではワスの心配は先づないし、それに百間乗りの雪溪は午後は日蔭になるので、實に詭へ向さ
のコンデイションになつた。

先年中ツルから小朝日と百間乗りとを望むだときは、まさか冬の最中にその登行を企てやうなど
とは夢にも思はなかつた。氣樂な食事の後半は小朝日行きのために非常にあはたしくなつた。急い
で腰をあげて、直ちに前方峯の山稜の雪庇の上を登る。

ヨコフツツケのガンガラに取つく手前から工合よく百間乗りの雪溪へ下れる所があつて、わけなく
私達は雪溪の上に立つた。右手のクログラに續く斜面は今や正面に陽を浴びて、時々クラストのかけ
らがカラ／＼と音を立て、固い雪溪の雪の上を滑つて下へ落ちて行く。私達は危険であるとは思は
なかつたが、それでもその音を聽いては餘り良い心持はしなかつた。片時も早く熊越の鞍部へ着かな
くてはと云ふので、上衣を脱ぎシャツ一枚で、息もつかずに上へと急いだ。それでも時々振り返つ



ラガンガのケツツフコヨリよ路登の峯タカヘマ檜本五



日朝袖りよ峯タカヘマの檜本五
影撮氏俊貞宮別

て、吾妻連山からずつと磐梯山が遙か霞んで浮んで来るのを觀賞するだけの餘裕があつた。約四十分の力行で、私達は熊越の鞍部に着いて、先づ第一の難關を通過して了つた。此所で始めて私達の未だ見たことのない境地が展開した。大朝日から西朝日、以東岳に連る山波が、たゞ眠つた様な静けさを以て蜿蜒として居る。

これから小朝日の頂上までは大したことはない。所々雪の薄い所があつても、カンジキのまゝ、ヤブを踏んで行かれるし、またクラストもなく、三時二十五分頂上の神社の前に立つことが出来た。小さな社は半ば雪に埋つて、その屋根は丁度腰をかけるに適當な位になつて居る。昨日と變つて微風すらなく、百間乗りの上から上衣を脱いで來た私達は頂上でもシャツ一枚で居ることが出来た。實に美しく晴れて、望み得た山を列記すれば山岳奥羽號が出来て了ひ相である。近い所では御影森、大朝日、中朝日、西朝日、以東岳、障子岳、鳥海山、月山、七ツ森、岩手山、金華山、船形山、藏王連山、又近くに頭殿山、遠く吾妻連山、磐梯山、飯豊山塊、眼をさへぎるものは何もない。殊に以東岳と障子岳との間あたりに日本海が輝き、船形山と藏王連山のあたりに太平洋が見えたので。私達の悦びは絶頂に達した。しかし時間が餘り早くないので、さう何時までも歡喜に陶醉して居ることは出来なかつた。小朝日の頂上から下ることを私はひどく虞れて居た。クラムボンもなく、ロープもない一行なので、若し下りの斜面が非常に急で、アヲスガになつて居た場合を想像して、私の心は決して安らかではなかつた。若しその最悪の場合に遭つたら、時間にはかまはず、鉈で足場を作り、人夫衆の帯を結び合して下らなければならぬと最後の腹を決めて居たが、何たる幸福だつたらう。雪は少しも固くなく、雪庇も小さく、すぐそれを踏み破つて、鳥谷原に連る山稜に立つことが出来た。

鳥谷原から小朝日を越えて、大朝日に行くことを今迄に何度となく仲間の連中と話し合つたことがあつた。しかし中ツルから見た時の感じでは、その山稜は決して安易なものではないらしかつた。私

はその話が出る度に、長い山稜をクラムボンを穿き、重いスキーを脊負つて歩くことを想像して居た。そして先年沼井、岩永兩君の一行が鳥谷原の神社で苦しい經驗を嘗めた際にも、天候に妨げられてこの山稜の模様を知ることが出来なかつたので、私は此所へ來て見るまでクログラの嶮から聯想して、歩き辛い瘦せ尾根だと思つて居た。しかし事實は想像に反し、ヤブは全部雪に埋れ、たゞ所々シラカンバの大木があるだけで、スキー滑降には絶好の地點であることを發見した。鳥谷原の神社に籠城して、スキーを享樂するのだつたら、この山稜は將に第一等地である。

私達は最早や何の心配もなく、遙か下の方に見えて居る鑛泉の人達の足跡を眼當てに、實に呑氣に下つて行つた。鳥谷原に近づいてから、振り返つて見ると、小朝日は實にのんびりした圓頂と見える。クログラの人を威壓する様な模様は、只中ツルに面した部分に限られて居る。やがて鑛泉の人達の足跡と別れて、少し右手に下の氣味に山稜をからみ、ドダシの上の峯を下る。櫛の大木が疎らに立つて居る緩い傾斜の山稜をしばらく下ると間もなく木立が密になつて、また傾斜も急になる。丁度この傾斜が急にならうとする少し前に、將に沈まうとする夕陽が鳥谷原あたりの雪に包まれた峯々を火の様に輝かした。その赤い色だ、紫を帯びた燃える様な赤い色だ、この色こそ先年瑞西でモントロロザを輝かし、マツターホルン、シュレックホルンを彩つた色だ。私は耐らなくなつて岩永君にこの色、この光、この輝き、これこそアルベンのアールペントグリユンだと叫んだ。

急な尾根を下る。朝日川の谷を距てた對岸の大澤の頭の上に三日月が輝き出した。そして私達はドダシの澤を渡り——そこでアヲが寝た場所を見出した——すぐ黒俣澤の岸に出て、辛うじて足跡が見える位な時に二ツ俣の小屋に歸つた。

愉快な豊富な食事をすましてから、愈々明日は小屋を引拂つて鑛泉へ下るので、その準備に忙しかつた。私達は荷物の運搬は熊藏と文三郎に頼み、天氣ならば御影森へ登つてから鑛泉に下ることにし

て寝に就いた。

一月六日、午前九時二十五分出發、十一時百間乗りの澤と黒俣澤との合流點通過。十一時五十分前方峯マヘカガミネ、午後一時三十分小朝日に向つて出發、二時十五分百間乗りの雪溪に立つ、二時五十五分熊越着、三時二十五分小朝日頂上、五時五分二ツ俣小屋歸着。

御影森より朝日鑛泉

天氣が好いたため昨夜は殊に寒かつた。今日もやはり好天氣なので、最後の計畫の御影森行も實行することが出来たのは實に悦ばしい。それにしても今年の正月は奇體な冬だ。雪らしい雪は降らず、まるで春の様に山の中が何處でも歩ける。

八時過ぎあとの始末は熊藏と文三郎に委して私達は政治をつれて、長らく厄介になつた二ツ俣の小屋に別れを告げた。天氣のおかげで雪がぬからなからカンジキも穿かずに歩く。文三郎は鴨を撃ちに私達より早く小屋を出て、朝日俣を溯つて行つたが、獲物が居ないので引き返して來るのに途中で遇つた。第三架橋を過ぎて、朝日俣の右岸を行けば、間もなくヒノキ澤に出る。私達はヒノキ澤の下手の尾根を登る。そこでカンジキを穿く。ヒノキ澤はやはりその名の示す通り、櫛やヒメコの多い周圍には珍らしくヒノキ(ネヅコ)が割合に多く、私達の登るこの尾根にもヒノキが可なりある。私達は假りにこの尾根をヒノキ尾根と呼ぶことにする。この尾根の下手一帯をアグリと云ふ相で、獵師仲間ではこの尾根をアグリの上の峯と云ふ相だ。

三十分餘りも登ると眼界はずつと闊けて、大澤の頭、平岩山、袖朝日、大朝日、小朝日、鳥谷原の連山が、晝巻物の様に展開されて居る。やがて雪の状態もよくなつて來たので、私達はカンジキをスキに換へて、それからヒノキ尾根の稜線を行かずに、少しくヒノキ澤寄りの斜面をジグザグに登り出した。ヒノキ澤も此の邊まで來ると、ヒノキは少くなり、他處と同様に、櫛がはびこつて來て、

ヒノキ澤源頭の廣闊な扇狀の斜面は大きな榎の疎林である。

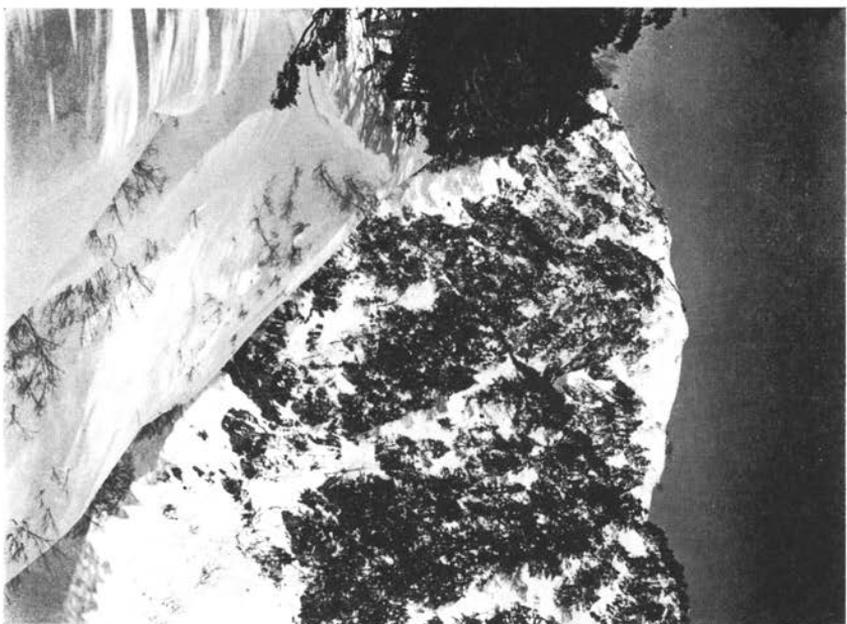
御影森の頂上で晝食を攝つて、午睡をする位に考へて來たが、まだ主尾根にも出ないので瘦我慢をさらりと捨て、正面に大朝日を望む斜面で中食を認めた。此の邊の滑降は實に愉快だらうと思はれる。林は疎で、ヤブはなく、斜面は急に過ぎず、また緩に過ぎず、ずつとヒノキ澤の源を巻いて滑降することが出来る。

食事をしてから、また同じ様に登り出し、間もなく御影森山から直接出て居る主尾根に出た。食事の前後から薄雲が出て、昨日程の天気ではないが、この主尾根から御影森は明かに望まれる。寫眞を寫す時に樹の影がくつきり出ない位な程度なのに、好天氣に慣れて來たので、これでも不満に思ふ。それから山稜を登り、鑛泉へ下る尾根の別れへ來た時に、霧の時の用心にと、政治は立木へ鉈をあて、私達は同じ様に登行を續けた。大分傾斜も急になり、且雪もぬからないので、カンジキを穿くことにして、スキューを木に縛りつけた。そして雪庇を恐れて、稜線より少し下をからみ、二つ三つ隆起を巻いてから、クラストを踏み破りながら御影森直下のクボへ到着した。

政治はクボの風のあたらない所で休んで居る。私達は大急ぎで、頂上へ飛び上り——實際クボは頂上のすぐ下なので頂上へは八歩位で行ける——先づ祝瓶山の姿を飽かず眺めた。先年沼井君と袖朝日へ登つた時もついでこの祝瓶山をよく見ることを忘れて了つた。一昨日平岩山へ登つた時は、あのひどい風でとても見ることは出来なかつた。今日こそは、とまだ見ぬ戀に憧れて居る様な氣持ちで頂上へ飛び上つたのであつた。すぐ前の野川の谷を距て、祝瓶山がその美しい尖頭を鈍い陽光に輝かして居るではないか。その形は標高に比較しては全く出来過ぎて居る。しかし少しく意外だつたのは、雪のつかない岩壁が多くはないかと想像して居たのが、案に相違して一面に白い。そして緩かな弧線を描いて、大玉山に連つて居る。祝瓶山もやはり冬に來るべき山であつた。



百間乗りの雪溪



五本槍のてへカタ峯より小朝日のクワカラ（前クワカラ及大クワカラ）

昨日の好天氣に味を占めた私達は、今が一月であることも忘れ、頂上で晝寢をしやうなどと云つて來たが、流石に風は冷いので、飯豊、葉山、また月山、鳥海などを一と通り眺めてから直下の風のあたらぬクボにもぐり込むで了つた。下山の途に就く前にもう一度頂上に登る。此所から鳥谷原方面を見れば、ドダシの澤はどうしても二ツ俣より下流で朝日川に合流する様に見える。また朝日俣澤方面は實に大きく、廣く感じられる。御影森から見る大朝日も實に堂々たるもので、左右に群臣を侍らして、朝日川の源に端座して居る、朝日山塊の盟主として恥しからぬ容を備へて居る。

下り途の雪庇の模様もよく見えたので、歸りは稜線についてどん／＼下る。十分でスキーデボーに着いて了つた。それから愉快な滑降に移る。尾根の別れ途では雪庇を破つて下る。下るに従つて雪が重くなつて、殊に私はワックスを小屋へ置いて來たので、降りの後半は不愉快であつた。上倉山の三角點の下手を廻り、瘦尾根、ヤブと奮闘して降る内に雨が降つて來た。そして可なり雨に濡れて四時三十分に朝日鑛泉へ歸着した。

これからは何も書く必要はない。炬燵でビールのコップを舉げては、ヤホーの連發をやつた。雨は益々ひどく降つて來た。

一月七日、午前八時二十分出發、八時三十五分第三架橋、八時五十分ヒノキ尾根、十時海拔約二一〇〇米の場所にてスキーを穿く、十一時三十分晝食、午後一時三十分頂上着、一時五十五分下山に就く、二時二十分滑降に移る、四時三十分朝日鑛泉着。

翌一月八日は雨も小降りになつたので、再び頭殿を越して日影に出た。そして鮎貝の町に着いた時は暗くなつて居たが、驛前の朝日屋（政治宅）でゆつくり仕度をして、午後八時十二分の列車で一同と別れた。

祝瓶山

岩永信雄

緒言

大正十一年頃から毎冬五色温泉にスキ―に出かけて居る中に、快晴の朝宗川旅館の北寄りの室から、北方はるか彼方に朝暎綺羅びやかに突兀たる連山が聳立して居るのを見受けた。これを朝日連峯から祝瓶山に至る連脈で、殊にその中で著しいものは祝瓶山であることを沼井君などから聞かされて、何時かはこの方面にも出かけて見たいものとの念止み難くあつたが、その當時は一體あの氷の牙の如き鋭峯に取付くことが出来るか否やさへも疑問であつた。

其後機会を得て積雪期の朝日連峯へも同君等と數回登り、益々この方面に惹込まれる様になつた、殊に何時も沼井君と談合して居ると必ず祝瓶山登攀の企のことも話題となつたが、未だその頃は朝日方面一班の様子も判明せず、その上朝日岳プロバ―（祝瓶山方面を除く）にのみ氣を入れて居たのであるが、この當時からでも機会を得ば祝瓶山の尖峯の頂にも登つて心ゆくばかり快哉を叫びたいと思つて居た。

然るにこれ迄朝日連峯數回の登攀では餘り天候に恵まれず、近くからの雄姿を眺めることが出来なかつたが、昭和二年一月初旬本會幹事別宮貞俊氏と同行、朝日俣、黒俣河合流點の二ッ俣小屋に滞在して、この連峯を跋渉した折には、意外にも天候に恵まれ、豫想外の享樂をして衷心から躍喜した、その中にも御影森山頂上からの祝瓶山の眺望を期待して居たが、果せる哉この大山塊は全山白雪に掩

はれ、折柄午後の曇りの鈍い光線を受けて寂寥として沈黙を守りつゝ我等の前に現出した時には、實に今迄見た大朝日を中心とした連峯の崇高さもさることながら、この大ピラミッド型の特異な姿は深く腦裏に印せられた。特にその尾根は何れの方面とも全く文字通りの劔の刃先の様に鋭く、これでは一寸取付くさへも中々困難らしく見受けられたが、この偉大なる姿に接して、機會あらば積雪期に先づ踏査を試み、ネバリ強く頑張つたならば何時かはこの頂上に達する事も出来るだらうと思ひ、早速この時同伴した鮎貝の古川政治さんにその事を話した所、自分はこの方面は熟知せぬが桂谷に知人があるから又よく事情を聞いて置くと云つて別れた。其後もこの行の事を追憶すると、何時も祝瓶山へ」と心の奥底からの叫で促される様な氣がしてならなかつた。

殊に目下割合に身體の自由がきくので、この機を失つてはと思ひ、早速決心して三月始めに政治さんの所に問合せを出した所、同氏も心配して呉れて桂谷の知人——桑原鹿之助——にも依頼狀を出してくれ、同人からも返信があつたが、今年は例年にならない大雪の爲め、その頃での登山は覺束ないが、三月下旬にもならば十分に登山が出来るとの確報を受けたので、その豫定にして居た。その中急用で一吋束縛されさうであつたから、切詰めて豫定以上の時日を過さぬこととして出かけた、幸に天候豫想外に宜しく、案内人も十分に全く短時日を十分利用することを得て、私自身としては好結果を得たことを喜んで居る。然しこの喜びを分つ可き同行者もなかつたのは、何分出發が急で案内人との打合せも間に合はぬ位であつたのだから止むを得ない。その上に私の拙文は充分に御參考となるや否やも覺束ないので諸彦の御寛恕を乞ふ次第である。

行程概略

昭和二年三月二十八日、上野出發。
三月二十九日、長井驛——平野村——萩生——明神峠——桂谷。

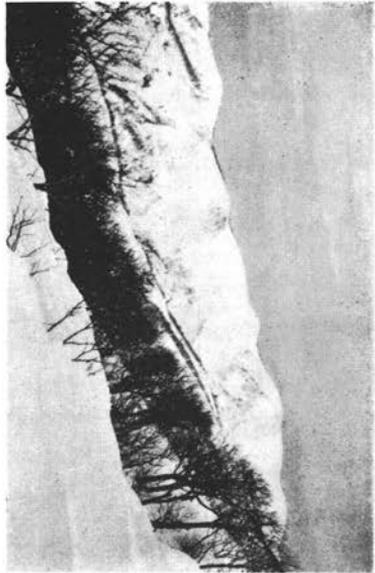
三月三十日、桂谷——カツラ澤——三體山——合地澤ノ頭——柴倉山——桑澤を下り——木地山。
 三月三十一日、木地山——野川を廻る——角檜——尾根上を辿る——祝瓶山——木地山。
 四月一日、木地山——大桶澤——カナクラ澤——安部ヶ館山——葉山神社——長者原——川原澤——長井。
 案内者 山形縣西置賜郡平野村大字平山字寺泉桂谷 桑島鹿之助(四十五歳)

一 桂谷迄

三月廿八日——廿九日、晴天。

春漸く酣にして都では櫻花爛漫たらんとして居るが、目指す所は全くの白雪で掩はれて居ること、思へば、準備も冬仕度と思つて急ぎスキ一の用意も整へて夜獨旅にと出かけた、上野驛に着いて見ると花見頃を控えて居るので、驛内外の雑踏は相變らずで、午後九時三十分發の青森急行も大分混雜の様であつた。スキ一客らしい學生姿を二三組見受けたが、別に左したる仕度もして居らず、却つて私の異様な身装に驚異の眼を見張つて居た位であつた。

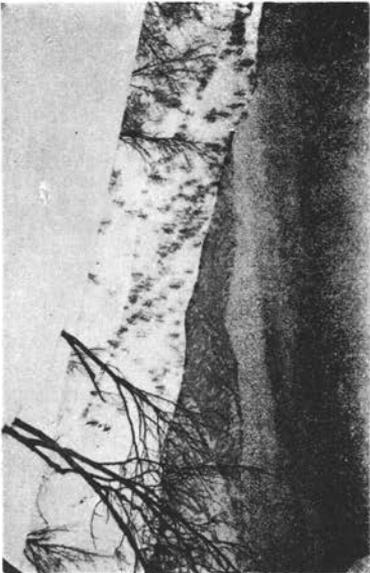
人込みの中にも漸くの事で座席を得て一先づ安心した、それに今度も始めから天候が宜ささうに思へたので氣持も樂であつた。獨旅で別に話相手もないまゝに宇都宮邊からはウトウトと假睡をとる事が出来て、翌朝早く福島驛附近で一寸眼醒めたが、四周は殆んど雪を見ることが出来なかつた。列車も漸次西へ西へと登り、板谷驛に着いた時夜も漸く明け離れた。窓外を眺れば空には一點の雲影なき快晴で、朝日は茜色の初光を高倉山邊に投げてモルゲンロートを現出して居た時には、一夜の中にかくも景色が豹變するかと思はれた程で、この附近は全山眞白で殆んど冬の狀態と異なることのないには聊か驚異の感に打たれ、これなら先に行つたならば如何な素張らしいことだらうと獨り胸を躍らせて居るばかりであつた。



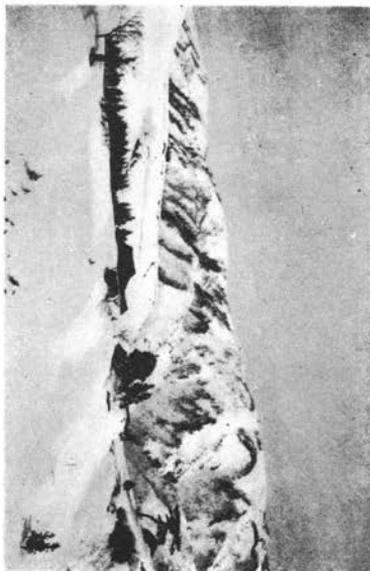
三體南山尾根上り三方面を望む



桂谷部落及三體山



廣澤上尾根途中り御影森を望む
岩永信雄氏撮影



背而りよめる桂谷部落

米澤驛附近からは稍々薄曇りとなつたが、飯豊連峯が遠望出來て、久振りで大山塊に接して愛慕の念が起る。午前六時三十分赤湯驛で長井線に乗換へると、偶然日影の横澤氏に會合、一別以來の話も盡きぬ内に長井驛に到着した、見ると政治さんはわざ／＼出迎へに來て呉れたが、桑島は來て居ないとの事であつた。實は昨朝電報を打つて置いたと言ふと、それでは事によると不便の土地であるから届かないのであらうとの事で、兎に角桂谷迄の工夫を雇ふ手順を定め、同氏も鮎貝に山形高校の安齋氏が來て居るので忙しいとて別れたのが七時二十分頃であつた。間もなく郵便集配人が來合せたので電報の件を語ると、桂谷は配達區域外との事で、局に留置になつて居るといふ、それで桑島の來ぬ事情も判明したが、横濱で電報を打つ際に特別配達とわざ／＼注意した程であつたのに、調べて見ると普通配達區域との事にその儘依頼したのがかゝる結果になつたので、郵便局に對し憤慨に堪へなかつた。そこで審に事情を語つた所、長井では都合が悪いが、平野村役場迄は平地のみで一里位であるから、其處迄行つて依頼した方が宜しからうと云つて呉れたので、漸く目鼻も附いたのに安心して、重いリニツクサックを脊負ひスキーを肩にして七時四十五分出發、長井町南端から鐵路を横斷し、小出、館野、窪と辿つた、途中道端に少しの雪を見たが葉山方面は眞白に輝き、左手に遠く吾妻連峯が春霞の中に深く望まれた。

荷物が相當に重かつたので平野村役場迄一時間程も要して到着し、此所で今迄の事情を述べた所、早速に同情して工夫を頼む様奔走して呉れ、一先づ休憩した。しかし役場の人のいふには、桂谷の桑島は昨日來る筈で來なかつたから今日は必ず來るとの事で、他に工夫もなく致し方もないからその來着を待つことにし、午頃迄も待つたが來ない。午後又様子を聞きに行つたが前と同じ返事ばかりで埒が明かない。此處で偶然この附近の地名等を教示された事は有り難かつた。

午後二時三十分頃になつて桂谷の松田幸之助氏が來合せたので、よく事情を聞くと、今朝桑島も出

かけて來るとの事であつたが何時頃來るか不明との事で、同氏の歸りに同行して貰ふ事にし、途中で桑島に出合ふ様に行程を進めることにして、午後三時厚く禮を述べて平野村役場發、幸に空は晴れて藏王連山を遠望された。附近の山々は白銀の世界で、時に漸く夕照を受けて黄金色に美化して居る。酒町を経て萩生に出る手前で桑島親子に會合し、初對面の挨拶から種々事情を述べて同行を求め、萩生にて少憩、準備を整へて午後四時に出かけた。高野を通過した頃から谷は漸く逼迫して、底雪崩の道に塞がるのを避けながら進んだ。午後六時三十分大平を通過した頃から夜道となり、提灯の光を頼りにして進む。兼ねて地圖上の明神平峠から祝瓶山の英姿を見ることを楽しみにして居たが、今は只足下を照す淡い光に注意しながら進み、七時四十分明神平峠通過。満天の星は燦として輝き亘り、明日の快晴を物語る様なのを心頼りに一段と氣を勵して行を急ぎ、午後九時漸く桂谷の桑島の宅に着。夜食のゼンマヒ、マイタケ等山の珍味に舌鼓を打つた。シシダケの澁茶は殊に珍らしく思はれ、又家の者が心から親切にして呉れるのも山中の朴訥さが忍ばれて心持がよい。

前日の疲労もあることとして、早く就寝することにして屋外に出て天空を仰ぐと、先程迄の星空は全く薄雲で掩はれ、それに氣温も高いので稍々不安に感ぜられた。午後十一時三十分頃就寝、疲労のため直ちに前後不覺の境に入った。

二 木地山まで

三月三十日。晴後曇、少雨あり。

一夜の熟睡も瞬く間に過ぎて、食事の仕度が出來たからと促されて、起床したのが六時三十分頃であつた。天候が氣になつたので外に出て見ると雲切れはして居るが少雨があつて稍々不安に感ぜられたものゝ、この分なれば後になつて晴れやうとの事で、暫らく様子を見ることにした。その中に昨夜

中に木地山行の工夫を頼んで置いたのが七時頃にやつて来る。

ナメコの味噌汁で朝食を喫してから、漸次天気模様も恢復して来たので豫定の行動をとることにして準備を整へる。屋外の四周は白銀色に彩られて昨夜暗中をさぐりながら歩いて来たのとは霄壤の差である。西方を望めば三體山連山はドッシリと落付き拂つて控へ、東方も所々に岩壁を露はして景趣を添えて居るのを眺め入つては恍惚として雀躍を禁じ得ない。

午前八時五十分スキーを付けて出發、背面のカツラ澤を遡ることゝする、旭光が麗らかに桂谷部落を照して居るのも心持がよい。登るに従つて南方は益々展開されて昨夜辿つて来た所が一一指點されて一幅の墨繪を見るやうである。藏王連山は今日も遠望されて懐しみを添えて居る。雪量も未だ十分あつてシバは皆隠されて居り、それに雪質も最早相當に緊められて居るので、ヌカルことも少なく、スキーでの登高も頗る工合が宜しい。進むに従つて兩岸も傾斜を増して所々に表面雪崩の露はれて居るのを散見した。この時分でも樵夫の入つて居るのを見た。一時間程歩いたら一息入れることにして、此處で昨日同行した松田氏に會つて雑談する。此處迄の登高は傾斜も樂であるが、これから二俣になつて居て左俣の方は急なので右俣を登ることにしたが、暫らくの間は狭く急に傾斜が増して来たので相當の苦心を要し、數回の廻轉登りを試み、約三十分程經過すると漸く傾斜も緩やかになつて、所々にブナの疎林が立ち、全く豁然として居る。それに未だ人に荒された事もない所とて、自然味も充溢して心持よく、至る所にスキーゲレンデとして享樂する所が展開して居る。後顧すれば朝日連峯も次第に雄姿を現はし、殊に御影森山の突兀たる姿態が情味を以て我等を迎えて呉れた様な氣がして、何となくこんなよい心持を自分獨りで享樂するのが惜しく、盛に快哉を叫び、之が又山々に反響して何とも云へぬ心持がする。これからは全く呑氣な氣分に浸りつゝ、四周の景觀を賞しながら登る。時には薄雲がかゝつて来たが雲切れがして居るので憂慮することもなく進み、午前十一時二十三分三體

山南側の鞍部に着いた。このあたりは雪庇が西側に高さ二三間に發達し、堤の如く三四十間程も連互して居るのを見た。此處に達すると空も晴れ亘つて四周の大觀が目前に展開されたので暫らくは恍惚として無神の境に入つた。吾妻連峯を初めとし、磐梯、飯豊、朝日、三面方面から藏王連山に至る迄皆一眸の中にあり、殊に飯豊連峯が白冠に飾られて西方に巍然として踞座して居る雄大さは、實に東北地方第一との名に反かぬ偉觀と思つた、朝日連峯も數回の登攀で親し味を以て迎へられる様な感に打たれる。レモン入りの温かい紅茶で乾いた咽喉を潤ほし、快哉を叫んで元氣を付ける。

これから先は尾根縦走で高低も少なく、全く大道を行く様で只四圍の大觀に酔ひながら尾根を辿る。正十二時頃三體山頂上（一二五・九米）を通る頃から祝瓶山の突兀たる英姿が私等の前に急に現はれて來て招く様な態をなして居る。こゝから暫らく進んだ廣闊な臺地狀の地點で、大朝日や祝瓶山を前に見て晝食をとる（十二時二十分。この邊をアカバナと稱す）。祝瓶山は合地澤の頭（二一九三・二米）の眞白い山塊の右方に、頂上近くに黒い岩壁を物凄く見せながら聳立し、その右方には大朝日岳を中心とし、前方に平岩山は扁平な大尾根を現はして蟠居して居り、小朝日岳も奥深く僅かに頭部附近を折柄の旭光に浴して居るのが望まれる、前面には御影森山が全容を露出して谷々迄も悉く手にとる如く望まれる。晝食の際に風除けの爲めとて、人夫がシャベルで雪を掘つて風上に積重ねた、この中で食事をとるので休んで居ても左程冷氣を覺えない。食後暫らくすると雲行が怪くなり、殊に西方から黒雲が襲つて來たので、餘りゆつくり構えて居ることもならず、午後一時十五分出發し、尙も尾根を辿つて進む。午後二時頃合地澤の頭邊に達した時には、雲行益々覺束なく、遂に小雨を落して來たが、未だ激しい降りともならなかつたので、糶糊とはしてゐたが眺望もあつた。合地澤の頭から少し進んでからの下りは狹隘で急傾斜をなして居たので、百五十米突程スキーを脱いで進んだが、漸次雨脚も繁くなつて來たので、暫らく模様を見るために桑澤の上で休息して居た。幸に懸念した雨もほん



む望を原河廣山地木りよイガウコ



む望を山玉大りよ森丸

影撮氏雄信永岩

の暫らくで止んでしまつたので、下りは此處から下ることにして、寫眞器に享樂品位を除いて残部を留め置き、午後三時出發柴倉山に向ふ。この邊にも所々にブナの森林が景趣を添へて居て心持がよい。柴倉山もこの方面から望めば西側は急傾斜を以て野川に對し、祝瓶山に連る尾根も長く裾を引いて、之が積雪に飾られて居るので立派な相を呈して居る。大體尾根を辿り、頂上直下に至つて少し急峻なるため、こゝをスキードポーツとし、足下を緊めながら登り、午後四時柴倉山頂上三角點（一二六二・八米）へ着、曇り勝ちなるも雨は止み風なく、三面方面から祝瓶山、朝日、藏王連山はもとより、飯豊山塊も遙かに望むことが出來た、此處よりの祝瓶山は前面に何の障礙物もなく全容を現はしてゐるが、當面の岩壁には流石に雪も止めぬ物凄さ、その颯爽たる英姿はマッターホーンにも似、何人か賞讃の叫び聲を上げぬ者があらうかと思はるゝ程である。更に西方の谷々に眼を轉ずれば、殆ど全部が雪で埋もれて居るが、所々に岩峯が露出して、如何にも惡場の相を表はしてゐる。殊に金目澤方面は物凄く、前年熊狩で三人の獵師が行方不明になつたとの事である、この附近は熊の巢窟であるといふ。合地澤の頭の連山も白雪に飾られて美しい。午後四時三十分出發、暫らくしてスキートを付け、人夫を残して尾根を辿つて下つたが、夕方のために氣温も低下したので、この頃の狀態としては相當の愉快味を味ふことを得て、十分間程で桑澤上に着し、全部荷物を纏めて午後五時出發桑澤を下る。この尾根通しにも二三間程の雪庇の堤が連互し、直下は四十度以上の急傾斜をなすも、暫くしてからは恰好の傾斜となるので、スキートの滑降には心ゆくばかりの快哉味を覺えながら、暫時にして下り、野川の畔にて人夫の來るを待ち、共に木地山に通ずる二三十間程の怪しげな釣橋を渡つて廣河原に出づ。夕照雲間を通して四周を茜色に彩る中を、共に今日の面白さを語りながら、午後六時中澤側の清野藤三郎氏宅に着、こゝに一泊することにした。遠來の客としてワザ／＼湯を沸してもなされた心情も有難く、浴後の清らかなる氣分にて疲勞も癒え、七時頃心盡しの山の馳走で夜食を喫し、後暫らく雜

談をなして明日の快晴を祈りつゝ九時三十分頃就寢。

木地山は夏の頃には七八軒の人家あるも、冬は二軒のみで、清野氏は毎年こゝにて越年するとの事。多くは薪炭製造を業とし、春にはゼンマイ、ワラビ採取のためこの奥地に入るものも相當にあり。前面の野川にては盛夏の候にはイワナ、マス等が夥多に獲らるゝので興味あるとの事である。清野氏も全く山人らしい純朴な人物で、その深切さも都人にはよい感銘を與へる。

地名其他に就て私が平野村役場及び桂谷、木地山の人々から聞知した所を下に摘記することにした。(山岳二十一年第一號所載吉澤一郎氏の「野川を遡りて大朝日岳へ」の文參照)。

吉澤氏の「桂谷の北で合地の澤に合流するのがアカバネ澤、三體山から東に派出した等高線の數字の記入してある尾根の東に發しアカバネ澤に入る小さいのがヨシキ澤」とあるは私はホトケ澤と桂谷の人夫より聞いた。又同氏のオイコから北で西から來るのは赤石澤とあるは石高澤(村役場にその名稱)と教へられた。又舟引澤のすぐ下手に坂澤、小坂澤の二流があり、北流して野川に合する(村役場の調)。以下大抵村役場にて調べた名稱である。大涌澤の北方で「等高線の數字ある尾根の北のものはカ澤」とあるは桑澤、「南はシャブ澤」とあるは小白布澤。更に「其上流で六二七米三角點の南のものがヘングリ澤」とあるは平郡澤、「北がタカラン澤」とあるは寶澤。クチハシ澤の北方で荒澤の南方に小荒澤のあることを附記する。尙ほ「合地の櫓」とあるは、木地山方面及桑島は合地澤の頭と稱すとの事である。(以上二十九頁)

「アラ澤の北のものがスナ澤で、丸森の西側を流れて居る」とあるは、丸森の南側に流れて居るものではないか。丸森の西北を西から流れて南向するものが關の澤。

地圖上の木地山とあるあたりの平を廣河原と稱し、朝日嶽圖幅の荒澤附近の平地をコウガイといふ、この附近一帯は官有地で、地圖の西根村入會地とある地の字邊から西南に流れるのがマツタミ

澤、同じく會の字から西流するものがヒコエブ、吉澤氏のホド澤とあるは長澤と聞いた。

(以上三十一頁)

三 祝瓶山に登る

三月三十一日。快晴。

昨夜は相變らず熟睡が出来て、身神共に元氣旺盛。午前五時三十分頃起床し、早速屋外に飛び出して天候如何と仰げば昨夜來の雲切れ難く、目指す祝瓶山は殆ど姿を現はさないのみか、昨日歩き廻つた柴倉山の方さへ薄雲に掩はれて氣懸りになつたが、氣温も低く、南方の空が漸く明るくなつて來たので、尙ほ様子を見るために朝食後も家人等と雑談をして居る中に、益々南方の雲が晴れて旭光さへ輝いて來たので出かけることにした。昨日の雨で雪もかたまらないからと云ふので、かねて用意して來た克蘭ボンもロープも残し置き、唯シャベルのみを持つ、若しもの場合にはこれで足場を切るから大丈夫だと保證してくれたのに安心して、別にこれといふ程の用意もせず午前八時三十五分出發。背後の中ノ澤の架橋を渡り、今日も暫くはスキヤを付けて廣河原を進む。稍々進むと右手から小澤が入る、カマ澤と云ふさうだ。この附近は全部雪に埋もれてシバも殆どなく、それに雪も固まつて居るため何處でも自由に歩いて吞氣である。暫くするとコウガイに出る。カツラ、ホウ、シナノキの疎林をなして居り、之を通して四周を眺めるのも心持がよい。この邊迄來ると空は全く霧れ亘つて一點の雲影もない美晴となり、澄み切つた青空の中に前面には大玉山が高さに似合はずドツシリと控え、左手には祝瓶山がピラミッド型の全容を示し、所々に岩壁を露はし、又東西に雪庇の著しく發達したのが望まれた。午前九時十五分マツタミ澤を通過して四周の景觀に心酔しながら進む。丸森の對岸の平も一帯に丸森と稱して居るが、如何にものびやかになつて居て心持がよい。ゼンマイが非常に採れる

ので、その頃には多數の人が入込むとの事で、小屋の跡など二三箇所見えたが、地圖上の小屋は現在は雪に埋もれて居るので所在を明かにすることが出来なかつた。ヒョエブ、長澤、八兵衛澤を横切つて、午前十時四十五分角楢と本流との合流點の側の窪地に着く。本流は幅五間位であつたが、靴を濡すことを欲せぬため、人夫に脊負はれて對岸に移つた、深さは膝を没する位で、さしたる危険もない。空は彌が上に晴れ上つて暑さを覺ゆる程で、祝瓶山、大玉山は前面に、柴倉山の連山は後に姿を現はして居る。少憩して午前十一時出發。尙ほも多少起伏してゐる所をスキーにて進むに従ひ、大玉山、祝瓶山の兩峯も漸次姿を變じ、益々偉觀を呈して來る。午後十二時二十分大玉山から角楢に注ぐ一支流なる赤花澤の入口邊にて少憩、四周の景觀に酔ひながら晝食を喫す。此の附近からの祝瓶山は角楢の麓より絶頂に至る全容を現はし、特に東面の鋭い尾根と之に連なる一支峯に至る壯觀は、呼べば應へん許りに近く展開してゐるだけに尤も見ものであつた。風も殆どなき快晴で、私等の行の惠まれた事を心から喜んだ。

十二時五十分必要品のみを携へて出發、西北に進む。これは夏の頃小國方面に通ずる細道なるも、現今では白雪に掩はれて、所々にブナの疎林が物靜かに樹影を雪上に落して居るのみである。大分傾斜を増して來たので途中でスキーを脱ぎ、人夫の踏付けた足跡を注意しながら進むのであるが、餘りヌカリもせず却つて早くスキーを棄てた好結果を喜んだ。尾根の途中から西方にからむ。愈々尾根に出る所には低きも二間位高きは五六間の雪庇が土手の如くに發達して居るので、シャベルを以て打ち破つて尾根上に出たのが午後一時三十分であつた。前面に我等の迎る祝瓶山北方の急斜面が現はれる、何の用意もなく取付くことが出来るかと不安の念に驅られたが、大玉山に向ふ尾根はスキー登山としての興味があるやうに思はれた。これから尾根上を辿つて行くと、始めの程は傾斜は緩かなるも雪がヌカルため歩き悪く、折々雪庇の上を傳ふのは何となく不安に感ぜられた。この時に西北風が少し吹い



丸森より視瓶山を望む



岩永信雄氏撮影 同上

て来たが空に一點の雲影のないのが何より嬉しい。目指す祝瓶山は頂上から西方に曳く尾根が雪にも犯されぬ真黒い岩面を露出し、逆光線を受けて物凄く光つて居る。漸次近寄つて愈々急傾斜の斜面に取付く、遠望した際の様子とは異り、三十度位の傾斜で、雪も相當に固まつて居るので足場を切る必要もなく、唯足下を注意して緊張味を以て進み、午後二時五十五分頂上下の尾根上着。頂上は目前に踞座して快く私等を迎へて居る。この突端に三角峯型の高さ十米突程の雪の槽を見るも物珍らしい。もうこれからは今迄の緊張もなく暢氣になつて一向頂上へと念じて進み、最後の一部分の一寸した急傾斜を、岩面や雪上に頭を擡げてゐるシャクナギの小枝に縋りながら登り、午後三時十五分頂上三角點（一四一七米）に安着。積年の希望がかくも順調に達せられたその瞬間の喜悅は全く譬へん方もなく、先づ心から「ヤホー」を叫ばざるを得なかつた。あたりは全く物靜かで、山々は遠く私の聲に反響した。風は少しくあるも雪なく、眺望絶佳、飯豊連峯は逆光線を受けて鼠色を呈し、三面方面よりは遙かの日本海も折柄の夕照に溶して黄白色に輝いて居る。朝日連峯の大朝日岳、平岩山、御影森山（小朝日岳は見えず）等は午後の陽光を真正面に受けて、ギラ／＼と光を放つて居る。遠く、藏王、吾妻、磐梯方面も、盡く指呼の中にある。近く南方を眺めると昨日私等を樂しませた柴倉山は、足下に伏して私等を仰ぎ迎ふるが如く、しかも此方面よりの登攀は頂上近くの岩壁の險惡なる爲め餘程困難らしく思はれる。西方の狭谷も明かに指點された、殊に石瀧川方面は真黒い岩壁を所々に露出し、この流域の物凄さを語つて居る様である。この大觀に接して心は陶然として酔へるが如く、山高さを以てのみ尊しとせざるの感を深うした。斯くて心ゆくばかり快を貪り、午後三時四十五分、最後の別を惜みつゝ下山する。この邊でコケモ、を見た。

下りは氣も樂で、途中人夫が足を踏み外して小クレゾアスに落込んだのも一興である、午後四時直下の尾根着。此處から來路を辿るのは時間を要するし、且つ東面の谷々は可成の急傾斜をなすも、今

は日蔭となつて居るので雪崩の心配もない故、此處を一氣に下ることにした。下るに従つて益々傾斜を増すのみであるが、足場を確と占むることが出来るので少しの不安もなく、瞬く間に五、六百米突を下ることを得た。途中所々に表面雪崩を見る。下りかけた所から北東にからみ、晝食した所に着いたのが午後五時であつた。祝瓶山も今は全く淡い夕照の逆光線の中に靜かに包まれ、吾妻、磐梯等は明かに望見することが出来た。残品を整理して午後五時二十分出發。氣温低きため私のスキーも相當によく滑走して、午後六時角檜と本流との合流點着。人夫の來るを待ち、又脊負はれて對岸に移つた。日は漸く暮れて星は中空に輝き初める。出来るだけスキー滑走で快味を味ひながら進んだが、遂に木地山に至る少し手前にて日も全く暮れて、皆目見えなくなつたので、提灯を持つ人夫の來るを待ちて共に前進し、中澤を渡り、午後七時四十分清野氏に迎へられて同氏宅に着、直に入浴して今日の幸多き想出を語りながら夜食をすまし、暫く雑談に耽つた。屋外に出ると夜色濃やかに、オリオン星座は燦然と輝き、明日の快晴を語つて居た。

次に平野村役場で聞き得たこの附近の小澤について摘記する。

野川の本流が八兵衛澤の少し北で西北に分つ一大支流が角檜、これから少し北に進んで地圖に平野村及西根村入會地と記されてゐる及と西の字との間を西流するのが風鈴澤、その稍々北で及字の邊から西流する一小澤が履割、その反對側で稍々西北からの一支流が石割、野と村の字との間を西流するのが彦松澤、平の字のすぐ北から西流するのがチンチョウ澤、その反對側から東流するのが赤岩澤、大玉山とある山の字の南から東流するのが赤苧澤、平岩山西南の一隆起から南に入るのが溫澤、その東で平岩山から源を發するのが五貫澤である。又地圖の七〇〇の數字のある邊を桑平と云ひ、この邊から東に分れて四の枝澤がある。御影森山から西するのが小旭、御影森山南方の一隆起（一四四〇米）邊より西流するのが桑平向、その稍々南方で西流するのが切立澤、これが又分れ

て一三四三・二米邊から北流して切立澤に入るものがオフトミ、地圖の九〇〇の數字の北で西北に注ぐものを平澤西と云ふ。

四 葉山越え

四月一日。晴天。

今度の旅では毎日入浴が出来、ゆつくり蒲團にくるまつて寝られるのが何よりで、いつも熟睡する爲に朝起ると氣が清々する、午前六時頃外に飛出して眺めると、空には一點の雲影もなければ風もなく、柴倉連山は目前に、北に離れて昨日登攀した祝瓶山の突兀たる雄姿は朝暾に浴してキラ／＼と黄金色に輝きて仰がれ、何とも云へぬ崇高な眺めに暫くは獨り靜かに無我の境に入つてゐた。七時三十分頃山百合の馳走で朝食をとり、樂しかつた旅を歸途へと準備を整へて九時十五分スキーを付けて出發した、藤三郎氏や昨夜一泊した獵師も、尾根上迄同行することにして、廣河原を過ぎ大涌澤を溯つた。

この澤は水量も可成多く、河幅も二三間はあり、兩岸とも逼迫して所々に雪崩の跡ある故、スキーを脱いで進む、九時四十五分大涌澤が北流する所に一支流が西流して合する、カナグラ澤と云ふ、全流雪に埋まれて居る。此處で一呼吸入れることにした。朝來餘りに晴れ過ぎたせゐか、この頃から春霞がかゝつて暑さを覺ゆる程である。午前十時出發、人夫等はカンジキを付けて登る、約二十分程の間は、兩岸掩ひかぶさるが如くに迫り、至る所雪崩の跡を見た。それから登るに従つて餘り傾斜も甚だしくはない。又二十分程して炭焼小屋二つを見た。下の方には炭焼が居て、今日は里に下るとの事、他は半ば雪に埋もれて人の氣配も見せなかつた。この邊からは雪崩もない故、スキーで登攀することにした。登るに従つて柴倉連山や祝瓶山が立派な姿を現はして來る。尙ほ澤を辿ることにしたが、暑さのため途中冷水で渴を醫す快さが忘れられぬ程であつた。

午前十一時四十分尾根上着。少し風あるも雲はない。春霞がこめてゐるので、藏王、吾妻、飯豊の諸連峯は糨糊としてけじめもわかず、目前の左手には私等が下るべき尾根が白雪に飾られて居る。尾根上は広い雪野原で何處でも自由に辿ることが出来るので、全く享樂氣分に浸りながら四周の大觀を賞することが出来る、この連脈を境界として左手山岳地方面は白皚々たる銀世界、右方平原地方は至る所に鬱蒼たる森林の世界を現出して、好個の對照をなして居る。前面には安部ヶ館山の圓丘がのびやかに擴がつて、頂上近くに黒い草地を現はして居る。これから全く氣も樂に尾根を辿り、途中清野氏等と別れて午後〇時十五分安部ヶ館山頂上東側にて少憩、四周を眺めながら晝食をとる。目指す葉山方面は日中の強烈なる光を受けて輝いて居る。午後〇時四十五分出發、尾根上を引續き辿る、この邊は至る所豁然として障礙物とはなく、傾斜も緩やかで、スキージェレンデとしても十分暢氣に享樂することが出来るのである。ワラビ、ゼンマイを採るためか所々にいぶせき小屋が散在して居るが、今は人氣もない。こんな所でゆつくりスキーを樂しみたいと思ふ。更に緩やかな起伏を踰えて、一二〇・二米の附近に不必要な荷物を残し置き、神社の森を目がけて進み、午後二時三十五分葉山神社着。社は二つある、一は權現で他は苗代の神を祭り、孰も高さ九尺、幅一間程あり、相當に確りした建築である、附近に天然の苗があつて、一本に三粒の實がなればその年は豊年であるといふ傳説がある、祭りは六月に行はれるとか聞いた。附近のブナの疎林感じよく、殊に祠後の森林中より見る朝日連峯——大朝日岳、小朝日岳——は一幅の自然の畫圖を展開したものゝ様で如何にも落付いて居る、途中では祝瓶山の全容を望むことが出来たが、此處からは僅かに頭部を望み得るに過ぎなかつた。社前に額づいて幸多き旅の好結果を感謝し、十分休憩して午後三時二十分スキーを付けて出發、下りにかゝつた。氣候溫暖のため雪質惡化し、スキ一の快を十分に食ふことも出来なかつたが、途中相當の氣持よきゲレンデを滑降しながら、祝瓶山に最後の別を告げ、東南の方向を辿つて下る。午後四時十



む望を山玉大りよ上根尾間山玉大山瓶祝



社 神 山 葉

影撮氏雄信永岩

五分二本杉の所に來た、これは遠くからの好目標となるもので、其下に小祠がある。こゝからいきなり傾斜が急になるのでスキーを脱ぎ、一氣に三百米突程下つた。すると伐材をしてゐる場所に出て、再び下界の人となつたことを感ずる。こゝで又スキーを付けて木切道を滑走する。顧みるに四方の山は折柄の落日に燃えて、夕映えの色見事に、私の豫期以上の幸福なる旅を終つた事を祝つて呉れるものゝやうに思はれて感謝の意を表したい心が動いた。長者原を過ぎ、午後五時十五分川原驛の古四王神社の側迄來てスキーを脱ぎ、六時二十分長井町に入り、八時三十八分長井驛發、人夫とは時庭驛にて別れ、赤湯驛發九時四十四分の急行にて翌朝九時頃歸宅し、積年の希望を満すことを得た此旅を愉快に終つた。(二・四・一七)

越後赤谷口より飯豊連峰へ

藤 島 源 太 郎

昭和三年八月十五日、新潟市より自動車にて新發田町に至り、午前九時二十五分發の列車にて十時赤谷驛着。加治川に沿うて湖り、飯豊湯ノ平温泉泊。十六日、温泉湯よりセンダク澤に至り、清十郎澤を溯行して、北股岳直下に野營。十七日、北股岳、センダク山を経て飯豊山頂上御室泊、十八日、引返して再び湯ノ平温泉泊。十九日、新潟歸着。

參考地圖 五萬分一 津川、飯豊山、大日岳。
廿萬分一 新潟。

は し が き

昭和三年七月二十六日夜の湯ノ平温泉は大賑ひであつた。これで新兵衛が居れば申分の無い顔觸れ

だと誰かゞ云ふ。北蒲原郡赤谷瀧谷兩村の飯豊山通を以て任ずる天狗連の集りて、道すがら飯豊川や北股川から各自が釣り揚げた尺に餘る嘉魚を肴に、一杯傾けた後の山話であるから、氣焰當る可からざるものがあつた。十二度登山の記録を持つ片野治三郎、小柴太次郎、杉原新太郎、井上平次郎の諸氏は、飯豊山參拜登山の傍ら、雜草を刈拂つたり、雪の消えた後に現はれる迷路に十二番線の針金を引いて標識とする奉仕の爲めの登山であり、小柴豊吉、佐久間清十郎等の山案内者も居合せ、山澤の名稱や地理に就て得る處が大であつたことがこの紀行を書かしむるに至つた動機となつたのである。

其夜問題となつたのは、センダク澤とアカソブ澤の位置、及び石コロミ澤ノ頭（二千二十四米八）と烏帽子岳（二千七十七米八）の山名であつた。センダク澤とアカソブ澤の位置名稱は、山岳第二十年第三號の沼井氏の記事が正確であつた。アカソブ澤はセンダク澤の上で、落口が赤い斷崖の連続せるより導かれたもの、赤澁の意味である。

石コロミ澤ノ頭は沼井氏が玉川方面の名稱であると紹介されたのが初めて、二十萬分一の地質圖幅には三國ヶ岳と記入してあり、福田氏は山岳第二十二年第一號の紙上にて、會津方面の稱呼梅花皮山とし、新發田營林署の地圖にも同名が記入してある。山形高校山岳部はフスマ岳と記した小旗を頂上に置き、瀧谷新田の新兵衛事佐久間庄太郎及び赤谷村の九右衛門事小柴太次郎は、三國山と云つてゐる。以上五の外に、赤谷村山岳會の會長井上平次郎氏は、北股川のムキ山だからとて北股岳と新稱し、座に連なる山案内者も越後の山だからと之に賛成する。私は一の山に對して幾つかの名稱を濫造することは好ましいとは思はないが、北股岳が一番氣に入つたので、以後越後方面では北股岳を正名とする事に決した。

次は烏帽子岳（二千七十七米八）である、これも沼井氏の記事から呼ばれる様になつたが、福田氏は會津名の檜山を稱し、新發田營林署の地圖には大西山となつてゐる。赤谷村山岳會では湯場の前の烏

帽子山（千五百七十二米九）が有るので其名を採らず、センダク澤のムキ山だからとてセンダク山と名付けてゐる。私は山容から見ても平凡ではあるが、烏帽子岳の名が當を得てゐる様に思ふので暫く烏帽子岳説に左袒したい。

赤谷口の道がアカツブ澤を登つて國境へ出た處を、新發田營林署の地圖では檜山と呼び、赤谷村では御峰又は大峰と呼んでゐる。これは元來信仰から開かれた道だから御峰と稱するのが正當であらう。

御峰から五町ばかり東にある池を川入口では越後沼、赤谷口では御池神社と云ふが、これは御手洗池の方がよい様である。

御西岳（二千十二米・五）が眞の三國岳と云ふ可き山であるとは、山岳第二十年第三號所載の武田氏の記事の通りで、大日岳圖幅の三國岳（千六百三十一米）から尾根通りを狭いながら御西岳の西端御田迄岩代國耶麻郡一ノ木村の地が割込んでゐるから、そこが事實三國の界である。それは飯豊神社の山上の神域で、十六町八段歩に亘りて高原地をなし、全國でも最も大なるものに數へられ、富士山も及ばないとの事である。

頂上の小屋は一間半に三間、十人は泊れるが勿論寢具も食糧もなく、神官専用のもので、例年八月五日が山開きである。

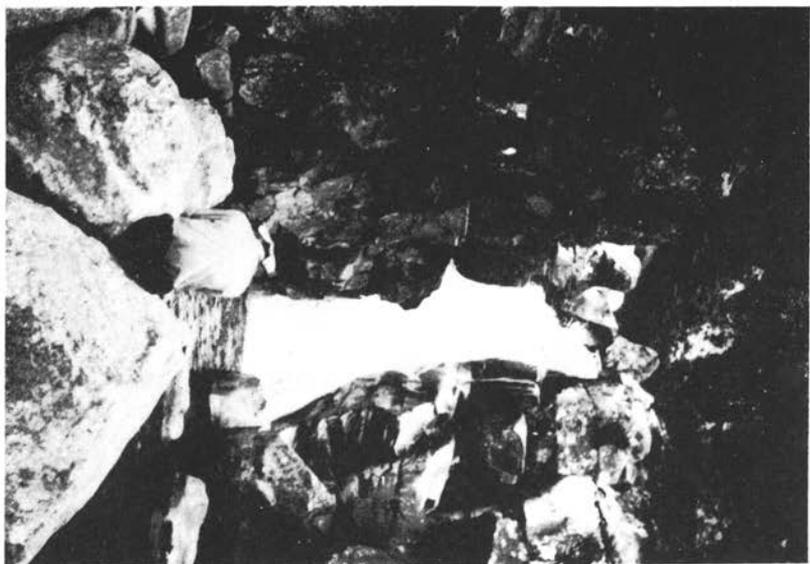
尙ほ地圖には上流迄加治川と記入してあるが、土地の人は、内ノ倉川との落合に在る中々山から上流を専ら飯豊川と稱してゐる。

一 飯豊湯ノ平溫泉場へ

八月十五日。昨夜中央青年會の富士登山隊を送つてから、三十分程で山仕度は出來上つた。雨合羽

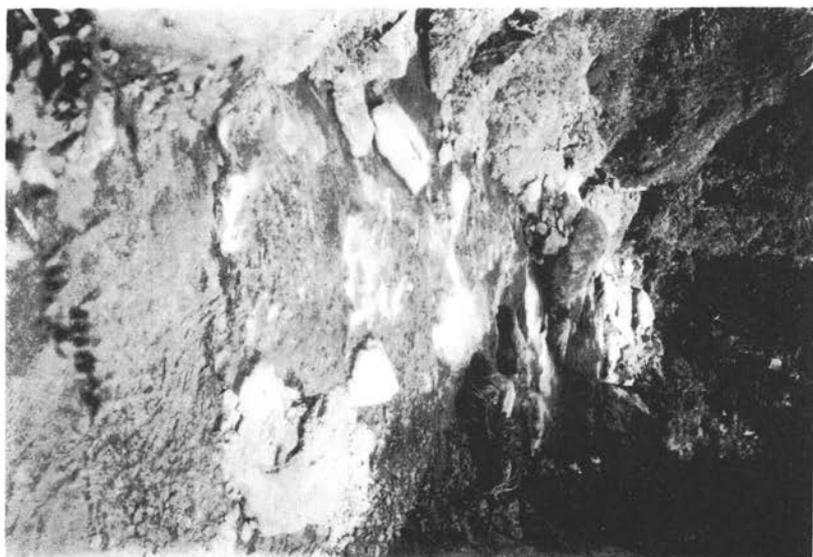
と毛皮のチョッキと、後は米と味噌だけでテントも不用の氣輕の山旅、相棒は例によつて、會員安藤正一君である。午前七時万代橋の下から新發田行自動車に乗り、菱ヶ岳五頭山を右に眺めて、二王子岳を正面に望みつゝ、新發田の町へ八時半着、温泉へ物資を供給する齋藤店で二三の用事を果して、九時二十五分發の赤谷線列車にて十時赤谷驛下車。原驛長は嘉魚釣で有名な人である。道中は蟬も鳴かぬ暑さ盛り、汗の流れる割に足は進まぬ。道は飯豊川の左岸に通じてゐる。上赤谷村より十五町で瀧谷村への朴名の橋がある、馬ノ髪山から西北へ流れるのは釜ヶ澤で、合流點の直ぐ上で本流を渡り、對岸瀧谷村へ通じてゐるのを釜ヶ澤の橋と云つてゐる。村と猿橋平との略ぼ中間に、琴澤が俎倉山から發して西北に流れ本流に注ぐ。鐵橋が架してある。此邊より兩岸は花崗岩の斷崖となり、十町程にして鳴神と云ひ、新潟電氣第一發電所の堰堤があり、百三十尺の高所から爽かな音をたて、水が溢れ落ちてゐる。堰堤の出來ぬ以前も此處は瀧であつて、飯豊川の落下する響きは鳴神の如くであつたといふ。對岸にウチノ澤が細く急に落込んでゐる。燒峯山(東臺山)から南流する袖の澤を左に眺めて進めば、間もなく道は二岐してゐる。本流の大鐵橋を渡らずに其儘よく踏んである小道を辿る、鐵鑛石でガラス粉を散らした様にキラ／＼してゐる。十分に猿橋平の大吊橋に着く。長さ三百尺水面から高さ二百四十尺もあつて、飯豊本流へ虹の如く架つてゐる、橋上から俎倉山と其東の九百二十米の峰との間より北へ流れ落ちる簀立澤の落口の飛瀑が見える。此澤は上流にて二俣となり、東を大簀立澤、西を水無澤と云ふ。上赤谷村より二時間の行程で、湯ノ平温泉へ三里一町二十間と記してあつた。

赤場山へは頂上から西北に流れてゐる古俣銅山所在の古俣澤を渡つて、祝の鼻(七百三十一米)から南へと尾根續きに登るので、大體道も通つてゐる。猿橋を渡つて右岸に移り、暫く平を行くと烏帽子岳の殘雪やセンダク澤の赤兀が遠く眺められる。續いて道はミヅナラの林に入る。燒峯山から南へ



藤島源太郎氏撮影

北殿川
観音瀑



湯ノ平温泉附近の飯豊川

流れて本流に入る澤は、輪車倉澤から始り、寝又澤、師走澤、鱒取倉澤などで、次に赤カルの岩場となる、カルとは岩の意味である。對岸の大きな澤は萩場山頂の東面から北流する蟹澤で、落口に近く飛瀑となつてゐるのがよく見える、蟹澤の東の千三十五米七の三角點はダンベイ峰といふ。赤カルから赤荊澤、芋澤、七本木澤などを過ぎて芳小屋澤に至るとだんな様の木がある、大きな櫛で山ノ神様を意味する。次の飯豐澤は陸測五萬の大日嶽圖幅で加治川と記入してある治の字の東で本流に入る澤である。だんな様の木の下は平でキャンプの好適地といへる、私等も汗を拭つて一服した。猿橋から一時間程であらう。村から湯場への中間に當つてゐる。新發田藩政の頃、藩士の燃料にこの山々の木を春切つて秋飯豐川へ流し、加治川から新發田へ揚げたものであつたと。その事も此附近に大木の少ない原因の一つではあるまいか。加治川の加の字の處の澤は小倉澤で、對岸の千三百十九米四の高立山から北へ流れるのが都澤である。本流には吊橋が架けてある。其道は明治四十二年に切開いた營林署の巡視林道で、猿橋から左岸をこの都澤迄通じてゐること。次が大倉澤、松ノ木穴澤で、松ノ木穴澤は落口のみが大日嶽圖幅にかゝつてゐる。この澤の水は冷くて美味であつた。次が四郎左衛門澤で、暫く行くと小さい平に温泉の中繼場にしてゐる物置小屋があつた。對岸からは熊澤が注いでゐる。

赤津山から南へY字形に赤津澤が大きく流れ込む、其手前一町餘の間は赤津の嶮で、削り落した岩場に僅に道が通つてゐる。落口の瀧も見えた。掛留澤から深く抉れた曲澤を過ぎ山の神澤に出る、その澤を一町も溯ると八月中旬でもまだ残雪があるといふ。道は北股川へ下つてゐる、右岸に沿つて溯ること一町二十間、地圖の北股川の股の字の邊に北股ノ瀑一名觀音瀑の壯觀がある、水量の多い時は三本瀑となつて落下するが、今は中央を本流の全部が落下してゐた、高さ十間もあらうか。瀑壺を圍む怪奇な岩石と共に珍らしい觀ものである。上流の彦兵衛瀧は、未だ誰も見た者も知つてゐる人も無いとの事で、或は間違ひではあるまいかとも云はれてゐる。道は立派な棧道であるが、元は大正二年測

量技手田中氏の落命した本流との落合の石を飛んで渡つたのだ相で、棧道も雪が谷を埋めてゐる時に架けるのであるといふ。對岸の澤は大ヤット澤で、その下流のが小ヤット澤である。此處から湯場へ十六町餘、三十分で達する、道は岸を登り山蔭に入つてミヅナラの美しい林の中を行く、水天狗坂を注意して降り、湯の幾ヶ所となく湧いてる磧を通り、小高い平地へ出ればそこが湯ノ平溫泉場で、我等は觀音瀧へ往復して遊んだ爲め、午後六時に辿り着いた。

宿は二間に六間のテント張りで、炊事小屋の外に二つ許り小屋もある、溫泉はその先一町位の飯豊川から十間程離れた磧の花崗岩の所に三ヶ處から湧出し、湯壺は一つだが湯瀧もあり、黒部川の鐘釣溫泉を小さくした様で、なか／＼感じのよい自然そのまゝの溫泉である。蛎も蚊も居なかつたが蛇の多いのに閉口した。早天續きで殖えたものだと聞く、自分はそれでも蛎よりはよかつた。

強力は勿論使はない豫定であつたが、安藤君が途中暑氣に當られて元氣が無いのと、強力がセンダク澤の溯行も大日岳の登攀も初めてだから是非連れて行つてくれと頼むので、雇ふ事とし、米や味噌を持たせる事にした、名は佐久間清十郎（五十五）、瀧谷村の者で茶屋をしてゐる爲に里人は茶屋と呼んでゐる。湯場に居て飯豊山の案内をなし、昨年は三度今年は五度目で、春は毎年シン山に入るといふ。雪にも澤にもそれからアルコールにも相當に強いが、藪は大嫌であるらしい、風に揺らぐテント小屋ではあるが、二百燭光のガスライトにまもられてのび／＼と寝た。

二 センダク澤より北股岳直下へ

十六日、晴。小屋からセンダクの尾根が見える、今日も天氣は快晴だ。出發は午前六時四十五分となつた。浴槽の後の押出しの様な登りに梯子が架けてある、暫くは見送りの人と私等の間にヤーホーが取り交はされていつか道はブナ林に入る。道のべの草は早天續きに露も下りないと見えて、枯れて

居るのが多い。茶屋は今年北股川を越えたあたりの道へ熊の出た事や、センダク澤から登りの鳥井坂の陣竹藪で、筍を食つて居た熊に會つたことなどを話す。

對岸には烏帽子山東側から發するヨモギ澤や、次の中ノ澤や、小大日三角點から西へ延びた一千六百六十五米の峰と北に派出した一千五百五十一米一の三角點との間に發する黒澤など、大きな澤があるが、右岸には小澤ばかりで名も無い様である。黒澤の次の無名の澤の落口に對するあたりは、一寸と平になつて、ナラ、朴ノ木、桑ノ木等がある、此處を留平と云ふ。飯豊主山脈北方の雄北股岳から湯ノ平温泉へと長い脈を曳き、飯豊川と北股川を分水してゐる尾根をオーエンの峰と云ひ、六七月の頃ならば残雪を踏んで北股岳への愉快な峰傳ひが出来る。オーエンといふのは、留平から登り切つて北股川側に面した處で、シン山の時の狩場の名で有つたが、今では此尾根を總稱してオーエンの峰と呼んでゐる。新發田營林署の地圖には逆峰と記入してあるが、その意味は不明である。大正九年橋本氏の一行が遭難したのは、不動ノ瀑の邊からオーエンの峰へ取付き、峰傳ひに進み、北股岳附近の草場で足跡が消えて、全く行衛不明になつたのだと、搜索に盡力した井上氏は語られた。今年の六月六日、二高山岳部は小柴豊吉を案内とし、留平からオーエンの峰傳ひに北股岳、飯豊山と縦走してゐる。

不動ノ瀑の手前の岩場は燕岩ツバクラと云ひ、道は大兀にかゝつて上下二段に分れてゐるが下の方を通る。飯豊川の深谿は此處で實に豪壯な岩壁を見せてゐる。九時二十分、不動ノ瀑を正面に見る瀑見澤に着く、瀑壺から一町許りの間、谷は残雪に埋つて下に大トントルを作り、飯豊本流は岩に激して不斷の唸りを立ててる。豊吉と下山して來た登山者に會つた。十時五十分孫左衛門澤で小憩、直に天狗岩の大禿にかゝる、何處を通つても足場は良い、随分廣い赤岩で、道は上部に見出される、向ふに越えて曲り角へ出ると、大日岳から飯豊の御峰や、センダク尾根が一度に展開する。次が平ノ澤で、そろそ

る陣竹が道の邊にも見出される。

センダクの荒澤へ下り、暫く溯つて大岩の上へリュックサックを下ろしたのが午後十二時半、こゝで晝食にした。バットをふかしてレモン水を飲む。履いて来た下駄を草鞋に代へる。安藤君もネールドブーツをリュックサックへ縛り付けた、對岸の大日岳は執拗な雲に巻かれて少しも頭を見せぬが、私等の行手はカラリと晴れて雲の一片だに飛んで来ない。重厚な飯豊連峰のドッシリした山容を見上げて考へる、あの高さ迄今日中に登りたいが、前途は様子の知れない荒澤だ、時もさう早くはないし、天候も何時變化して来るか解らない、それで心配にもなるが、又昨日の疲勞を途中で慣らしてすつかり快復した安藤君を見ると氣丈夫になる。さあ出懸やうと元氣に聲をかけたのが午後一時。

五分と進ぬうちに第一の瀧にぶつかると、上には残雪が光つてゐる、左岸の岩を搦み乍ら登つた、モウセンゴケが多い。藪を歩き過ぎて後戻りをし、大きな岩を一本のツツヂを頼りにこはごは左岸の磧へ下り立つと、十間程進んでから右岸に渡り、残雪の下を通つて岩との合せ目に出で、鉈目を入れ乍ら這ひ上る、残雪からは雫が落ちて冷たかつた。そこは烏帽子岳から西南に流れる澤と、北股岳から南下する清十郎澤（佐久間清十郎の名を命じた新稱）との落合で山の西面としては非常に大きな残雪であつた。こゝで右するか左するかに就て三人で相談した結果、左の清十郎澤のムキ筋を何處迄も登り詰める事に一決した。ムキとは幹の意で本流の事である。時間が餘り遅かつたり天氣が氣遣ひだつたから、登山道に近い右股を溯行する考へであつたが、兩方とも心配する程のこともない。それに右股は直に兩岸が斷崖となつてゐるから、若し瀧が有れば一通りの骨折りで済むまいと思はれたので、右岸を傳つて左股へ入つた。澤は一度西へ向つてそこへ小澤が一つ合し、又北向きになつてゐる。三つの瀑が連続して現はれて来た。どれも四五間の高さだが、瀧壺は深いし手懸りは無い、最初の瀧は僅かの灌木を頼みに右岸を大きく搦んだ。二番目は清十郎は左岸をへズリ、瀧頭の滑らかな岩に僅の足



湯ノ平温泉浴槽



不動瀑と残雪

藤島源太郎氏撮影

懸りを見付けて巧妙に通り返けた。私等は左岸の赤岩に取り付いたが、礮に下りるあたりが岩も脆く足場も悪かつた。三番目は皆左岸をへずつたが、三段になつてゐて長く且つ高かつた、私は左足に瘻撃を起して、それに氣を取られてゐたので、どうも記憶がハッキリしてゐない。兎に角三つ目を越えて小澤の様な窪みを見付け、藪を押し切つて礮へ下り、とある曲り角で休んだのが二時であつた。大日尾根と相對して可成登つたことが分る。澤の傾斜も加はり先途も見えて來た、もうこれから上は大きな瀧も無さうなので氣樂になる。

其後二三の瀧も有つたが容易に通過して二時五十分、澤が又二岐してゐる所に來た、右の水量の多いムキを進むと、谷も廣く明るくなる。巨岩を飛び越えたり下を廻つたりしてぐんぐん登つた。三時二十分澤は又三に分れる、千五百米の邊であらう。中央のタツを登つて行くと澤は俄に細くなり傾斜も急となる。丁度アカソ澤を溯行するのと同じ様であつた。展望も利いてきたが、山に餘り近い爲か、どれが北股岳やら烏帽子岳やら解り兼ねるが、オーエンの峰を左手にハッキリ見てゐるので心配は無い。枯木が白くされて痕跡と澤に横はつて居るので、清十郎は此邊で泊り場を捜さうと云ひ出した。リュックサックを下して空身になり、安藤君と二人で先の様子を見る爲に、三十分餘りも進んだが思はしい所も見當らないので、私は密生した陣竹の藪へもぐり込み、右へ廻り乍ら小高き處へ抜けると、素晴らしく美しい絶好の泊場があつた。そこは南下してゐる清十郎澤を丁字形に横斷して、東西の方向に殘雪の横なはつてゐる長い草地で、後はオーエンの峰と北股岳とに包まれ、前には陣竹の藪を圍らし、南京小櫻の可憐の花が揺らぐともなくゆらいでゐる。土地は乾いて冷い水には雪の匂ひもない、燃料にはナナカマドがある。残した荷物を取りに戻つて、四時四十分には再び泊場に來た。北股岳の直下千七百米の邊である。

五時三十五分、太陽は早やオーエンの峰かげに沈んで、暫くは東方の大岩の露出した峰に夕映えし

てゐたが、それも薄く消えた頃、晩飯の用意が調つた。清十郎は四合瓶を平げて、今日の湖行を心から喜んでゐる。私等も嬉しかつた。テントを張る世話も無ければ中に入る窮屈さも無い。唯だ露拂ひの爲にスリーブングバッグにもぐり込む。

三 北股岳より飯豊山へ

十七日。晴後風雨強し。朝露にしつとり濡れて、蝸の大群の襲來にはね起きたのが午前五時。陽は燦々と輝いて朗かな朝であつた。晝飯も用意し、酒好きの清十郎は残りの酒に舌鼓を打つて、今日は水に變りましたと瓶へ冷い水を詰め、苦笑しながら出發したのは六時半。附近に熊の生々しい糞や足跡が多い、恐らく遊び場所であるらしい。正面の峰の東側の小澤傳ひに一段上の平に出る、残雪もところどころに有り、お田も有つた。オーエンの峰と北股岳との鞍部を目指して進む、雪消の跡に萌えたばかりの緑の草地は、傾斜が急になると足が滑るので登り辛い。イハイテフ、チングルマ、ナンキノンコザクラ等の多い小高い所に腰を下して、暫く朝の眺望にふける、呼べば應へん許りに近い大日岳は、峯頭は生憎雲に隠れてゐるが、雄大な尾根を張つて聳え、遙か西に連る烏帽子山の烏帽子が其名に背かぬ形を見せ、萩場山と飯豊川の深箒を隔て、北に相對する赤津山を初め、遠く北アルプスの白馬岳や後立山山脈の諸山が朝雲の上に夢の様浮んでゐる。これから次第に北へと廻り乍ら登つてオーエンの峰上へ出た、そして側目もくれず直に東の方北股岳の頂上に向つて熊笹の中に入る、最初は腰位の深さであつたが登るにつれて身動も出来ぬ程に密生した陣竹の藪となり、續いて假松とナナカマドが現れたかと思れば、又陣竹がはびこり、入れ代り立ち代りて一步も入れずと頑強に反抗する。右に轉じ左に廻り、成る可く手薄な方面を捜しながら漸く重圍を切り抜けて測量櫓の殘骸の散亂してゐる頂上三角點に辿り着いたのは八時であつた。新瀨から朝夕に見て、よく大日岳は終日雲に巻か

れてゐても（飯豊本山は新潟からは大日岳の後にかくれて見えぬ）烏帽子岳から北股岳や杵差岳方面は雲一つ無く晴れてゐることがあつたが、今日もその通りで、大日岳飯豊山の頂上は凄く密雲の中に閉ぢ込められてゐた。一昨年新潟高根の石本君と二人、六月五日彌平四郎から登つた時、飯豊の頂上を三國岳から眺め、又小玉川を下る折にちらと覗いたことはあるが、今度の登山は總てが今迄に比べて非常に樂であつたけれども、飯豊大日の頂上は終に見る事を得なかつた。朝日岳は一面の雲海の中に没し、僅かに以東岳の一半と、新潟からも見える鳥海山のピラミッド形が懐しく望まれた。脚下の石コロミ澤は蜿蜒と白くなだらかに、練絹を引いたやうで、靜かにも明るく氣持のよい澤に見えた。豫定では怪奇な二ツ峰から國境へ續く尾根の出会い迄行き、頼母木川の峭壁をのぞくつもりであつたが、平凡な藪をこぎ抜ける面倒さに中止してしまつた。

いつであつたか會員の小林文平氏と二王子岳へスキートの練習に行き、吹雪に暮れたテントの中の燠爐を圍んで、春がきたら二王子から飯豊へ行かうではないかと語り合つた事などを思ひ起して、特に注意して其方面を眺めた。千石平萬石平の赤津山と、幾度も下で聞かされたが、此處に立つて初めて長大な山容を残りなく見渡して殊に嬉しかつた。四月の始めから十一月の中旬迄、幾度となく二王子岳に遊んで居ながら、一度も赤津山のこの立派さに氣付かなかつた自分が又情けなくなる。パイプをくゆらしてゐた安藤君がヒョイと立上つて、氣樂だなと大聲を上げた後は、また森として靜かになる。新潟の町の煙も沖の白帆も見えた。紀念の爲に名を書いた板を残して二人は又もとの下駄と靴を履く。

八時四十分に出發する、泊りは大日岳直下のお池の平の豫定である。下りは笹藪であつた。鞍部迄下ると草地となつて、ミヤマウスユキサウが夥しく生えてゐる、株も大きい。高山植物尊重の念などどこかへけし飛ばさぬ限り足が踏み出せない位だ。そのあたりへ腰を下して手の届く限りのコケモモ

の實を馳走になる。下山の時アカソブ澤で、シロバナヘビイチゴの紅果累累たるをむさぼり食んだそれと共に忘れられぬ美味であつた。

藪は薄いが危ない東側を行かず、西側の山頂に近い方を選んで押進んだ。上下二間の差で困難の度が非常に違ふ。陣竹もつらいが單純だから、甚しい搦みでない限り容易に進む方法を發見したが、假松は下が混み入つてゐるので足は傷だらけになる、ゲートルも杖も使はぬ主義の私等は手だけを存分に使つた。峯頭を一つ搦んで烏帽子岳との鞍部へ着いたのが十時十五分、直に羽前側にある池に下り、池の上の残雪の滴りを集めて喉を霑し、爽快な氣持になつた。

十時四十五分出發、二十五分にして烏帽子の三角點へ着いた。東面のそぎ落ちた荒々しい北股岳は、板豐連峰中第一の豪壯な姿である。玉川のノコギリ目尾根が現はれ、行手に烏帽子の池が光つてゐる。赤谷道がセンダク平にハッキリと見えた。

南へと下る。越後側の千九百米邊に一つと、烏帽子岳を下り切つた羽前側に一つと池が二つあつた。しかし双方とも附近が燃料に乏しいので、泊場としては好適地と認められない。

午後十二時十分赤谷道と合した。これから先は詳細の紀行もある事だから、ぼんの少しばかり書き加へることにする。福田氏の野營した跡へ下つて残雪のそばで飯盒を取出したのが十二時半。一時出發して少し登ると御手洗池である。お田を通過する頃から風が荒れ始めた。二時五分御西岳の手前なる檜山澤へ突き出す大尾根の分岐點に着く、昨年夕暗の迫る頃濃霧に包れて苦い經驗を甜めさせられた所である。今日も霧の往來只ならず風速も刻々に加つてくるので、雨仕度をして急ぐ、涼しくなつて氣持はよいが、草地を搦むに齒の減つた下駄の横滑りには全く閉口した。

二時四十五分、大日岳尾根の分岐點へ出た時は霧小便と變り、お池の平の野營も不可能となつた、止むを得ず今夜は御室に泊ることとし、大日岳往復は明日に延ばして、三時こゝを出發、曇る眼鏡を



部 下 澤 ク ダ シ セ



(央中) 岳子帽烏るた見りよ部鞍の岳股北
影撮氏耶太源島藤

拭き乍らひたすらに道を急いだ。

四時、お鏡雪を吹上げてくる寒風に吹まぐられて飯豊山頂上の御室へ辿り付く。二時間の後、この荒天にかうも遅く、赤谷口から淋しく冷く響く鈴の音が近寄つてきた。

四下山

十八日。荒。午前六時出發。風速三十米を超えてゐるらしいので大日嶽の往復などは思ひもよらな
いから放棄し、大荒れの中を御西岳に進み、頂上の手前から羽前側に廻つて風を避け、御峯からアカ
ソブ澤を下る。下は日が照り輝いて風も丁度よい涼しさに吹いてゐた。

午後四時、頂上から十時間で湯ノ平温泉へ着。萩場山の裏山は山火事で盛んに白煙を揚げてゐた。

(昭和三年九月一日稿)

英國の山旅

別宮 貞俊

梗概

一九二三年七月

二十二日 ロンドン發ラムベリス着。

二十三日 ラムベリスよりスノードンに登る。霧小便にて眺望皆無、東側に下り、ラムベリスバスよりラムベリス着。

二十四日 ラムベリス發マンチエスターにて一寸用事を辨じ、プレストン着。

- 二十五日 プレストン發シースケールより自動車にてワスデルヘッド着。
 二十六日 スカウフェルバイクへ登り、グレートエンドよりスタイヘッドバスへ下り歸宿。
 二十七日 ブラックセールバスよりヒラーロックを見、ヒラーの尾根へ出てブラックセールバスへ戻り歸宿。
 二十八日 再びシースケールへ出てケンシツク泊。
 二十九日 エサンバラを散歩し、夜行にてロンドンへ向ふ。

序

英國にスノードン (Snowdon) と云ふ名山のあることを始めて私が知つたのは、山岳第十七年第二號の八代準氏の紀文を讀んだ時で、其後 G. D. Abraham の著書でスノードン及其附近が近頃の若し人々の心をそゝる「岩攀り」の練習地であることなどをも知つた。また同じアブラハムの著書で、湖水地方のワスデルヘッド (Wasdalehead) は瑞西のグリーンデルワルト及びツェルマツトと列んで世界の Climbing Centre であると云ふ様なこと、殊に週末にホテルの雑踏する模様などを讀んで、山についてはいつでもやる想像を盛にめぐらして居た。

大正十三年(一九二三年)の夏獨逸へ行く途中、第一回世界動力會議と云ふ、大きな觸れ込みの會議に出席するために、ロンドンにしばらく滞在して居たので、閑をぬすんでは靴屋の J. Carter、網屋の Arthur Baile、本屋の Edward Stamford、服屋の Burberry などを馳け廻つて、瑞西入りの支度をしながら、山に這入る前にものみ味ふことの出来る愉快に浸つて居た。

折角英國に來て居る折だから、名山のスノードンへも行つて見やうか、或は湖水地方の山を見て廻らうかと思ふ一方、一日も早く瑞西へ這入つて、久戀のアルベンの姿に接したいと云ふ憧れもあつたが、獨逸で用事をすまして米國へ渡る途中に英國へ來るのは冬の最中になるだらうし、さうすれば日は短し、天氣は惡し、とても旅行をする氣にもなるまいと思つて、マンチェスター、プレストンに一

寸した用事のあるのを幸、スノードンからワスデールヘッドへ行つて、英國湖水地方の岩(Ore)を大急ぎで見て廻ることにした。何しろ出發の時に澤山の六づ難しい注文をされて來て居るから、英國の山を見るだけ位のことをやつて歸らないと、山の連中からきびしいお叱をも受け兼ねないし、また瑞西へ這入る足慣らしにも悪くはない。

山を見て廻るとすると、いくら何でもオフィスへ人を訪問する服装と云ふ譯にも行かず、さうかと云つてトリクローニを打つた登山靴も鶏に牛刀の様な感があるので、あわてゝ、またカーターへ行つて散歩用の軽く釘を打つた靴を作らせるやら、馬鹿々々しく高いリネックサックなども買ひ込む様なことになつて、それから鐵道の時間表と、ベデカーの案内書とを出して、一としきり机上旅行にふけつて了つた。

世間の人の數から見れば、山の好きな人は尠いものだ。ロンドンでのことだが、或る先輩が瑞西でモントローザへ登つたと云ふので感心して了ひ、いろ／＼詳細を聞かうとしたら、何頂上まで電車で行けると云ふ様な話、實はモントローザへ登つたのではなく、モントローザの見えるゴルナーグラートへ行つたと云ふことなので失望して了つた。またユンクフラウへ登攀したと云ふ日本人の大部分は、電車でユンクフラウヨッホまで運んで貰つたのであると云ふ様な世の中だから、湖水地方と云へばウインダーミア邊りを乗合自動車で飛ばした人ばかりで、ワスデールヘッドを中心とした邊の話は聞く邦人には短い滞在中會ふことが出来なかつた。いつもの行けば解ると云ふ流義で、肝心のベデカーすら大急ぎで斜めに読み、荷物をすつかりまとめて了ひ、その旅行をすましてロンドンへ歸つたらすぐ瑞西へ渡ると云ふ忙しい計畫を立てた。

ロンドンよりスノードン

七月二十二日の朝ユーストン停車場へストケースを一つ持つて馳けつけた。第一には Ulanberis までの切符を買ふのに、これをどう發音していいか解らないが、聞き返されたら八代氏の故智にならつて書きさへすればいいと度胸を決めて、やつて見るとすぐ通じた。由來英國人は察しが悪く、發音が悪いと決して通じないが、此所の切符賣りは流石都だけあつて、妙な調子のを聞きつけて居るのだらう。十一時十分の發車までには三十分も間があるが、人はずん／＼プラットホームに這入つて居るので、荷物をポーターに持たせて乗り込む。

慣れない者はまた英國の汽車にまごついて了ふ。何しろ非常に多くの鐵道會社が縦横に線路を引き廻したあげく、今でこそ會社が合同して四會社だかになつて居ても、出發地と目的地との間をどう云ふ風に通るか詳細な時間表を丹念にたどらなければとても解らない。尤も間違ひなく目的地へ行きさへすれば、その途中は何處を通らうと差支へない話だが、出發地と目的地との間には、線路が一つしかない内地で旅行しつけて居る吾々は、何だか頼り無く感じられる。また急行列車だつたら、出發したら最後何十里走つて停車するのだから見當がつかない。今日自分が乗つた列車にしても、ユーストンの停車場を出發してから中々停車しない。只一面に緑の原だの、疎らに樹のある丘の間をまつしぐらに走る。やがて無線電信柱の立ちかけて居るのが見えて、始めて數日前に通つたラグビーの附近を走つて居ることが解つた。それではラグビーで停るかと思ふと轟々と音を立て、通り過ぎて了ふ、ではスタップフォードかと思ふと其所も飛ばす、クルーも飛ばすし、チェスターへも停らず、漸く北ウエールスの海岸の Prestatyn で始めて停つた。それからは列車は屢々停る。Colwyn Bay 附近の海水浴場は殊に盛んで、所々にルナパーク式の娛樂場がある。列車はすぐ海岸を通つて居るもので、水泳着

を着た男女で濱が可なり賑つて居るのも見える。この涼しい英國では、とても吾々は泳ぐ氣にはなれないが、涼しくても夏になれば泳がなくては氣が済まないのだらう。ロンドンで英國人が暑い暑いと云ふのは間服あひくを着て、日向を急いで歩けば、少し汗ばむ位な暑さなのだから、とても東京の眞夏、裸體で居ても汗の流れる様なのは比較にならない。しかし臺灣へ行つた内地人が最初の冬は火鉢を使はなくとも滞在數年に及ぶと、やはり内地に居たと同じとまでは行かなくても、火鉢に親しむ相だから、一體に涼しい英國でも、夏になれば吾々が東京で暑いと感じる様に、英國人は暑いと感じるのだらう。

自分の乗つたコムバートメントにはロンドン出發以來、一人で旅行する老婦人が一人乗つて居るきりであつた。その婦人は畫を描きながら、ウエールスを廻り、スコットランドをぐる／＼廻つて、二ヶ月位してロンドンへ歸るので、旅行のプランは鐵道會社にやらせたのだ相だ。廻遊切符の通用期限が六ヶ月で、賃金が六磅で Wonderful だと云つて居たが、高いと云ふのか安いと云ふのか一寸解釋に苦しんだ。

Bangor を出てしばらくすると、Menai 海峡の吊橋や、有名な Tubular Bridge を遠くに見て、間もなくカナーヴォン (Carnarvon) へ到着して乗換える。乗換と云つてもプラットホームの向ふ側に待つて居るマツチ箱式の列車へ乗るのだから極めて簡單なものだ。本線の今私が乗つて來た列車が出てから、しばらくするとランベリス行きのマツチ箱列車も動き出した。カナーヴォンの町を大きく廻つて背後の高臺の登りにかゝる。美しい雜木林の中を清々 Seiont の流れに沿つて列車があへぎあへぎ登る様子は、山に近いことを感じさせる。しかしそれもほんの束の間で、林を通過して高臺の上へ出ると、また大して面白味のない平凡な景色になつて了つた。自分の乗つた箱にはカナーヴォンの學校から歸る小供が二人乗つて居て、日本人が大分珍し相だ。Cwm-y-gello と云ふ停車場へ着いたから、

何と讀むのかと云ふとクワグロと云ふ、二三回眞似をして見ると小供は面白がつて笑ひ出す。Llyn-Padarn の湖邊を通つてすぐランベリスへ到着する。下車すると同車して居た二人の小供が話したと見えて、學校歸りの小供がかたまつて私の方を見て居る。

ローヤルヴィクトリアホテルはすぐ向ふの緑の木立を後に控へた白聖館だが、スイートケースが重いのでやはり自動車の厄介になつて了ふ。ホテルは萬一の混雑を心配して、數日前にロンドンから手紙を寫して置いたので、室は勿論取つてあつたが、少しも混雑して居ないのでそれには及ばなかつた。二階の一室に落ち付いたのは五時を少し過ぎた頃だつた。

夕食は七時半だと云ふのでそれまで散歩に出る。スノードンは云ふまでもなくランベリスの町の東南にある山で、海拔三五六〇呎、イングランド及びウェールズの最高峯で、スコットランドのベンネヴィスより八四六呎低い。ベデカーの案内書には甚だ賞めてあつて、スノードンだけに四頁を費し、附近の十九萬四百分の一（一時〓三哩）の地圖とスノードン頂上からのパノラマ圖とを掲載して居る。此邊の地圖としては六萬三千三百六十分の一（一時〓一哩）及び一萬五百六十分の一（六時〓一哩）の、何れも日本の陸地測量部地圖に相當する Ordnance Survey Map がある。前者（一時〓一哩）は Tourist Map of Snowdon and District として携帶に便利な折本となつて居る。その色刷のものには One of the Finest Maps in the World と手前味噌を聞かされるが、海拔千呎までは百呎、それ以上は二百五十呎の等高線が這入つて居るだけで、色こそケバ／＼しいがどうも山を歩く者の立場から見ると餘り感心しない。また後者（六時〓一哩）は彩色はなく、只百呎の等高線が薄い朱で海拔一千呎まで這入つて居るが、肝心の山の上の方には等高線が全然なす。そして Carnarvonshire 圖幅の XVI. S. E.; XVII. S. W.; XVII. N. E.; XXII. N. W.; XXII. S. W. の五枚でランベリスからスノードンを中心として、附近のものが揃ふ。後者でも地形圖として、物足らない所が随分あるが、日本

の御坂山塊の二萬分の一の地形圖の様に、圖面全體が太い等高線で一杯になつて居るのも餘り感心しない。兎に角、六時一哩の地圖に示されて居ることを丹念に詞で書き表すと、ベデカーの案内書にあるのと近いものが出来て了ふ。大分記載が横道へ這入つて了つたが、ホテル（海拔四〇〇呎）の南側は緩い斜面で、スノードンから派出して居る尾根に續く、そして其の斜面には英國では珍しいと思はれる様な Coed Victoria と云ふ針闊混合林になつて居て、其の間を通る細い散歩道は落葉に埋れて、煙の都から逃れて來た者の心をこの上なく悦ばせる。そして北西の方面にはテニスコートがあつて、ずつと停車場の方へ開けて居る。ホテルからほんの少し坂を下ると登山鐵道の停車場があつて、それから全く平な廣い道路が停車場から町の方へ續いて居る。その道路の途中から細い道を右に曲るとやがて湖邊へ出る。この湖も對岸の山が Coed Victoria の様な木立で包まれて居たならば、例令黒い煙を吐く汽車であつたりの氣分が損はれても、可なり美しい印象を與へるだらうと思はれるが、水に近い一部を除くの外、全山スレートを切り出す丁場で、山の膚は目茶苦茶に切りさいなまれて居るのを見ては思はず眼を外むけて了ふ。肝心のスノードンの方面は雲が低く垂れて居て何も見えない。

停車場から尙その道を進むとランベリスの町になるが、まだ夏の雜踏期には一寸間があると思えて、人通りも多くなく、あつちこつちに Private Hotel の貼り紙がしてある。ものゝ五六町も歩くと町は一層淋しくなつたので引返して、土産物を賣つて居る店へ立ち寄つて繪葉書とアツシエの杖とを買ひ求める。この杖は其の後瑞西へ持つて行つて、ピッケル鍛冶のシェンク老人に石突を作らせて、ファウルホルンやウエングルンアルプの散歩の時には片時も自分の側から離さなかつた。

雲が低くて眺望に對する希望は無くなつたが、ホテルへ歸つて一人ぼつちで居ても始まらず、今來た道を戻り停車場の近くで右に曲つて教會の方へ歩く。五六丁歩いて來ると、日本なら差しづめ瀧見茶屋道と云ふ様な道標が立つて居るまゝに右に曲る細い坂道を登ると、その細道に平行して登山鐵道

の線路が登つて居る。すぐに瀧の見える處へ来る。登山鐵道の Waterfall Station はつゝ一二町先きにある。そして緩い斜面を登つてスノードンの頂上に向ふ鐵道線路や、普通の登山路も此處から明かに見えるが、それ等はいづれも少し上の方で雲の中へ消えて了ふ。瀧は八代氏の記事の通り三段になつて最後が斜めに落ちて居る。

來た道を下つて、登山鐵道のガードの下を通つて瀧の下手の小川を渡ると、長屋と云ふ感じのする新しい家が並んで居る。その長屋に突き當つて左へ曲ればホテルで、右へ曲ればスノードンの登山口である。ホテルへ歸ると間もなく食事になる。食堂はやはり二階で、タキシードを持つて來て居なかつたから人が盛裝して居ると氣が引けると案じて居たが、やはり山へ來る人は氣が軽い、十人足らずの泊り客も皆散歩で來て居た。

明日の途中の様子を聞いて見ると、頂上には何でもあるし朝食は何時でもいゝと云ふので再び散歩に出て、歸つて一風呂浴びてベッドへもぐり込んだが、室に黒色のカーテンがない爲め、十時を過ぎても暗くならないのには閉口した。

翌二十三日も朝早くから室が明るくなつて、六時頃眼を醒したが、それから起きるには早過ぎるし、また無暗に眠いのでシャツを着て再び床にもぐり、八時頃迄よく睡つて了つた。食堂へ出て見ると九時からだと云ふ、何のことはない、昨夜何時でも朝食が出來ると云つたのは注文して置けば出來ると云ふ譯だつた。そんなことで出發は九時半になつて了つた。天氣は全く曇つて居るのでレインコートをリュックサックにつめ、その他の持物と云へば寫真機、メデカー、地圖とバリのリシャルで買ったバロメーター（山で使ふのは今回が始めて、その前にはバリからロンドンへ飛行機で行つた時空中で使つた）、辨當は頂上で間に合はすことにする。昨日散歩の時に通つた長屋の前を行くと牧場の戸があつて、それを這入ると美しい雑木林 (Coed Victoria) で道はその中を登つて行く。軽いながらも



Snowdon 登路



Glaslyn (手前) 及 Llyn Llydaw 兩湖 右に Lliwedd の尾根を望む

別宮貞俊氏撮影

リニツクサツクを脊負ひ、アッシュの杖を振つて爪先上りの道を歩き出した時は、久し振りで何とも云へず悦ばしくなつて了つた。

十分も登ると再び戸があつて牧場を出て了ふ。今の登りですつかり高臺へ出て了つて、これからは木立がなくなつて了ふ。道の兩側に小さな家があつて、犬が門の所で頭張つて居たが別に吠へもせず、一軒の家では自分の足音を聞きつけて主婦が出て來たが、自分を見るなり物も云はずに這入つて了ふ。Snowdon Ranger への別れ道にはやはり立札があり、それを左に曲つて少し行くとまた牧場の戸がある。羊があつちこつちに居て怪訝な顔をして此方を見て居る。あたりは緩い斜面でまばらに草が生えて居るが、目下す頂上は全く霧に包まれて、何處にあるかも解らない。振り返ると Llyn Paddarn の湖とまた遠く海の方が見えるが、カナヅォンの無線電信柱が折角の興を醒まして了ふ。Tyn Barlo Cottage と云ふ貸別荘の前を通つたが、まだ戸が閉つて居て人の氣配はない。登山鐵道は此處から見ると右手の大分下の方を通つて居るが間もなくガードの下を通つて鐵道の右側へ出る。(ホテルより一時間)

登つにつれて Owen Brynagog の鞍部がだん／＼低く見えて來て、それを越してかすかに霧をすかして向ふ側の山が見える。その内に列車は蒸汽を吐く大きな音を立て、左手の少し高い所を過ぎて行く。やがて右手の下に Llyn du ardu の湖が見えて來る。その湖に面した崖も一寸面白相だが何分にも此の霧で興味は非常に尠くなつて了ふ。此の邊も一樣に緩い斜面で、草がまばらに生え、羊が時々霧の中からメーと鳴いて居る。草は雨が降つた様に濡れて眞黒ななめくぢが此處彼處に居る。十一時二十分に再び鐵道のガードをくぐる。道の左側は少し先から斷崖になつて居るので、天氣なら可なり面白い景色だらうと思はれる。下からまた列車の登つて來る音がする。霧はだん／＼粒が大きくなつて來たので、レインコートを出して着ながら道傍に腰をかけて列車の來るのを待つて居ると、大

きな音を立て、すぐ眼の前に霧の中から現れて来た。客車の前に車掌が居て進路を注意し、後から機關車を押して登つて来る。客は男女大分大勢乗つて居たが互に手を振つて挨拶する。少しばかり急な上りを歩くと道は再び平になつて、やがてベデカーにある清水のある所へ来る。小屋は見當らない。それからすぐ Penn y Pass への下り道の別れる所があつたが、下をのぞいて見ても霧で何も見えないう、少し登ると上からドヤ／＼下りて來た一行がある。何處から來て何處へ下るのでと尋ねるから、發音が出來ないから地圖を出して、Penn y Pass へ下ると云へばあゝベニバスかと全く英語式に發音したから自分もこれから遠慮なくウェールズ語を英語式に讀むことにする。頂上から何分の一哩下ると曲る道があるとか何とか説明し始めたから、その別れ道は今見て來たと云ふと You manage well とか何とか云つて別れて了ふ。

すぐ頂上に着いた。頂上には家が二軒ある、一軒では繪葉書を賣つて居るが切手は無い、下へ持つて行つてランベリスで投函した方がいと云ふ。そんな位なら繪葉書も下で買はせた方が双方手數がかゝらない譯だ。何しろ今の列車で到着した人で混雜して居る。他の一軒は食堂で、中央にはストーヴが置いてあつて、石炭を盛に焚いて居る。何しろひどい霧小使で、氣温も相當に低いと見え、指がかじかむのでストーヴの火は嬉しかつた。バロメーターは一〇七〇米を指して居た。食堂の定價表が出てあつた。Cold lunch 3/6; Pot of tea 5d; Supper, Breakfast and bed 12/6 辨當持參の人は休み料一人 6d 冷肉とハムが二されだけのひどい晝食で、バス／＼のバンを紅茶で流し込むで一時に頂上を辭した。ベニバスへの下り路も明瞭だと聞いて氣が樂になつた。下り出すと下から登つて來る三人連の一行と遭ふ、歩いて登つたのは自分ばかりかと思つて居たらさうでもない。ベニバスの方へ別れてからしばらくの間は道が一寸悪かつたが、下るに従つてだん／＼よくなつて來た。

やがて百米も下ると霧の領分から離れて了つたので、ずつと眼界が開けて Glaslyn と Llyn Lly-

daw の二湖が細い流れで連つて居るのが下の方に見える。スノードンの一つの大きな尾根である。Llivedd の北面はひどく崖になつて居て、方々のガリーから落ちる石はずつと Llyn Llydaw の水際まで堆積して居る。下から牧師風の人が二人登つて来て、頂上までどの位かなどと聞かれるまゝにしばらく話して別れる。あとはまたもとの静寂に返つて、時々羊がメーと鳴くばかりであつた。

スノードンから下り出した所こそ少し急であつたけれど、下の方はやはり一體に緩い傾斜の斜面に草が生え、此處彼處に數米乃至十數米の岩の塊があつて、羊は人の來たのを見ては巧みに岩の上へ上つて逃げて行く。Llyn Llydaw の端まで行かずに左に折れると、すぐ石と土との交つた急な斜面——大雨のあとの山ぬけの跡の様な所を少しばかり下り切ると草の澤山ある斜面になつて、所々に草に隠された濕地があつて、足を踏み込むでは靴を汚して了ふ。

下の方に見えるベニバスの道路を距つた向ふ側の Glyder Fach は實に荒涼たるもので、樹木は勿論のこと、一寸見た所では緑の草すらない位だつた。そして道路に面して建てられたベニバスホテルの白壁は少し前から切れ始めた雲の隙間を漏れる午後の日を浴びて輝いて居る。入口の近くには自動車、自動自轉車が澤山乗り捨て、あるのを見ればお茶を飲む連中で内部の混雜して居る模様も想像出来る。

マカダム道路へ飛び出すなりホテルへも寄らずすぐに歩き出した。ベデカーに Wildest Scenery を持つて居ると云ふ Pass of Ianberis を下るのだが實に荒涼たるもので潤と云ふものが全く無し世界である。それに道路はマカダムで自動車で飛ばすには至極適當して居るが、釘を打つた靴を穿いて、久し振りに疲れを感じた足を運ぶには甚だ不愉快だ。殊に時々自動車や自動自轉車が臭い排氣を残して傍を通るので益々不愉快になる。

一時よくなりかけた天氣がまたも怪しくなつて来て、見たふと思つて居た Cwm Glas Mawr の崖

も見えず、ポツ／＼雨が降つて來たので歸りを急ぎ、午後五時にホテルへ歸つて今日のスノードン行を終つた。

ランベリスよりワスデールヘッド

スノードンから歸つた翌日の一番列車でランベリスを去つて、カナトヴァンでマンチェスター行き
の列車を待つ間に由緒のある城の見物をしたりして、マンチェスターで用足しをし、煙の都を去つて、
其の夜はプレストンに泊つた。

次ぎの日（七月二十五日）の午後、プレストン發ホワイトヘヴン行の緩行列車の内の人となつた。
スノードン附近で天氣も思はしくなく、また附近の景色が餘りに荒涼たるもので、ワスデールヘッド
行きも幾分嫌氣がさして來たが、折角來たことでもあるし、瑞西へ行く日取は既に通知して了つてあ
るので、少しく引きづられ氣味でワスデールヘッドへ向つた譯である。

英國湖水地方は有名な遊山地であるだけにベデカーにすら The Lake District と云ふ章を設け、
Windermere Section; Ullswater Section; Keswick and Derwentwater Section; West water and
Scafell section と分類して、可なり詳細に記述せられ、附近の十九萬一千四百分の一（三哩一吋）の
地圖も添へてある。しかし最も詳しく書いてあるのは最初のウインダーミアの部で、自分等に最も必
要な最後のスカウフェルの部には僅かに一頁半しか提供して居ない。地圖としてはやはり Ordnance
survey の一哩一吋の Lake District と云ふ折本の Tourist map がある。東は Hawes water 西は
West water 南は Windermere 北は Bassenthwaite lake に至るまで、普通行く處は殆ど皆この圖幅に
含まれて居るらしい。只鐵道の停車場からワスデールヘッドに至る間はホワイトヘヴン圖幅に據らな
ければならない。等高線は千呎までは毎百呎、それ以上は毎二百五十呎で、山を散歩するには餘り有

難くない。また一哩一六吋の地圖では Cumberland Sheet LXXIV; NW; NE; SE の三枚の内にワスデールヘッド附近の有名な山は含まれて居る。また自分が歩いた範圍もこの三枚の内である。この地圖は單色ではあるが千呎までは毎百呎、それ以上は毎二百五十呎の等高線が這入つて居る。等高線だけについて云へば、一哩一吋の地圖と同じであるが、岩の場所が餘程精しく記載してあるので、とても比較にならないことは云ふまでもない。

ペデカーには僅か一頁半しか記載して無くとも The Fell and Rock Climbing Club of the English Lake District の會報を見れば記事は「*Some of the*」また書籍は Arthur G. Bradley: -Highways and Byways in the Lake District; Owen Yones: -Rock Climbing in the English Lake District; C. E. Benson: -Crag and Hound in Lakeland; H. S. Salt: -On Cumbrian and Cumbrian Hills; G. D. Abraham: -The Complete Mountaineer 等枚舉に遑なす位である。

そのワスデールヘッドへ行くにはシースケールから行くのが順路である。ケシックから峠を越して歩いて行くのには散歩にはいいが、荷物でも少しあつたら日本や瑞西と違つて人夫を雇ふ事が出来なから、勢ひ駄馬を雇はねばならず非常に經費のかゝることになる。プレストンを出たホワイトヘッドのマッチ箱式緩行列車は淋しい海岸の町へぼつ／＼停車しながら、五時半に着く筈なのが遅れて六時頃シースケールに到着した。此處はいゝ海水浴場で驛の向ふにスカウフェルホテルと云ふ大きなホテルが海に面して建つて居る。また今朝人を訪ねた時にも、何處へ行くのかと尋ねられた時にシースケールへ行くと答へると「ゴルフをやりにか」と一度ならずも尋ねられたことを想ひ出した。泳いだり、ゴルフをやつたり、踊つたりするのはいい處らしい。

ペデカーで見るとシースケールからワスデールヘッドまで乗合自動車があるのだが、此處で下車した人は皆海水浴に來たらしく、ワスデールヘッドへ行く者は私一人らしい。ホテルのポーターが來た

ので乗合自動車のことを尋ねて見ると、戦前にはあつたが今はない、只ワスデルヘッドのホテルの主人の Mr. Whiting が町へ出て来れば乗せて行つてくれるが、今日はウキークエンドに近いから多分来ないだらうと云つて客の荷物を持つて行つて了つた。折角来た所が此の始末で、少しく途方に暮れて居ると傍へ話しかけに来た男があつたので種々聞いて見ると、その男が自動車の運轉手だつた。二十五志なら行つてもいいと云ふ。換算して見ると安くはないが、荷物を持つてはワスデルヘッドまで十三哩は愚、一哩だつて歩かれないし、シースケールへ泊るとすればしやれ者の多い中で、タキシードを着ずに食堂へ這入るのもいやだし、そのあげくダンスでもやられてはたまつたものではない。車を飛ばせば明日は完全に利用が出来るからやはりその車へ乗ることにする。

話をきめると今車を廻して来るからと云ひ置いて運轉手は出て行つたが、しばらく待したあげく車を廻して来たのを見れば一人の婆さんを乗せて居る。うまく二兔を仕止めたなと思ひながら、運轉手の隣りに腰を据えて、東京の道路より數等いゝマカダム道を走る。

天氣はやはり思はしくなく、雲が低く垂れて居るが幸に雨にもならず、心持のいゝ上り下りのある道を通り Gosforth の部落を過ぎ、Kidbeek の手前から左へ這入つて Buck Barrow の岩壁のすぐ下を通る。同車の婆さんは Buck Barrow で下車して了ふ。やがて靜かに濺んだワストウオーターの水が遠くに見えたがすぐにその縁について居る道路に出て了ふ。

ワストウオーターは北東から南西に延びて居て、長さ三哩、幅半哩の細長い湖である。その北西の邊に沿ふ高地は Copland Forest と地圖に名づけられて居るが、とても森と云ふ程の樹木はない、湖の南西側には Scree の崖が水邊からそゞり立つて居る。その崖も南の方の湖の落口に近い方は岩が多いが、北へ寄るに従つて只方々にザレが押し居て段々平凡になり、最後は僅かばかりの木立と白聖のワスデルホールを名残として Lingmell Gill の溪に限られて居る。天氣の加減で岩壁のひだが

よく見えなかつたことは遺憾だが對岸の水邊には羊の通路が明かに認められる。

正面に見えるリングメルも上の方は雲にかくれて姿を見せない。湖の北西の隅まで行くと少し左寄りにグレートグレイブルの裾からワスデルヘッドの平が開ける。樹こそ少いが緑の草が美しく地を彩つて居るのが何より嬉しい。しかしあたりとひどく調和しないコンクリートの橋が二つ程湖水に注ぐ川に架けられて居るのが眼について仕様がな。聞けば戦争中獨逸人の捕虜に作らせたのだとか。妙に現代式のことをやつて、景色を壊すのは強ち日本ばかりでもないと思つていくらかあきらめにもなる。平へ出ると道の兩側には石を積んで垣根の様になつて居る。そして間もなくワストウオーターホテルの門口へ自動車がついた。

遙々やつて来て満員でもあつたら困ると内心心配もして居たが、まだ混雑する時機でもないと見えて室もいくつもある。黒衣を着た、ビール樽の様に肥つた女主人が珍客と思たか、馬鹿に愛想よく朝食が八時半、晝食が一時、お茶が五時で夕食が七時半だと矢繼早に教へてくれて、すぐ女中の案内で二階の室へ通された。その室は實に小さな室で、ベッドの横で辛うじてストケースが開けられる位な廣さだが敷布も白く、蚤の心配も日本と違つてあるまいし、何しろ空氣の觸感がロンドンやマンチェスターとはまるで違ふ。

夏の英國のこととして、まだ明るいけれどもすぐ夕食の時間になつて了ふ。食堂も極めて田舎風で今迄泊つた各所のホテルとは全く趣が異つて居る。先づアセチレン燈が仰々しく垂れ下つて居て、周囲の壁には山の寫眞や岩攀りの寫眞がある。特に眼を惹くものはダンブランシュで厄に遭つた Owen G. Jones の半身大の寫眞である。

客は自分の外に男二人、女六人その内の二人の婦人は今日 Sky Head Pass へ行つた話を聲高に話して居る。簡単な食事をすませてスモークルームへ這入ると此處には石油ランプがついて居る。そし

てファイヤーブレスに投げ込まれた石炭がブス／＼燃えて居るのも此の所に相應しい感じを與へる。男の客二人は火にあたりながら書物を読んで居る。自分は日記をつけてからは地圖を出して明日の机上旅行にふける。書棚には The Fell and Rock Climbing Club of the English Lake District の所有にかゝる數々の登山や高山植物の本が收められて居る。

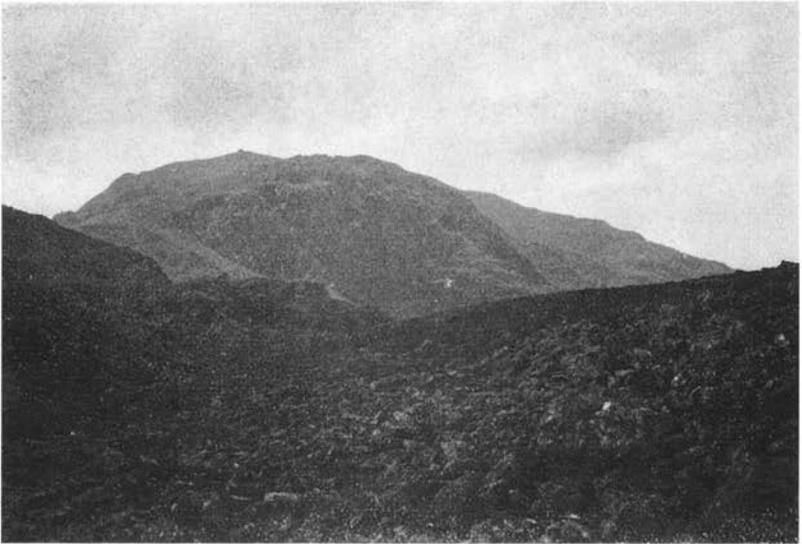
十時頃二階の室へ引き上げたが蠟燭を用ゐるのが非常に面白かつた。宿屋で蠟燭を使つたのは此處が始めてで次ぎは瑞西でエッシンゼー (Öschinensee) へ泊つた時との二回だけだつた。

スカウフェルバイク

山へ來ると持つて生れた無精の癖が出て鬚も剃らずに出かける支度をしてつふ。登路を一寸聞いてジャムサンドウィッチを一包持つて宿を出る。湖水に向つて少し行くと學校があつて、そこに道標がある。牧場の草原を横切るとワストウオーターへ注ぐリングメルベック (Tingmell Beck) の小さな流れがある。この位な川を渡るのに日本なら丸太を二本渡した位だが此處では古レールを二本渡しその上に板が張つてあり、おまけに欄干までついて居るから、踏み外さうとしても踏み外せはしない。今年一月沼井鐵太郎君と一所に白布高湯から西吾妻山へ行つた時に、私がスキーを穿いて丸木から落ちたことを想ひ出して、獨りで笑つて了つた。こんな橋ならばスキーを穿いても、竹馬に乗つても落ちる心配はない。羊が往來すると見えて欄干には羊の毛が澤山ついて居る。橋を渡るとすぐ牧場の圍になつて居る石垣を越す様に鐵の梯子がかゝつて居る。尤も高さ四尺位だがこの梯子は羊には昇れないと見える。一面の草地の間に道は爪先上りに上つて行くと間もなくワストウオーターの湖面が見えて來る。同じ様な道をしばらく登つてリングメルから派出されて居る尾根を越すとリングメルギル (Lingmell Gill) の流れが間近く見える。その源頭にはバイクスタラグ (Pikes Crag) の岩壁が嚴めし



Penn y Pass Hotel



Great End より Scawfell Pike を望む

く控へ又右側にはスカウフェルクラグ (Scafell Crag) がのしかゝる様に聳へて居る。リングメルギルは海拔約九百五十呎で二股になつて居る。右股はスカウフェルクラグから出、左股はバイクスクラグから出る。合流點の少し上で左股を渡り、急な登りを少し登ると傾斜は緩かになる。此邊をホワイトホロー (White Hollow) と云ふ。リングメルギルの右岸即ちリングメル斜面はずつと草地であるが山ぬけで赤い土砂の押し出して居る所が所々にある。下の方に白い服を来た人が二人見えた、多分同宿の英人だらうが雨がぼつ／＼降つて来たので引き返して了つた。雨は大したことなくすぐに止んで了つて雲はだん／＼上つて来る。此邊にも羊があつちこつちに居て私の方を頓狂な顔をして眺めて居る。スカウフェルバイクへ登る道は眞直にミックルドアー (Mickle Door) の鞍部を目がけて所々に積石がしてある。しかし私は少しスカウフェルの岩を精しく見るつもりでローズレーク (Lords' Rake) から押し出して居るザレを上る。そしてディープギル (Deep Ghyll) の入口までは別に服を汚さずに行けたがこれからは一寸膝や何かを使はなくてはいけないし、また靴も本式の釘を打つたものか、草鞋でなくては一寸不安なので引き返すことにする。岩から滴つて居る水を見出して天與の甘露と舌鼓を打つ。

上る時には少し骨を打つたザレも下りはスノードン以來の杖を後ろに突張つてぐん／＼踵で滑つて下つて了ふ。レークスプログレス (Rakes' Progress) の少し下の、岩壁とザレとの境を上り氣味に歩いてミックルドアーに向ふ。此の邊からバイクスクラグを見ると中々美しく、有名なビラーロックの寫眞を裏から見た様な感じがする。歩きながら岩壁の岩を杖の石突きで突いて見たり、一寸手がゝりや足がゝりを檢して見ると、中々工合がいゝ。

十二時五分ミックルドアーの鞍部につく。そこからスカウフェルへ上るところは十尺か十五尺は一寸體を使はなければ上れないらしい。鞍部から東南の方は一面の沮洳地で (グレートモス Great Moss)

所々の水溜りが日光に輝いて鏡の様に光つて居る間を細い流れがうね〜と流れて居る。見渡す限り人家が見えず恐らく夏の間だけ羊を放牧して居るのであらう。

ミツクルドアーからスカウフェルバイクの頂上までは歩く人も多いので道はよく踏めて居る。僅かばかり登るとすぐ傾斜はゆるくなつて、一面に板状の石が散らかつて居て草は少しも生えて居ない。その石の形や雨に晒された色が双六岳を想ひ出させる。十二時四十分バイクの頂上につく。實に廣い頂上で、最高點には石を積み。青銅の額が石の間に埋め込んであつて大戦の戦死者の記念碑となつて居る。

In perpetual memory of the men of lake district who fell for god and king for freedom, peace and right in the great war 1914—1918.

This summit of scafell was given to the nation subject to any commoner rights and placed in custody of the national trust

By Charles Henry, Baron Leconsfeld. 1919.

空は幸ひ晴れたので遠近の山々が淡い霞を透して美しく見える。遙か東南には幾つかの山を距て、湖水が光つて居る。恐らくウインダーミアの湖であらう。ワスデールヘッドの谷を距て、正面にはグレートゲープル(Great Gable)がクラグスマンの間に珍重される種々の岩を見せてすぐ前に聳へて居る。書物で讀んだ時は恐しい岩山ではないかと思つて居たのに來て見ればどれもこれもなだらかな山容ばかりで、頂上近くこそ草はないが少し下れば一面の緑で、此所彼所から岩が突き出して居る。それ等の岩を四方八方から登るのは餓えた者が僅かに肉のついて居る骨をしやぶると云ふ様な感じがする。スタイヘッドバスからワスデールヘッドへ下る道は緑色のグレートゲープルの裾を巻いて一抹の褐色の條となつて明かに印されて居る。思ひがけない山の頂に水溜りのあることは珍らしく感じられ

た。遙かに平野の彼方は海となつて霞んで居る。頂上から北東に出る尾根は途中一二の突起を経てグレートエンドに及んで居る。バイクの頂上と同様に尾根も廣く、そしてその平らから所々岩が突き出て居る。

頂上を辭して急な電光形の道を少し下ると一寸した鞍部になつてまた緩い上りとなる。シートラー (Seatoller) から登つて来る組に數回出會つた。若い娘が桃色の頬をして、リングクリンカーを打つた山靴を穿き小さいと云つても私の今脊負つて居るリュックサックより餘程大きなリュックサックを脊負つて外輪に歩いて居るのは如何にも元氣だ。

石が見えなくなつて緑の草になると羊が遊んで居る。そして道はグレートエンドへは行かずに右の方の裾を巻いて下つて行く。やがて再びもとの石ころの尾根になつて間もなくグレートエンドの頂上になる。地圖には石が積んである筈なのにそれも見當らず、霧にでも巻かれたら途方に暮れる様な駄廣い尾根である。やがてスタイヘッドタインの池を目當てに下り出したが餘り人の通行はないらしい。積石もなければ踏んだ跡もなく、岩には厚く苔が生えて居て、寧ろ歩き心地がよい。樂らしい所を撰つて下つて行くと幸ギップにも出ず、すぐ右手の下にスプリングリングタインが見えたので、急いでその西側を通つて居る歩道へ馳け下りて、残りのパンを片づけて了ふ。それから明かな道であるが時々湿地になつたり、乾いた草地になつたり。只呑氣に散歩氣分になつて午後三時にスタイヘッドバスの積石の所へ出た。最初はグレットグープルへも登るつもりで居たが、空腹になつた爲め何の未練もなくその計畫を捨て、グレートグープルの裾を巻いて行く歩道を下る。下るに従つてリングメルの後からワストウオーターの暗青色の水面が見えて来る。この歩道の兩側即ち上にも下にも有名な岩攀りの場所 *Brossen knot*, *Kern knot*, *Napes arête* 等があるが何しても小さな規模のものに過ぎない。5. *Burnthwaite* の部落を通つて四時三十分には宿へ歸つた。

丁度お茶の時間であつたがその前に一日分の水濾しの埋め合せにサイダーを飲む。サイダーには酒精がないものと思つて居たのにそれは日本でのことで、本當のサイダーはランベリスで風呂と間違へられた瓶詰めビール(Beer)より遙かに美味である。シャツを着替へてからお茶の御馳走になり、宿の入口で山を見ながら、主人に此處から見える岩の名を聞いたたり、日本に於ける登山の傾向などを話したりする。食事の時には新しい客が二人見えた。私は忘れたが峠の下で出會つた相でグレートゲールへ登つて來たのだ相だ。食事をすませてからモーターでまた海岸へ歸ると云ふ。海岸で泳いだり、ゴルフをやつたり、夜は踊つたり、そして一時間モーターを飛ばせば山登りの中心地へ來る。中央線の夜行列車で日曜一日を利用して山へ精進すること、當地の便利さとを考へると少し腹が立つて來る。

夜食後スモークルームで此所に滞在して居るスピーカー(G. R. Speaker)氏から色々な登山團體の話や、此の邊の山遠くは瑞西の話を聞く、連れのホランド(C. F. Holland)氏は只黙々とパイプを薫しながら火の前で本を讀んで居る。ホランド氏は可なり有名なクライマーで、二度と試みられないピラーロックのある登路や、スカウフェルのフレーターク拉克の第二回登攀などをやつた相だ、兩氏は明日はピラーの方へ行く相だ。

ピラーリッジ

天氣は昨日の午後のやうにはからりとしなが散歩には差支へない。しかし日曜なので朝食が馬鹿におそくなつたので昨日の様にジャムサンドウィッチを持つて宿を出かけたのは十一時少し前になつて了つた。宿の背面にはモーズデールベック(Mosedale Beck)の流れがあつて、それからずつと牧場になつて居る。川の少し上手には落葉松の様なもの、林が少しばかりあつて、谷の奥はピラーリッジ

に圍まれて居る。

ブラックセールバスへ行く道は川の左岸を殆ど等高線に沿うて進む。ずつと牧場であつて所々に水が流れて居る。何時の間にか大分登つたと見えてワスデールヘッドが低く見え、行く手を遮つて居るピラリリッチは大分近くなつたので山の膚がよく見える様になつた。尾根からザレが所々押し出して居るが何處からでも下れ相だ。少し右の方へ曲つて登つて行くと幾分傾斜が急になる。ワストウオーターの水面も見えて来るシカークフェル (Kirkfall) の尾根を越してスカウフェルの岩壁が見え始める。三つのギルの内でも殊に眼立つのはディプギル (Deep Gill) で刀で頭でも割つた様に口を開いて居る。

少し先きの方へ二人連れて登つて行く人がある。多分ホランド、スピーカー兩氏であらう。また立派な橋でブラックセールバスから流れて來て居る川を渡る。峠へ行く道はだら／＼と登つて居るが先きへ行く二人は道から左に切れて尾根を登り出した。少し休んでから歩き出した私も亦道を離れて登り出したが正月に五色温泉で痛めた右足が時々痛むので右山で登るのには少しく苦しむ。尾根まで一息と思つて居たがさうも行かず、一二回途中で息を入れて尾根へ取りつくるとスピーカー氏が手を舉げて迎へてくれる。ホランド氏も牧場の鐵柵を越した所で休んで居る。その場所は地圖のルッキングステッド (Looking Sted) の少し上部でカークフェルを越してグレートゲープルの背面が見え、種々なチムニーのあるゲープルクラグもよく見える。昨日歩いたミックスルドアアの鞍部の右にはスカウフェルその右には山の上にバーンムアターン (Burnmoore Tarn) が靜かに水をたへ水面が鏡の様に光つて居て、その下にはずつとワストウオーターが擴つて居る。

少憩の後出發、尾根を行かずに約二千呎の等高線に沿つて北側の斜面について居る道を行く。ハイレベルパス (High Level Path) とか云ふ道で一寸面白う。手を使ふ程のことはなすが居眠りをして居

ては歩けない道である。尾根の上の休んだ所から約二十分でピラーロックが見える。寫真でよく見て居た岩のことで恰も舊知に會つた様な感じがした。しかしピラーロックだけが岩でその周圍は傾斜もなだらかで、水も流れて居るし、草もある。巍然とか豪壯とかと云ふ様な感は一切起らない。周圍がそんな風だから寫真を撮すのには至極都合がよい譯である。どんなひどい岩攀りをやつて居てもすぐ近くにいゝ見物席があるから、寫真を撮すには何の苦心もいらぬ譯である。現場を見るまではワル場で寫真を如何にして撮すかとは随分考へた問題であつたけれど、來て見て寧ろ啞然として了つた。

ピラーロックを見ながら流れの側で晝食をすませます。兩氏は *New West Climb* をやる相で私は尾根へ出て散歩して歸ることにする。ピラーロックの岩攀りが始まる所で兩氏は今迄穿いて居た山靴を脱いで底の薄い黒いゴム靴（オーヴァーシューの如き出来ですつとゴムが薄く輕きもの）に穿き替へ、スピーカー氏の持つて居たリュックサックも置いて了つて、只八十呎ばかりの使ひ古した綱を持つてやり出した。岩攀りにはどんな地質の服がいかとはよく日本で論議されるものだが此の兩氏の服装を見ると、論議することが馬鹿々々しくなつて了ふ。スピーカー氏は上衣もズボンも木綿の防水布、よくスキー服に使ふ様な地質のもの肘や膝の内側には褐色の草を縫ひつけて居る。ホランド氏はズボンはコール天の半ズボンだがそれがまた實にひどく破れて居る。上衣は普通の服の着古しである。山へ登ると云ふことは登山具を揃へることではなく、自ら實行するものであると云ふことを今更ながら感じて了つた。

兩氏がギャップを下る所を上から見て居たがやがて見えなくなつたので私は頂上を眼がけて登り出した。何處でも歩けるので無精をして、一番樂な所を撰つて歩いて居る内に頂上へ出て了つた二時三十分。一面に廣い所で、三角點には石が積んである。北側の端まで行くと一寸崖になつて居てピラーロックの頂が下の方に見えるが小さなものである。遙か北の方に湖が見える。多分ダーウエントウォ

ター (Derwent Water) であらう。すぐ下にはエナデルウォータ (Ennerdale Water) が美しい色をして居る。空は曇つて居るが地平線に近い部分はよく晴れて居るので、海の彼方に可成り高い山が見える。始めは尾根からウインドギャップ (Wind Gap) の方へ下つて見ようかと思つて居たが、頂上を樂に散歩して歸つた方が眺望もいゝからと思ひ直して、やう／＼東に向つて歩き出した。散歩には實にいゝ所だ。餘程歩くと南側の尾根を越してワストウォータが見え始めた。それからすぐ、今朝休憩した所へ來て了ふ。レーンコートを敷いて仰向けに轉がつて眼を閉ぢて居ると南風が吹いて來て何とも云へない心持になる。眼を開けばずつと山ばかり、よし凄味はないにしても悪くはない。内地の連中がどんな所へ出かけて居るだらうなどと取り止めのないことを暫く考へて居ながら、やがて起き上つてブラックサールバスの方へ下る。峠へ出てからは極めて平凡に五時半に宿へ歸つて見ると人が大勢食堂へ出這入りして居るので何事かと思ふと、海岸から二十五人位乗る乗合自動車や、その他自動車や自動自轉車が澤山來て居る。つまりそれ等で來た人がお茶を飲むで居る騒ぎだつた。私もお茶をすまして入口のグレートゲイブルの見えるベンチに腰かけて居ると、乗合自動車始め皆歸つて了つて、再びもとの静寂に返つた。スピーカー、ホランド兩氏は夕暮近くに歸つて來た。

夕食後はまたスモークルームで話をもてた。兎に角此處で簡單に歩ける所を歩いて了つたので、明日はワスデルヘッドを去ることにする。スノードンを下つた時には此處へ來ることも餘り氣乗りがしなかつたが來て見てよいことをしたと思つた。

ワスデルヘッドを去りて

翌朝はすつかり曇つて居たが、朝食をすました頃からとう／＼降り出した山越しは思ひ切つて宿の主人の自動車へ乗せて貰つて再びシースケールへ出て、午後ケシック (Keswick) へ着いた。やはり

雨で湖岸へ出ても遠望が出来ず、書籍で知つて居るアブラハムの店で山の寫眞をひやかしたりして、時を費して了つた。その翌日二十九日にはエヂンバラへ行き町を見物したり、有名なフォースブリッジを見に行つたりしてから、想を遠く瑞西に馳せて、午後十一時發のロンドン行急行列車に乗り込むだ。

雜 錄

○續船上談山

八 代 準

大正十二年七月發行の「山岳」第十七年第一號の雜錄に、自分は「船上談山」と題して、山の熱を吹き下すスケッチを畫て、讀者を惱ましたことがある、其時御斷りして置たことは、吾々の機關雜誌の發行が遅れ勝であるから、紙面の埋草をつくるつもりで、こんな記事を書くので、讀まされる會員諸君の方は、いゝ迷惑かも知れぬが、其後一時取返した雜誌の發期刊日が、又々一年以上も遅れる様になつて來たから、埋草の駄文を又書かねばならぬことになつて來た。

自分は前編で、日本郵船會社の歐洲航路で、船の甲板から望見し得る山の話をした、天候と航路

との關係、夜中通過等のために、見える筈の山を見なかつたものもあるので、記事が完全でないから、後遊の會員諸君の追加訂正を御願して置たが、そんな面倒を見て下さる人も別になかつた様である。自分は其後又兩三度此航路を通つて、以前に見たことのない山を數十坐望見したから、前編の補遺の意味で、此「續船上談山」を書き、從て前編に御斷りして置たことは、地名・山名・標高等に對して、其儘此稿にも當籤するものと御承知願ひたいのである。

船が上海から香港に向ふ時は、支那大陸側に沿て南下するから、臺灣海峽に入つても、臺灣の山を見ることは稀である、船長にも聞て見たが甚だ稀であると云ふ、自分は臺灣海峽を航過すること前後七回であるが、其七回目の大正十五年七月廿六日午前七時に、始めて臺灣の山容を望むことが出來た、臺灣海峽の丁度北の入口の支那大陸側にある、回船島(Turn About Island)燈臺の沖、約七哩の地點で、一天晴れ渡つた水平線上に、一萬尺の峰頭を連ね、蜿蜒として海の彼方に没して居

る、雄大無比なる臺灣中央山嶺の全容を望むことが出来た(第一圖参照)。水平線上には白い入道雲が叢立して居つたが、一萬尺の峰頭に對しては、それ等が丁度武藏野の原頭に、代々木杉の木立の彼方に秩父の山嶺を望む様な工合であつた。臺灣北部の雄で、日本第二の高山である雪高翁(一二

には?印をつけて置くことにした、即雪高翁の左には大霸尖(一一四九九尺)、右には畢祿山より少し低下して合歡山(一一二〇〇尺)、續いて奇萊主山(一一八九五尺)、次に一段と低くなつて能高山(一〇七三二尺)と、一萬尺を越ゆる數坐の嶺峰を天空にうねらせて居る。能高山から先は距離が遠

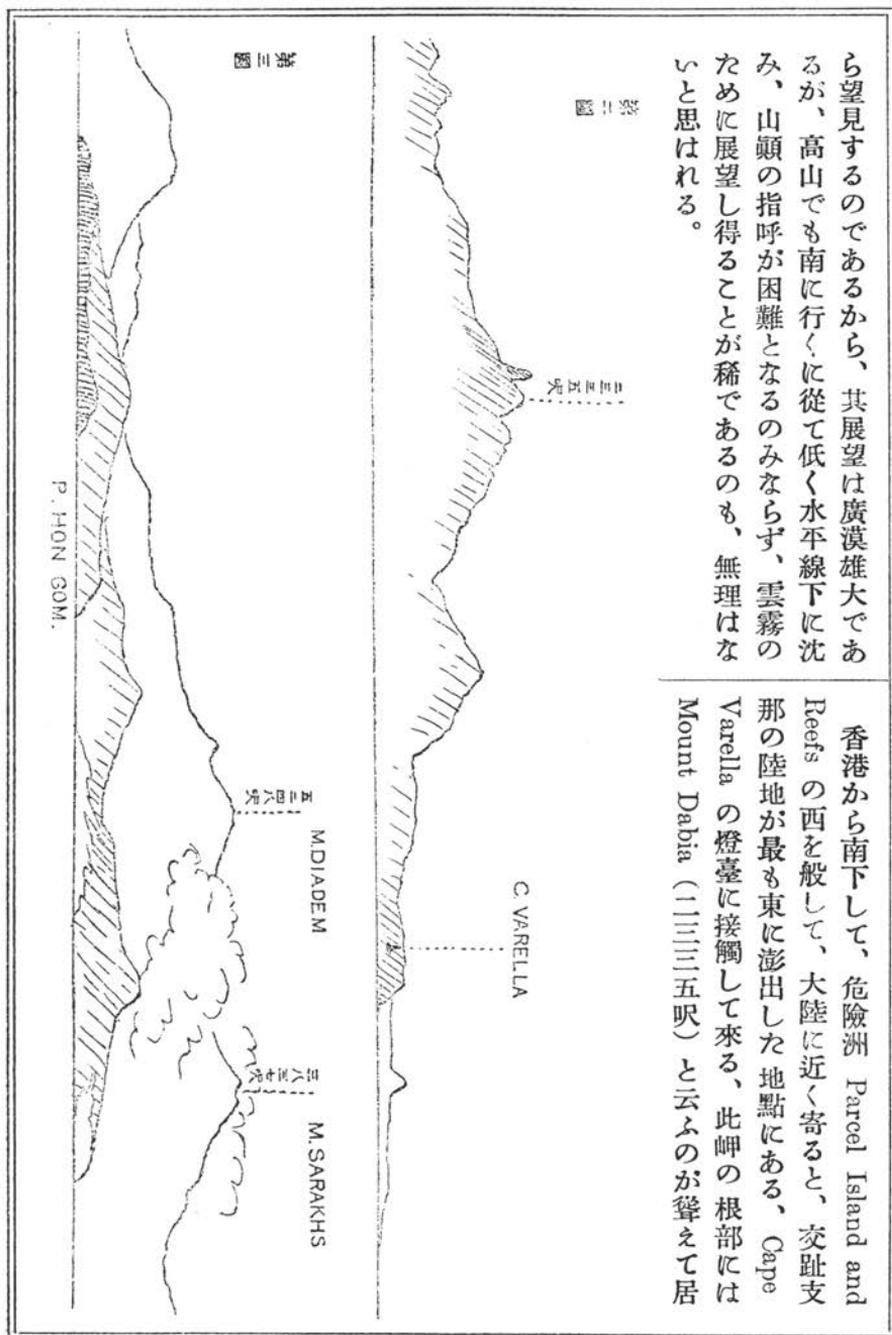


八二九尺) (Mount Sylvia) が、最も近く且高いので、之れを盟主として其右に畢祿山(一〇八六三尺)が聳えて居る、此二坐は海圖に位置が示してあり、船の現位置から Bearing を取つて、それと指摘し得るのであるが、他の山は海圖に位置の明示がないため、其高さと位置から自分が判断で之れを指呼したのであるから、第一圖のスケッチ

くなるので、山嶺の山名を identify することが困難であつたが、遙か南に昂頭して居る卓社大山(一〇一八四尺)と、一層南下した水平線上に、僅に其山頂を浮して居る新高山(一三〇七五尺)の二坐は、山嶺も著しく、海圖にも其位置が示してあるので、明に之れを指呼し得たのである。丁度雪高翁へ約九十哩、新高山へ約百二十哩の距離か

ら望見するのであるから、其展望は廣漠雄大であるが、高山でも南に行くに従て低く水平線下に沈み、山顛の指呼が困難となるのみならず、雲霧のために展望し得ることが稀であるのも、無理はないと思はれる。

香港から南下して、危險洲 Parcel Island and Peefs の西を般して、大陸に近く寄ると、交趾支那の陸地が最も東に膨出した地點にある、Cape Varella の燈臺に接觸して来る、此岬の根部には Mount Dabia (二三三五呎) と云ふのが聳えて居



り、其別峰には金峰の五丈石の様な、岩の尖塔が特立して居る（第二圖參照）。之れを少し過て南下すると、Hon Gorn 半島の沖となる。半島の北及東岸には白砂堆があつて、南端は崖になつて居るが、此半島に抱かれた Hon Kohe の港の後に聳えて居る Mother and Child（六八七〇呎）は、

密 圖



PULO CECIR DE MER

此海岸での高峰であるが、雲のために見えず、其前山の Diadem（五二四八呎）及 Sarakhs（三三八七呎）の二峰が、半島の島山の後に聳えて居るのが見えた（第三圖參照）。此所から約二時間半、距離にして約三十哩も南航すると、Cann Rauh 灣の沖に達する、此灣は日露戦争の時に、露國の Baltic 艦隊が三十有餘艘勢揃ひをし、北上の戦闘準備及

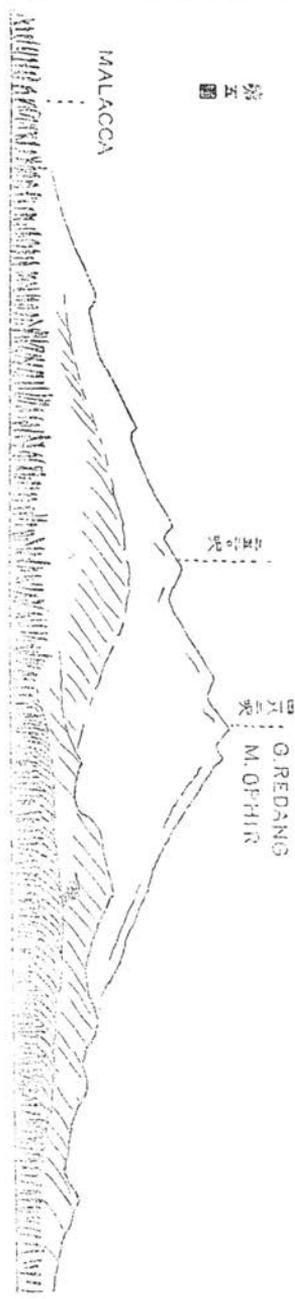
訓練をして、一ヶ月餘も滞留して居つた所であることは、先刻諸君御承知の通であるが、其灣口の南にある Hon Chut の燈臺を過ぎて、Davatch Head を見る頃には、交趾支那の膨出部と追々離れ、遙に水平線上に Cape Padaran の燈臺を望んで、陸地と全く別れることになる。

之れより數時間南航すると、Pulo Cecir de Mer と云ふ海中の孤島を左舷に見る（第四圖參照）。島の海岸には白砂堆があり、多少の雜草がある丈で樹木の殆んどない無人島の様で、二つの瘤山がある丈である。尙南航すると數時間で Great Catwick と云ふ圓頭岩と、Pulo Sapatu と云ふ尖頭岩を左舷に見る、此邊には水面に表れたり没したりする

岩礁があつて、航海者には危険視されて居る。

尙二日の南航で船は Malay 半島の端に近づいて来る、そして半島の東岸にある Pulo Tioman の島の最高點三三八三呎を右舷に望み、次で Pulo Tinggi の二〇四六呎の峰頭を望む。之れより尙二時間半南航すると、行手の水平線上に蘭領

(四一八二呎)と云ふので(第五圖参照)、半島の南端で目に立つ山である。此町の北方で半島の中部には Gunung Tahan(七一八六呎)、Gunong Kerbau(七一六〇呎)等、相當に高いのがある筈であるが、海峡の洋上からまだ見たことがなす。海峡の北の入口で半島側にある Penang 島の



Bintang 島の一二五三呎の樹木鬱蒼たる最高點が浮び出る、其北方沖の Pedro Blanco 燈臺で右舷回頭をし、Singapore に入港する。

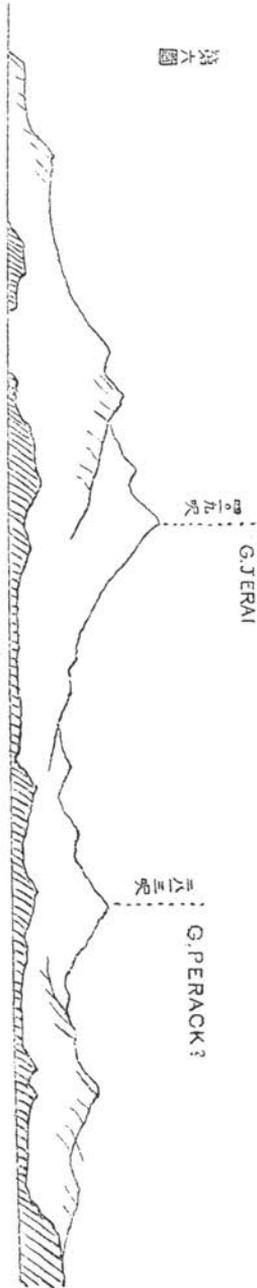
Malacca 海峡を西北に上り、Malacca 町の沖に來ると、町の東に聳えて居る火山型の姿のよゝ獨立山がある、Mount Ophir 又は Gunong Redang

George Town 港に入つて四望すると、島の最高峰は Western Hill(二七二四呎)と云つて、あまり目立つ山ではないが、半島側に北に聳えて居る Kedah Peak 又は Gunong Torai(四〇一九呎)、及其右後にある Gunong Perack(二八一三呎)は、山らしい形をしてゐて、此港も相當によゝ景

色である(第六圖参照)。此島の北方に半島に沿て點在する群島中の高峰は、Pulo Langkawiにある Gunong Pava (二八七九呎)であるが、此港から之れを望見したことはまだなす。

Penang 島を出て西航し、Malacca 海峡の北入口の殆んど中央に來ると、右舷に Pulo Perack と

正十三年十月廿三日に、貿易風の關係で、船が比較的岬に近く、水深十四尋の Wedge Bank 附近を航したので、其日の午前八時に、朝日に其褐色の絶壁を輝して居る、岬後の Cammel's Hump (三二四〇呎)の威容を望むことが出來た(第七圖参照)。此岬には此山に續つて Mahendragiri (五



云ふ岩礁が聳立して居るのを見る、之れより Sumatra の北岸に沿て西航する時に見える山に就ては、前編に記述した通りである。

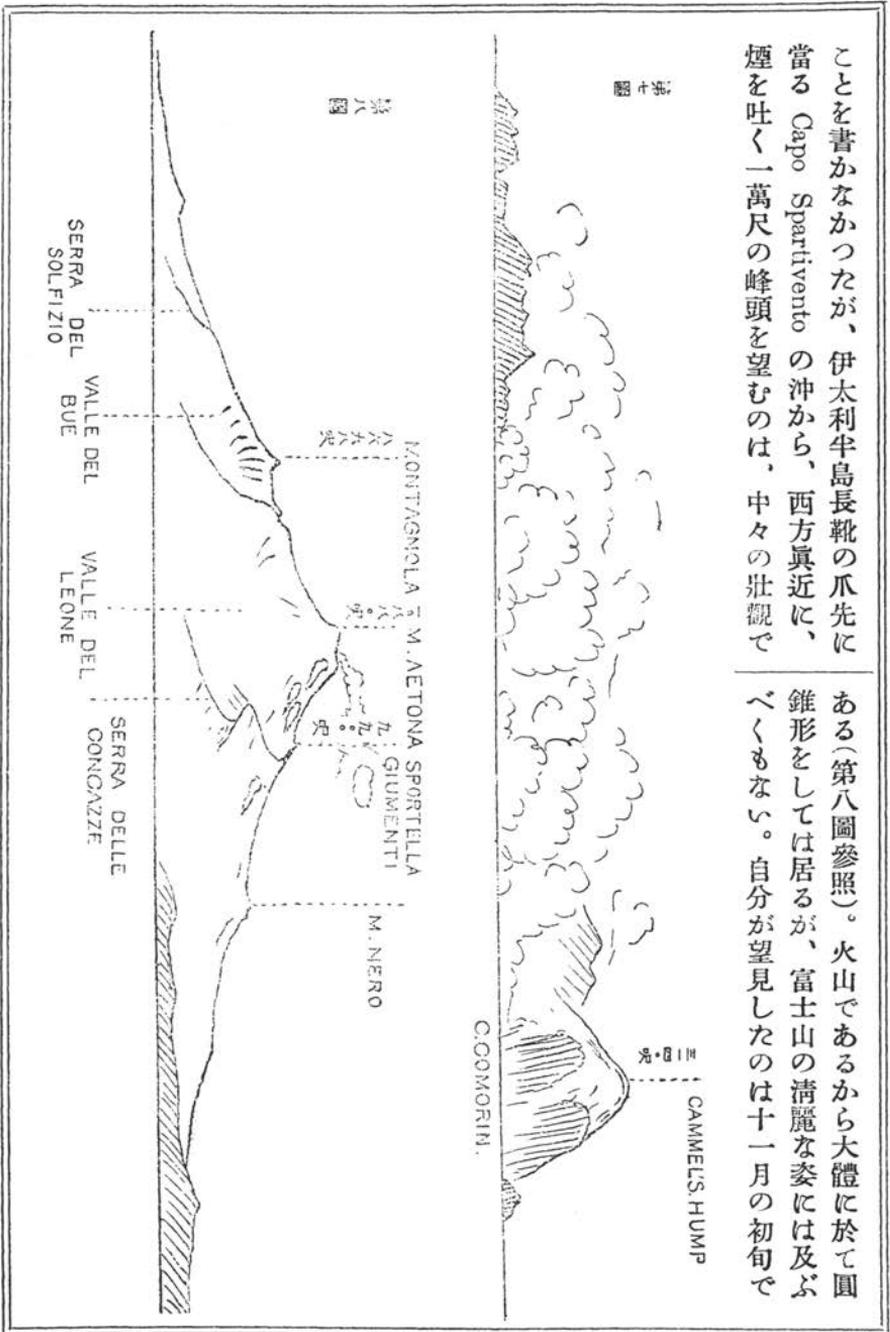
Ceylon 島の Colombo 港から西航する時に、印度の最南端 Cape Comorin の沖を通るのであるが、遠方であるのと水蒸氣が多いので、度々の航海に一度も此岬を望見したことがなかつたが、大

四一九呎)、Cuehy Mulla (六一二五呎)等が聳えて居るのであるが、其邊は丁度雲漠々で、夫等を望むことは出來なかつたが、Cammel's Hump 丈は、其名の示す形状によつて、直ちに指摘することが出來た。

次に少し飛んで地中海に移る。前編では南歐の名山であり、火山であり、高山である Aetona の

ことを書かなかつたが、伊太利半島長靴の爪先に當る Capo Sparivento の沖から、西方真近に、煙を吐く一萬尺の峰頭を望むのは、中々の壯觀で

ある(第八圖参照)。火山であるから大體に於て圓錐形をしては居るが、富士山の清麗な姿には及ぶべくもない。自分が望見したのは十一月の初旬で



あつたが、南歐の氣候では。山頂近く北面の谷間に、銀色に輝く數塊の殘雪を見るので、新雪らしいものは見えず、富士の薄化粧の様な趣はない。

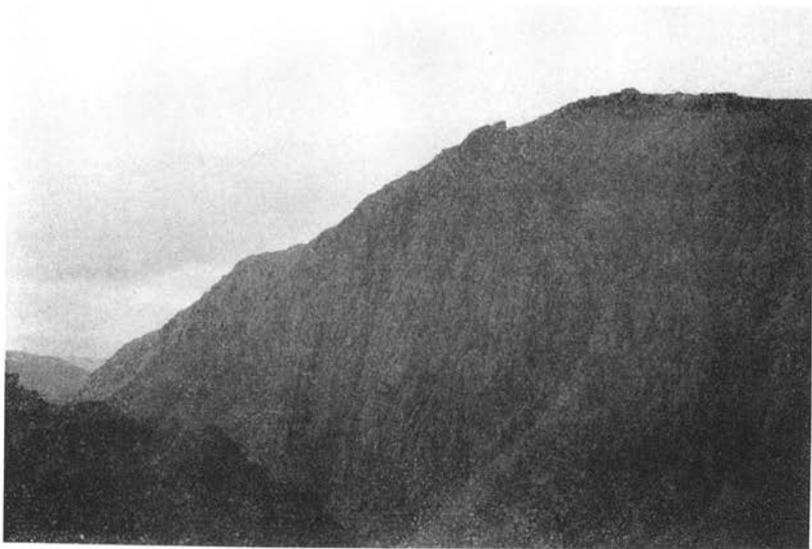
然し一〇八八〇呎の峰頭から噴煙を靡かせ、南に *Montagnola* (八六六八呎) を始め、數個の寄生火山を隆起し、東南に *Serra del Solfizio* の尾根及 *Valle del Bue* の谷を、東に電光型の *Serra delle Concazze* の尾根で限られた *Valle del Leone* の深谷を走らせ、北に *Sportella Giumentii* (九九〇〇呎)、*Monte Nero* 等の寄生火山を隆起せしめて、長く長く裾を引て聳立して居る有様は、地中海に於ける一偉觀であることは確である。此山に關しては *Baedeker* の案内記を始めとして、多くの詳細なる案内記文獻等があるから、調査をしたり登山の準備をしたりするには差支がなと思ふ。

Messina 海峡を通過して、船が *Tyrhenian* 海に入ると、東北に伊太利半島長靴甲上の瘤に當る、*Capo Vaticano* を越へて、遂に *Monte Cocuzzo* (五〇五六呎) と云ふ、*Matter horn* を小型にした様な山容の岩山を望む (第九圖参照)。此山を

望む毎に自分は、九州の大村灣に浮んで居るのではないかと思ふ。自分は嘗て「山岳」第十三年第三號一八頁に、彼杵の虚空藏山のことを紹介して置たが、伊太利に山名・山容から山の位置迄、よくも似通つたものがあると不思議に思ふのである。

此山は *Belmonte Calabro* 町の後に聳えて居る山で、伊太利半島の脊梁 *Neapolitan Apennines* と、其昔 *Athene* 人 *Sicilia* 人のために船材を切出した *Sila Group* の連山とが、結合する地點に激成された、一つの特立する岩山で、空さへ晴れて居れば *Messina* 海峡の北の入口邊から指呼し得る山である。

郵船會社の歐洲航路定期船は、近年伊太利の *Napoli* に寄港することになつた。歐洲に於て最も風光明媚な海港として喧傳されて居る此港に、自分は以前に *Roma* から、陸上を見物に来て、風景にはあまり感心しなかつたのであるが、今度海上から此港に入つて、始めて其風光の美しさを嘆賞する様になつた。 *Napoli* 灣の南を限る *Penisola di Sorrento* と *Isola di Capri* との間の海



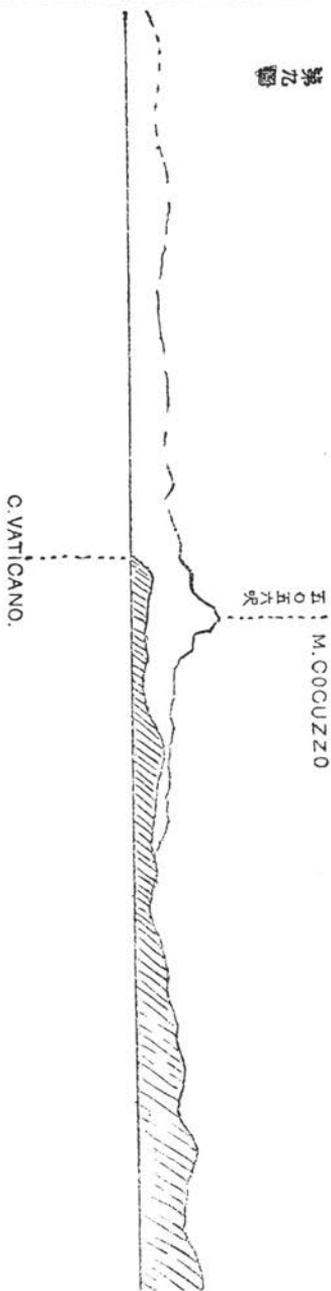
Pikes Crag



Mickle door より Great Moss を見る

峽 Bocca Piccola を通つて、船が Golfo di Napoli に入ると、何と云ふても先づ目に入るものは、煙を吐て居る Vesuvio である。灣の真只中で船上から四望すると、西は Tyrrhenian 海の紺碧の空紺碧の水、Seirocco 吹荒む夕邊は炎の色と化し

第九圖



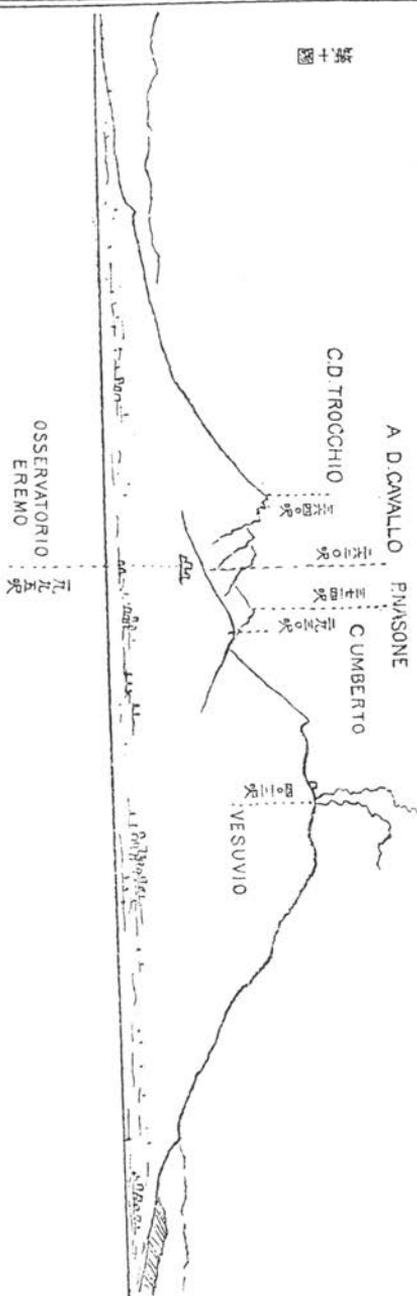
て、物凄事であらう、西北には Monte Eponeo (二五八八呎) を最高點とする Isola d'Ischia、之れに連る Isola Vivara, Isola di Procida, Napoli 灣の北を限る Golfo di Pozzuoli の海岸より、Castello dell'Ovo を起りて、Castello San Elmo を中央に、盛上つた様に Napoli の市街が、其築港

内に千船百船を擁して居るのが見える、東には Campania の平原に、Monte Somma の外輪山を從へ、噴煙を靡かせてドーム形の Vesuvio (四〇一二呎) が、長く裾を引て聳立して居る (第十圖参照)、外輪山の最高點 Punta Nasono (三七一四

呎) は奥の方に Cognoli di Trocchio (三六四〇呎) は海に近く聳え、火口原 Atrio del Cavallo (二六二〇呎) に向つて約四十五度の急傾斜をして居る、火口原を隠して Colle Umberto I (二九三〇呎) の丘が低くある其麓に Osservatorio-Eremito の火山觀測所及ホテルの白聖壁が見える、先年

Vesuvio に登つた時に、此所に恐ろしく口笛の上
 手な盲目の乞食が居つて、ポケットから一リラ
 投出したことを思ひ出す。Colle Umberto の右は
 Vesuvio の主峰で約三十五度の傾斜をなして高ま

千六百呎の高さまで登れる。目下は Cook 社の經
 營であるが、頂上噴煙の左に小さく見えるプロッ
 クは、以前に噴火のために破壊された其上部停車
 所の残骸である。裾野の海岸には橄欖の林や葡萄



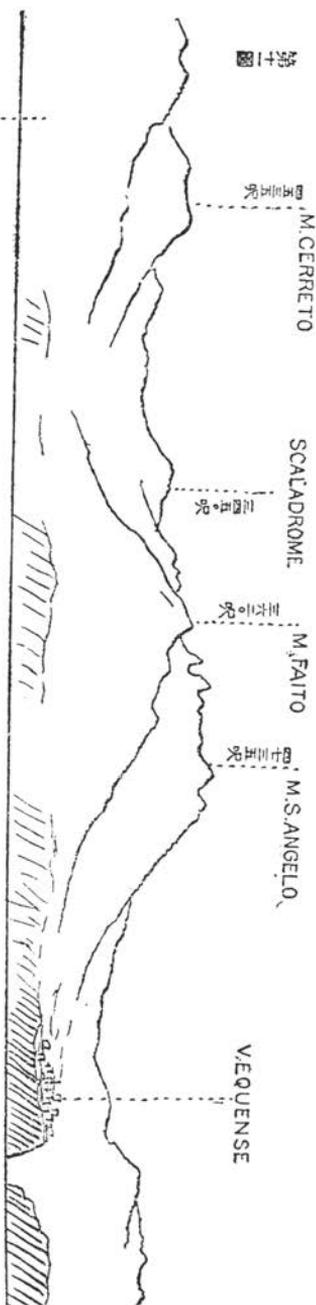
り、最高點は火口壁の海岸側にあつて、目下は四
 ○一二呎であるが、噴火のある度に色々標高が變
 化して居る様だ、火口は直徑約二千五百呎、深さ
 九百呎位で、頂上に立てば火口内部の有様がよく
 窺はれる。此主峰は Ferrovie Funicolare で約三

畑の中に點在する村の人家を望み、南方裾野には
 灰の中から掘出した有名なる Pompei の町がある
 筈である。

Napoli 灣の窮する所、Sorrento 半島の根部に
 Castellammare の軍港がある、Napoli 灣の南望は

此半島と Capri 島があるので一層美しく、Monti Lattari 山脈を脊梁として居る此半島の最高峰は Monte Sant' Angelo (四七三五呎) であり、其前に Monte Faito (三六二〇呎) が聳えて居る、Sant' Angelo から左に Scialdrome (三四五〇呎) Monte

よつて Vico Equense の町があり、半島の岬近く Sorrento の町が見える、山の斜面には一面に橄欖の樹が深緑に茂つて居つて、其間所々に白聖の Villa が覗いて居る。
半島の岬 Campanella の先に、今通つて來た

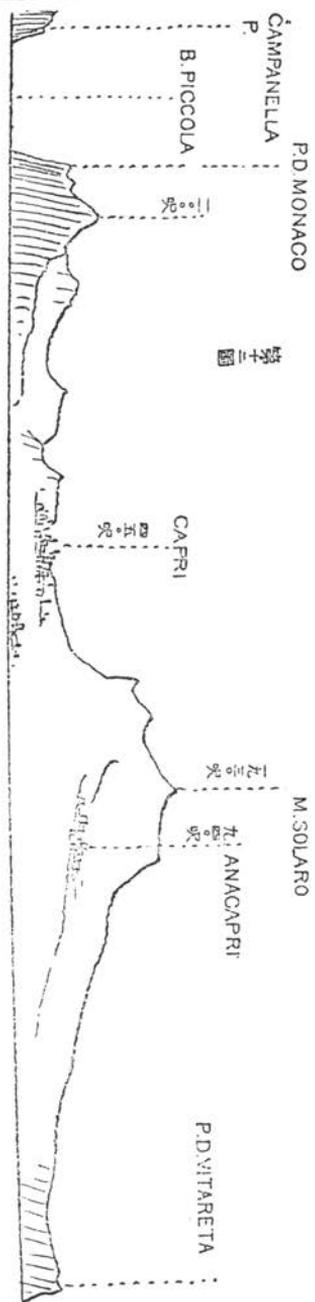


CASTELLAMARE (Cerreto) (四五三五呎) と Lattari の脈がつまみ、是等には皆 Castellamare から登れる(第十一圖参照)。何しろあの幅の狭い半島に、海から直ちに五千呎に迄聳えるのであるから、傾斜は甚だ急で、海岸は多く絶壁である、Faito の右麓海岸の絶壁に

Piccola 海峡を距て、Capri の岩島がある。菘被りの塚から飲ませる Capri 葡萄酒の産地として名高い此島の最高點は Monte Solaro (一九三〇呎) の岩山で、其斜面九四〇呎の中腹に Anacapri の村、左の鞍部四五〇呎の所に Capri の村

の人家が塊々つて居る、島の右左の端は夫々 Punta di Vilareta 及 Punta del Monaco の岬で、何れも斷崖である、特に主峰の外海面は二千尺に近き斷崖となつて居て、中々の壯觀である（第十二圖參照）。

此様な景色で圍まれて居る此港は、成程風光明



媚で、海上で眺めると陸上のやうに伊太利一流の周囲の不愉快さがないから、眞に壯快で心持よく觀賞出来るのである。此邊の山登り島廻りに關しては Buedeker の案内記を始め詳細な文獻が澤山あるから此位にして止めて置く。

終りに Marseilles から Gibraltar に南下する途中 Spain の東岸 Cape Nao 附近で見える山の話をして、此稿を終らうと思ふ。船が Balearic Islands に寄つて航海すると、是等の山を望むのは困難であるが、Spain 側に寄つて航過すれば、澤山の山を見ることが出来る。先づ Cape San

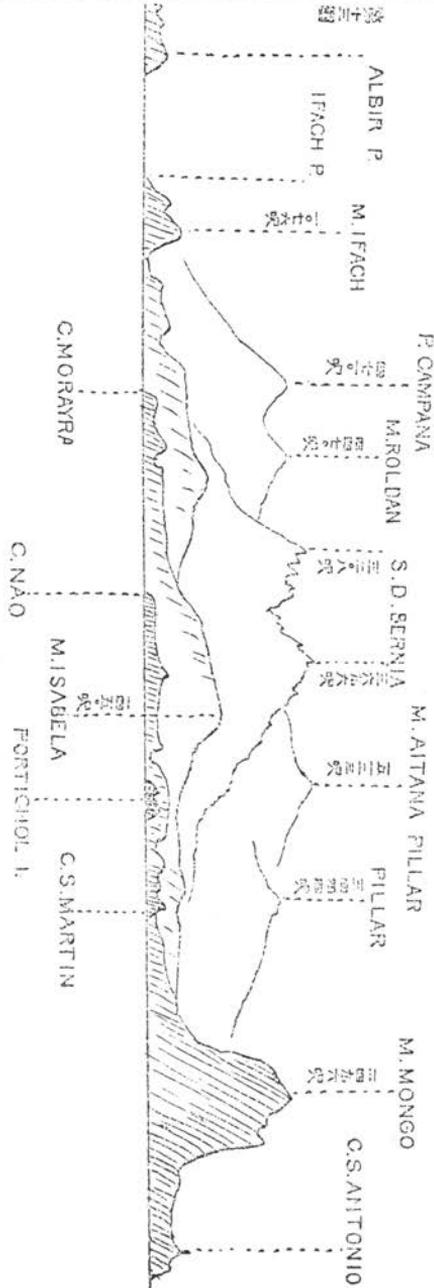
Antonio の燈臺に船が近づくと、岬後に兀立する Mont Mongo (二四九六呎)の岩山が目につく(第十三圖參照)之れよりすぐ隣の、最も東に突出した岬 Cape Nao の沖に来て西望すると、犬齒の様に參差した Sierra de Bernia の三二〇八呎及三

六九六呎の二峰と、其南に駱駝の双峰の様に見える Puig Campana (四七一〇呎)と Mont Roldan (四四七〇呎)が見える、遠く後の方には此邊での最高峰である Mont Aitana Pillar (五一三三呎)及び Pillar (三四四四呎)が覗いて居る。海岸通

に斗出して居る、Albir Point は遠方なので、水平線上に島の様に離れて見える。これで前編「船上談山」の山の間、數十坐の山を追加したつもりである。尙前編に一寸話して置いた、Stiely 島の南西、地中海中の Pantelaria 島

りには Mont Isabela (一四五〇呎) Mont Ifach (一〇七六呎)等、千呎程度の山が Mont Mongo を先頭として續ぎ、北より順に San Antonio、San Martin、Nao、Morayra、Ifach、Albir 等の岬と海

の蝶螺の様な島山の最高峰は(十七年一號七六頁下段一四行)、Montagna Grande (二七三〇呎)と云ふのであることが分つたから、之れも追補して置く。



又機會があつて新に山を望見したら、續々船上談山を試みて、追補訂正をやるが、尙特志會員諸君の參加漫談されんことを御願ひして置く。(終)

○英彦山のことども

竹内亮

はしがり

英彦山は一に彦山とも書かれる九州の名山であつて、山域豊前、豊後及び筑後の三國に跨り山高からずと雖も山勢峻嶮を以て聞えて居る。山の主要部は豊前田川郡と豊後下毛郡との界に在つて、高臺狀地形の上に更に峻削なる三峯一群をなして聳え、中央なるを上宮岳或は中岳と稱して高さ約千二百米、英彦山神社の上宮これに鎮座し、その南に接して南岳一名俗體岳があり往時英彦山権現の寶庫が置かれてあつた處であるといふが今は山頂一平をなし三角點の石標を見るのみで何もない。上宮岳の東には北岳一名北體岳があり山頂樹林の

間に一小石祠を見る。この一群の北東部は藥師峠の臺狀地に及び、更に鷹巢山の一群を起して居る。鷹巢山は岩骨裸出して聳立する三奇峯一群をなし西より順次一の鷹巢、二の鷹巢及び三の鷹巢の名で呼ばれ、いづれも九百米以上の高度を示して居る。南岳の南尾根は南西に延びて高度約一千里の岳滅鬼峠に及びその西の少しく高くなれる一帯を岳滅鬼岳と呼んで居る。この附近より北西に一支が出で黒岩山及び障子岳の九百米内外の臺狀の奇峯を見る。以上の峯々は辻村氏によればいづれも阿蘇熔岩に對する古期熔岩臺地上のピュートであつて火山地形の解析された一型式として模範的のものださうである。

英彦山は古來西海の靈山として上下の尊崇厚く、所傳によれば太古天忍穗耳尊山嶺に降臨あり、後繼體天皇の朝より佛法の靈場となり、奈良朝時代に入りては修驗道の大靈場となりて平安朝に及び四境七里坊舎三千八百、食邑十三萬石を算して宛然諸侯の勢威を以て戰國時代に及んだが、天正年中切支丹大名大友宗麟の兵火に遭遇して壞

滅し、後一時中興の氣運を見なければも遂に昔日の盛觀なく、維新前迄には坊舎三百餘民家百餘を残すのみとなつたと云ふ。明治に入りて神佛分離し現時の英彦山神社及び數座の攝社となつたものである。英彦山神社は官幣中社に屬し主神は天忍穗耳尊であるが、左右の相殿に伊邪那岐、伊邪那美の二神を配祀せられてある（古くはこの二神は南北兩岳の山頂に各分祀せられたものであつたと云ふ）。正殿は上宮岳の山頂にあつて山麓田川郡彦山町に奉幣殿がある。奉幣殿の下方は坂路を圍んで旅舎、坊舎等があり、銅鳥居に到りて略盡きて居る。銅鳥居は高さ二丈周圍九尺餘青銅製で寛永十四年鍋島侯の寄進になるものである。上に靈元帝御宸蹟に摸した「英彦山」の大額を仰ぐことが出来る（ヒコ山は日子山、彦山等と書かれたものであつたが靈元帝の御宸蹟を拜受して以來英彦山と書かれる様になつたのである）。攝社の内高住神社舊稱豊前坊は北岳の北麓に鎮座あり、岩窟内に神靈を奉祀する。原始林を負へる奇岩のもと老杉鬱蒼として神域甚だ壯嚴である。

全山城は到る處奇岩、奇峯に富み又樹林深く秋の紅葉と冬の樹氷に著名である。私はさきに大正十一年春この山に登り昨年十一月十四日より十七日に亘り會員池田清次郎君と共に山中を跋涉し更に大分縣日田に出て晩秋の山越を充分に味ふことが出来た。英彦山の記事については本誌に於ても已に第三年第一號に手島氏の紀行、第九年第一號に古賀氏の文あり、更に第十三年第三號に八代氏の記事があつて略盡されて居る様であるが、重複を顧みずこゝに私自身の立場としての見聞の一端を記して見たいと思ふ。

一、英彦山への道

英彦山へ登るには普通山麓彦山町に到り奉幣殿に賽しそれより先づ上宮岳に登拜するのを正道とする。彦山町は海拔約七百米の高度にある部落であつて奉幣殿、社務所を始め往昔の坊舎の残りも、旅舎、郵便局等があつてやゝ整つた一邑を成して居る。

鹿兒島本線の折尾驛で汽車を乗りかへ田川線添田驛に下車し、直ちに乗合自動車又は馬車をかつ

て宇二股に至り乗物をすて、九十九折の坂道を右に障子岳の奇峯を仰ぎつゝ登ること約一里で達することが出来る。又自動車を借り切つて坂路を登り彦山町下の銅鳥居迄行くことも出来るが二股からの賃銀四圓、しかも餘り行くことを好まないらしい運轉手の口吻であつた。私共の今度の行は福岡から飯塚行の乗合自動車によつて田川郡の飯塚町に到り更に後藤寺行きの乗合自動車にのりかへ後藤寺驛で汽車にのつて添田に着いた。この行程は福岡を基點にするものとしては前者より旅費は稍々高價になるが時間に於て二時間許り節約し得たのであつた。

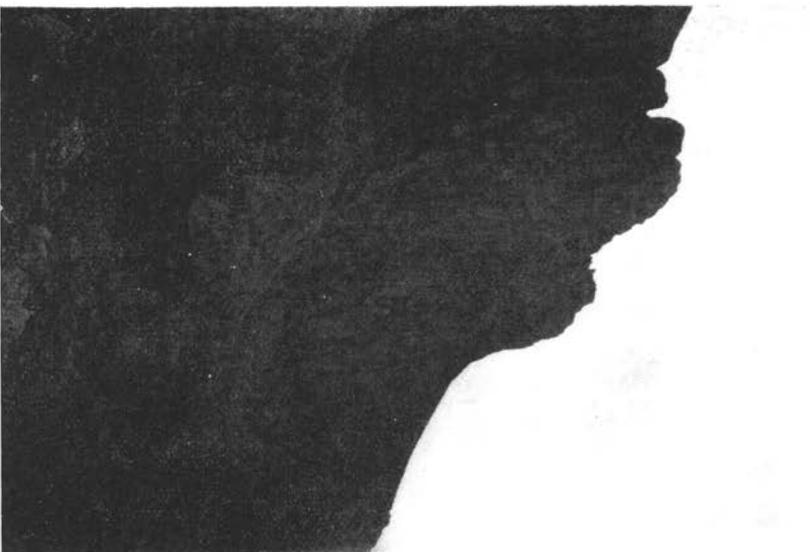
大分縣方面からは一は耶馬溪鐵道の終點守實から山國川の上流をさかのぼり薬師峠を経て達するものがあつて里程五里と稱し全路徒歩によるより策がない。本誌第九年第一號の古賀氏の紀行はその道について記して居られる。今一つは日田から中津街道を約一里（此間乗合自動車の便がある）で右に小野川の谷に入り、岳滅鬼峠をこえて到るもので里程六里と稱せられるが實際は八里位にな

るらしい。本誌第三年第一號の手島氏の紀文はこの路について記して居られ、私共も今度の行の歸途この路をとつて日田に出た。秋酣なる頃英彦山を登つて守實に出で耶馬溪を探り又はその逆を行くのは最も興趣深き二乃至三日行程の小旅であらう。

彦山町は以上いづれよりも唯一の登山の根據地であつて旅館としては花山、三角、天満屋、富士屋、六助、白梅、新屋及び櫻屋アタラシの七軒があつていづれも休み茶屋を兼ね土産品や駄菓子等を店頭にならべて居る。土産品の内彦山がらと稱する土製に胡粉で彩色した小鈴は土俗趣味の極めて豊かなものである。

私共は花山旅館に入つたが室に通されるとすぐ女中が待遇程度を聞きに來た。規定を見ると四圓位から一圓位迄になつて居るが池田君の御話では先に二圓五十錢と指定された時でさへ宿屋ではそれ丈の待遇をするのに餘程困難したとのことであつたから今度は二圓にきめて見たが、それでも御馳走の種切れにおちいり心づくしの小鯛の鹽焼も

別宮貞俊氏撮影



Pillar Rock



Pikes Crag

大分怪しくなつて居た様な仕末で、こんな山里では結局一圓五十錢程度の處で丁度勢一杯の能率が發揮されるものらしい。

二、山巡りの路

英彦山登拜の人々の普通にとる行路は彦山町より奉幣殿前を経て直ちに上宮岳に登り、こゝで路二つに分れて一方は南岳に至り材木岩、大南社、鬼杉等を経て彦山町に歸るもので、他は上宮岳より北東に尾根づたひに北岳に至り少しく東に下つて北側の急坂を豊前坊即ち高住神社に下るものである。何れも彦山町を起點とすれば略半日行程である。私は大正十一年の春彦山町を午後三時頃出發して略前者の行程により登山したが大南社の附近で右折して鬼杉に到る細徑を見失ひズット下の溪谷迄下つてしまつて路に迷ひ遂に日没となり、漸くにして彦山町に歸つたことがあるがこんな事件さへなかつたら餘りくらくならぬうちに彦山町に歸れたことと思ふ。

南岳は上宮岳と目睫の間にあり山頂樹木なく眺望最も開闊である。材木石といふのは南岳の頂上

から南西に急坂を下る途中にあつて安山岩の柱狀節理を露はして居るものである。大南社はそのすぐ下の大岩壁を負つて建てられた小祠で社記によれば天火明命を祀り俗に不動尊と稱せられて尊信せられて居るといふ。鬼杉は私は未見であるが有名な古い大樹であつて記録によれば胸高周圍四十一尺樹高二十一間樹齡凡一千二百年と稱せられ現に天然記念物に指定されて居る。

本誌第三年第一號の手嶋氏の記事によれば日田方面から岳滅鬼峠に登り尾根づたひに南岳を経て上宮岳に登つて居られるけれどこれは普通の登山者のとる路ではなく稀に山人の通行するにすぎないものであつて、その當時にあつてもすゞ竹に蔽はれた路線を辛うじて辿つて行かれた様である通り現今に於ても路といふ程のものはないらしい。しかし落葉闊葉樹林の下はすゞ竹が密生して居るとは云へ東北地方や北海道邊のねまがり竹程ではないから通過するのに左程困難ではない。又薬師峠から尾根傳ひに北岳に登ることも困難ではない。この路線は私と池田君で昨年十一月十五日

に踏査したもので鷹巢山を上下して後午後三時頃薬師峠の頂上を辭し石南の多い狭い尾根から落葉闊葉樹林の急斜面をひた登りに登つて北岳上部の南側にある林道に出で、更に右に急斜面を登つて高住神社から北岳への登路に合した。夏の日の永い頃であれば早曉彦山町を出發すれば岳滅鬼峠から尾根づたひに英彦山三峯を踏破して薬師峠に下り夕暮頃出發地に歸着するのは左程困難ではなからうと思ふ。

三、高住神社と鷹巢山

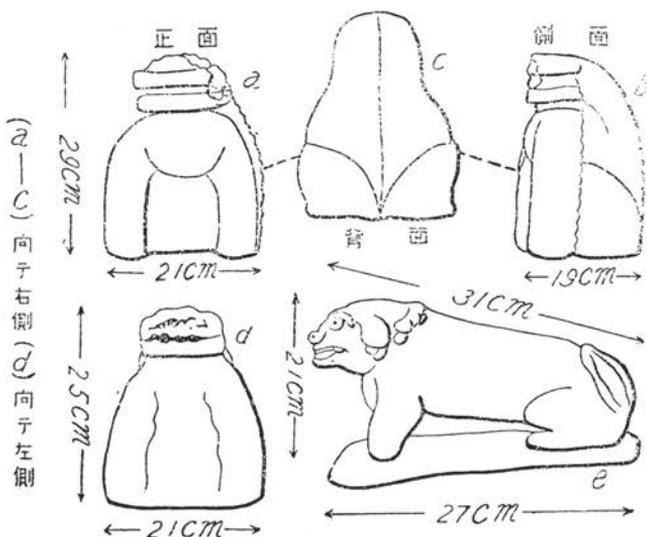
高住神社はもと豊前坊と云はれか處で北岳の北麓奇岩の下にある幽邃なる神域で、彦山町から耶馬溪に越す山道の高巢原と稱する高原を過ぎてしばらく行き右に折れて晝猶暗き杉の下道を辿ること數丁で神殿に達する。高巢原は上宮岳の北側高度約九百米から約八百米位の間に亘る緩斜地で一面の草原をなし景趣甚だ明快山中の一名所たるを失はない。しかしこの草原には今杉櫟等が一面に造林してあるので今後十數年もたてばこの廣々とした草原の景趣は全然失はれて暗い重い針葉樹林

に蔽はれると思ふと惜んでも惜しみ足りない氣がする。

高巢原が盡きると一の鷹巢の大卓子狀の奇峯が眼前にソ、リ立ちその左にやゝ遠く犬ヶ岳が密林に蔽はれた山姿を見せる。

高住神社の神體は大岩壁の下の小窟内に安置せられてあるので拜殿は直ちに大岩壁を負つて建てられて居る。社傳によると豊國の國現神豐日別命を祀るもので豊國の大氏神として往昔國司領主の崇敬篤く殊に藩主小笠原氏は高百石を奉進し、毎年正、五、九月には代參を遣して奉幣せしめた由であり、又佐賀藩主鍋島氏は屢々社殿を修造したといふことである。拜殿の前には大小の石燈籠や高麗犬が多數見られるが何れも特異なる型式のものが多く可成年代を経たものがあるらしい。拜殿の傍に小石堂があつて中に清冽な山水などが湧出する處があるがその屋上にある一對の石刻の小形な高麗犬は形狀特に珍奇であつた(挿圖 a—d 參照)。又それと同じ場所にある他の一個の石刻の高麗犬は前同様小形であるが甚だ精巧につくられて居た

(挿圖e參照)。次に社務所の老人の好意で拜觀し撮影した神殿内に藏する木彫の一對の高麗犬(寫眞參照)は形狀甚だ精巧且つ古雅で以上の石刻のものと共に考古學者の見逃がせないものであら



う。又古い石額が前記小石堂の屋上に置かれてあるが中央に豊前窟と大刻し左に内大臣定家卿の細字を刻してある。建物としては神殿の外に社務所の建物と朽ちた鐘樓の残りのものと二戸の休み茶屋とがある。境内には老杉多く天狗杉と稱せらるるものは周圍十八尺五寸樹高二十間材積百二十五石に達すると山林會の揭示に記されてあつた。

高住神社から藥師峠へは二十分内外で達せられる。峠は稍々平坦な草原をなし二三の荒削りのベンチがしつらへられてあつた。こゝから一の鷹巢は眞上に聳え立つて灰白の岩壁も露はに物凄く中々よりつけさうにも見えないが、藥師峠の尾根の岩壁の根に接する邊で岩壁の連絡がされて淺い谷状をなして居るのを見て私共はそれより外に登り路がないと直感し、出来る丈輕装して可成緊張した氣持で尾根を岩壁の下に登りつき遂にそのキレトの急斜面をグングン灌木につかまり乍ら登つた。すると間もなく東西にのびた狭い尾根に出てそれを西にしばらく進むと大きい黒松が一本ある少し上に五萬分一の地形圖にある九百七十九米

三の三角點石標が灌木の間に見出された。岩壁下からの所要時間は二十五分であつた。東側は窶やミヅナラ等の喬木林で眺望が充分でないが西側は灌木狀林で北岳が間近く聳え立つのが仰がれる。この尾根はこゝから少し低くなつて更に西に延びて行く。その終端迄行つて見たけれど別にとり立て云ふ程のこともなく樹林の陰に石南の多かつたことが印象にある位である。歸りは同じ路を辿つて下つた。高住神社での話によると一の鷹巢の登路は唯一條あつて、それも餘程山に慣れた獵師でなければ登降が困難だと云はれて居て、メツタに登る人はないとのことであり、しかも山容が特別に威歴的に仰がれるのとで私共は最初の期待が大きすぎて何事もなく平凡な路を上下してからはアツケなさに張合抜けがした。

一の鷹巢の東には更に二の鷹巢及び三の鷹巢の二峯がならんで居る。前者は極く小さな岩峯であり目立ないけれど後者は高度略一の鷹巢と伯仲の間にあり相當に顯著な岩峯であるが、この兩者とも一の鷹巢に比しては岩壁の規模が著しく劣つ

て居る。

四、岳滅鬼峠を経て日田へ

彦山町から岳滅鬼峠を経て日田への山路は奉幣殿前から右への小徑を辿るものである。路は玉屋神社を過ぎて彦山川の一支汐井川の溪谷に下り、その左岸の緩斜を横に登つて岳滅鬼峠の頂上に至り、日田側に下つては途中法蓮窟なる洞門を通過して小野村字中村に出で、小野川の谷を縦斷して日田盆地に出るものである。行程六里と稱するが實際は八里に餘るかと思ふ。私共は十一月十七日午前十時頃彦山町を發し途中道草がひどかつたので峠の頂上についたのは午後一時を過ぎた。下り路は大分歩調を早めたけれど中村に下りつたのは午後四時に近い頃で、小野川の谷の途中で夜に入り日田の隈町に入つたのは午後八時すぎであつた。

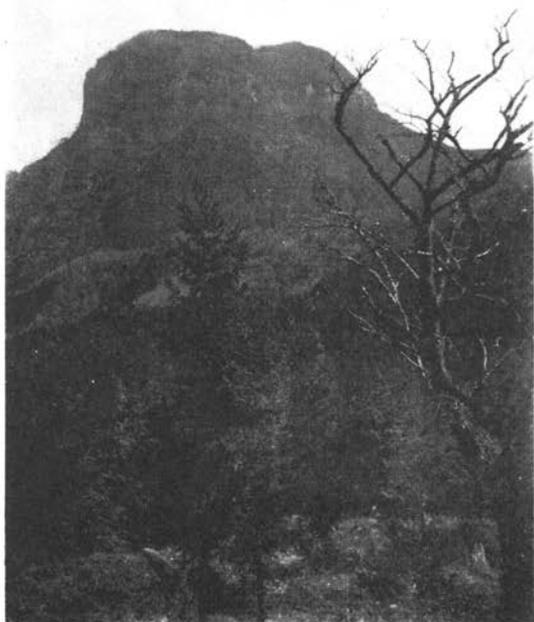
岳滅鬼峠一帶はブナを主とし樅、梅を點々と混生する壯大な原生林で樹下にはすゞ竹が密生して居る。北側は傾斜が緩であるが南側は稍々急に低下し、尾根は西方に少しく高まつて所謂岳滅鬼岳



上 英彦山高住神社秘藏の高麗犬（木彫）
下 英彦山

高住神社附近より一ノ鷹栗を仰ぐ

池田清次郎氏撮影



をなして居るが東方は殆んど平坦である。森林が深いので眺望は殆んど駄目である。峠の頂上には岳滅鬼岳側の笹藪に苔むした石標があつて「北是豊前小倉領」の文字を刻してあり、それと相對して低く高さ數尺の平直な自然石が露出してその間に山路をはさんで居る。

玉屋神社は先きに記した大南社、高住神社等と同じく大懸崖の下にあつてなれば小洞窟内に神殿を見る。社傳によれば瓊々杵尊及猿田彦命を合祀するものであつて、小窟は磐若窟と稱し中に不増不滅の靈水をたゞえ天下大變のある時はそれに先だちて混濁すると言ひ傳へられて居ると云ふ。傍に鬼神社と云ふのがやはり小窟内にあつて滑澤な高さ二尺五寸幅二尺位の圓頭柱狀の自然石を神體とし、その下に大小の草鞋が無數に奉納せられてあつてその大なるものは長さ一尺五寸位に及ぶものがあつた。英彦山神社々務所での御話によればこの神は萬病に靈顯ありと信ぜられ願主が願ほどきに草鞋を奉納する習慣であるといふことであるが、草鞋は俗間信仰に於てしばしば女陰を表徴す

るものであること、石神が男子生殖器を信仰對象とすることの多いこと等から考へて一種の生殖神信仰ではないかとも考へられる。殊に玉屋神社の祭神の御一方が猿田彦の命であることは一層その感を深からしめる。

猶、序にこの附近の二三の俗間信仰神をあげて見ることにする。奉幣殿の少しく下方路の東側の大杉の下に小石祠があつて中に福益護法の四字を刻した石面を見ることが出来る。小祠には赤いよだれ掛が施してあり、前には多くの小さな藁草履が奉納してある。社務所で聞くとこゝではこれは俗に「福益坊さま」と稱せられ小兒の百日咳の守り神で願者は願ほどきに草履を奉納する習慣であるといふ。又私は見落して來たけれど上宮岳の方二の鎖りと稱する鎖りを手ぐつて登降する處の近くに俗に「うさんみようさま」と呼ばれる神がある。實際は「烏芻瑟磨明王」と稱する神で眼病一切と腰より下の病に神效があるとして信仰されて居るさうで、之れは明かに一種の生殖神の信仰らしく思はれる。

(昭和三・三・一〇稿)

○雪の岩手山へ

上 關 光 三

昨年の三月に雪の岩手を踏破して自信を得た私等盛岡銀行の山岳部員は、同じ月の十日の午後三時に二度目の登山に成功した。一行はマネージャの坂本を初め總勢六名、何れもはち切れさうな元氣な面々である。準備品は昨年と大して變りはないが、お定まりの食料品の外に、高度計、角度計、寫真機、ザイル、シユタイクアンゼンなど雪の山に特に必要なものは整へた。尤も昨年はこの外に傳書鳩なども入念に携へて行つたが、今度は昨年の體験から可及的に重荷を省いた。

今度の登山の目的も別に大仰なことではない、強ひて言へば、雪の山岳とスキー操法と位のもので、他は思ひ／＼の希望から登山の再擧となつたわけ。最近天然紀念物に指定され、昨秋の本誌の奥羽號に記載された、しかも雪の岩手山を紹介す

るのも徒爾ではなからうと思ふ。

東北本線の瀧澤驛に下車した一行は、雪野原分けて詩人喙木が搖籃の地として名高い鈴蘭の曠野を一里餘で、花輪街道に沿ふ一本木ボンキの部落に着く、この夜は村の有志に宿を求めて、登山の途に就いたのが曉寒い五時半、一本木から西へまつしぐらに道をとつた一行は、途中の密林を過ぐるころから猛烈な大吹雪に惱まされて豫想外に手間取り、中間目標とする山腹八〇〇米の炭焼小屋着は前八時——勿論人影がない——、こゝで入念に登高の準備を整へて頂上さして進む。コースは概して昨年のそれを選んだが頂上近くに及んで昨年のコース（右手柳澤登山口の不動平に向へる線）と正反對な左手の北面した焼走りの線をとつた。これは北面でもあり亦一面には勾配の上から種々なる方面に於て不利なのではあるが、その一面には山岳の異なる方面からの視察とスキーコースの開拓が目的だつたからである。この意味からして昨年のコースに見るやうな異つた事象——地面の露出やチシマギキヤウなどの高山植物の生えてゐたこと

など——には遭遇しなかつた。

けれども何物かを獲ようと眞寶寶の山に入ったつもりで雪交りの烈風の中を鵜の目鷹の目で進んだが、文字通りの白皚々たる銀世界で、冨寒の圈内にしか見られぬシラカンバやハンノキの雪に埋もれた梢頭の氷結の花を認むるのみである。積雪は北面と風力の爲めか豫想したほどには多くなかつた。山麓の六〇〇米のところでは二米に足らない少量で、表面は五センチ位の厚さの氷に化してゐる。されば雪崩の痕跡などは更でない。

登山は一二〇〇米附近まではスキーを用ゐて、ジックザックを終始した、この間角度は三二から三八の間である。この頃から西南の方面は大きな暗雲に掩はれた天候の險惡が募つて來た、さなきだに角度と氷質とが全くスキーの使用を許さぬので、こゝで一行はスキーを脊にシュタイクアンゼンに代へ、コースを直線に登攀する。角度は高度につれて益々峻峻となり、頂上近き東岩手火山の火口壁のところは四六を示してゐた、何もない雪の白聖を朔風で岩壁へ吹きつけたやうな景觀であ

る。なほこゝで體驗し得たことはシュタイクアンゼンの用法であるが、この際角度の急峻となるにつれて、直線登攀が徒らに疲勞を増加するから、ジックザックの方策に出ようとする時、シュタイクアンゼンの氷面への密着が充分にゆかない、ともすれば片方が滑り落ちさうで、からだのもちが悪くなる爲に勢力の徒勞は夥しい。これは何よりも雪の登高に研究し熟練をせねばならぬ點であると思ふ。ゆく／＼山麓からして野兔を幾度も認めたが、一〇〇〇米までは明かに糞があつた、尤も一〇〇〇以上に及ぶと動物は勿論植物の何物すらも認めることが出来なかつた。

かくして雪を交へた烈風と戦ひながら頂上着は午後零時三分、氣温は零下十四度で昨年よりは著しく昇騰してゐた。頂上藥師ヶ嶽の側面北方の大岩礁は、露出して寒風に曝され、その他の部分は何れも堅く氷結されてゐた。頂上にあること僅に三分時、烈風の猛威は佇立を許さぬので、集團した一行は氷上へ腹這ひになつて萬歳を三唱し、急ぎ下山の途に就く。

下山は登山のコースをとる。一一〇〇米でスキに穿き替へて一氣にステームボーゲンを試み二時半には八〇〇米の炭焼小屋に着く。こゝで約一時間休憩の後、四時二十分に一本木着、八時四十分五分に盛岡の人となる。

なほ重ねて言ふやうであるが、今回の雪中登山で感じ得たことは、シュタイクアンゼンの使用法とその熟達、スキ下降中に雪と氷との限界——所に雪と氷との面が混じり居る——に處する操法、雪中山岳に對するスキの應用操法である。なほこの外に登高に際してスキにワックスを塗布すれば、雪が附着して行進に利便多いこと、足部へオゾと唐辛子粉とを混ぜて塗磨すれば、保温の傍ら凍傷の防止に有效なることを瑣事ではあるが特記し度い。

(昭和三年三月十三日)

○妙高山「牛形」の略解

岡 田 喜 一

大正十四年の春、偶然二本木驛附近の獵夫の言に依つて、此妙高山の「牛形」或は「農牛」として有名な残雪は、残雪其ものが牛形に現れるのではなく、雪解けによつて露岩が現れるのに歸因することを知つた。所謂残雪に因む山の形態の第二型、即ち富士山の「農男」、爺ヶ岳の「種蒔爺さん」の部に屬するものである。

此現出する場所は妙高の神奈山東北方の大きな澤(澤名不詳)の左岸で高距は約千三百米附近。關山驛附近で車中よりも望見されると里人は云つてゐる。

私が行つて見たとき(前記の二本木附近菅沼の獵夫等の熊狩りの群に混つて行つて案内して貰つた)は、生憎まだ充分に其全形を現はしてゐなかつたが(此年は例年より雪が多かつた)、ほゞ其姿



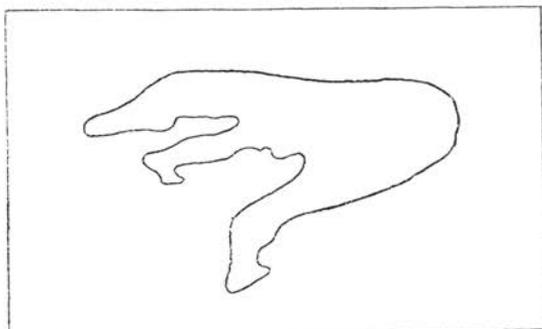
妙高山の寢牛
岡田喜一氏撮影



妙高山
山田應水氏撮影

を望むに事を得た。(寫眞參照)。

「牛形」は頭を西南に向け前肢の脚部を屈し、後肢は稍々曲りて今正に地を蹴つて中空に躍んとする姿である。



然し此の牛の形

は、下顎骨に當るところがよく發達してゐるのと頸が

長いので、牛よりもどうも馬に近

いと思つて見た。

其後關山附近では之をマガタと云ふ

ことを知つた。マガタは恐らく馬形

であらう。さすれば此邊では之を馬

の形と見てゐると思へる。妙高山の「牛形」より

「馬形」の方がより妥當な名と考へる。之は又一名「農牛」とも云ふさうであるが、私の調べた所では

雜 錄 ○妙高山「牛形」の略解

農事には關係がなささうで、反つて狩獵に關係してゐるやうである。即ち二本木邊の獵夫の言に依れば、此牛形が出れば熊が穴から出る(冬籠りから活動を初める意)と稱し、熊狩出獵の目標としてゐる。しかも此牛が小便する様になれば大丈夫だと云ふ。(雪が溶けて澤、即ち「牛」の腹部から流水する意)。因みに此「牛形」の腹部は大岩窟がいくつもあり、熊の冬籠りの好適地であるとの事。

熊の出穴の候と積雪の溶解に依る奇岩?の露出とを結び合せた所、一寸面白く思ふ。

此澤は熊狩りの時のツメの一つになつてゐて、附近から遠まきに追ひつめては此處へきて撃つので、「牛形」の脊と對岸の尾根はタツマを張るのによい。私の行つたときは前述の様に例年より雪が多くあつたので生憎まだ熊は居ず、勢子にまはつて此澤の左岸のサウシカンバ林を馳廻つて見たが、所謂子引きの岩鹿の足跡が「牛形」の岩窟に入つてゐる位に終つてしまつた。もし此處へ訪ねられる方は四月下旬が宜しからうと存ずる。寫眞は此澤の右岸の稍々下流から撮影せられたら一層よ

からうと思ふ。

○朝日岳雜話

別宮 貞俊
沼井 鐵太郎

○文獻と記録

羽前、越後の境近き朝日岳及び朝日山塊と呼ばれる一帯の山地は近年迄登山家仲間には其様子は餘り知られてゐなかつた。文獻の上では先づ明治三十九年二月發行の日本山嶽志を繙くと、位置、里程、標高等を記した後に、日本地誌提要、日本風景論、越後名寄中からの拔萃を六行ばかり載せてある。之で見ると多少の事は想像が出来て遊子の心を誘ふのであるが、何分交通不便な奥羽の地にあつて登山道もよく分らないので、つまらない地圖まで其名と大鳥池の所在を示し乍ら、つひ臆劫がつて都會の人は行かなかつたものと見える。

其後「山岳」が發行されてからも、一向朝日岳の

記事は見えず、只「山岳」五年三號（明治四十三年十一月）一三一——一三三頁の雜録に景翠生といふ人が朝日鑛泉よりの登山を略記せられてゐるものと、高頭さんが同十三年二號（大正八年四月）一〇三頁の雜録に「山ばなし」といふ一篇を掲げられて其内に三面村の事や其方面からの西朝日岳の登山を暗示せられ且平地から見た同岳のスケッチを描かれてゐる外は、僅かに同號所載の「越後山見立大角力」の内に朝日岳の名を見出すのみである。

此以後は昭和二年一月に出た「奥羽號第一」（「山岳」二十年三號）で、大井澤、朝日鑛泉、三面の三方面からの記事と寫眞によつて、先づ朝日山塊の山なりを始めて紹介する事が出来たのである。なほ山岳二十一年一號（昭和二年三月）には吉澤一郎氏の野川方面よりの紀行が出てゐる。

私（沼井）は親戚の者に山林の測量をして歩く職業の人がゐて、子供の時から朝日岳の深い事、大鳥池の神々しい事など聞いて知つてゐた。一度は探つて見たいと思ひながら、この山に比較的近い

仙臺にゐたときも、終に麓迄も行かないでしまつた。けれど陸羽國境の山々から、又は五色温泉のスキ―練習場から、東京地方の山にしては鋭角的な峻峭な大朝日岳のアウトラインを打ち眺めて、頭の何處かに其姿がこびりついてしまつた。終にたまらなくなつて大正十三年の二月始めて其山懐に入つて、漸く其のあこがれの山がどんなに秘奥で美しいかを知り初めたのである。

然し其以前此山の便りを聞かして呉れた東京ッ兒は無いではなかつた。既に當時會員であつた宮川久雄氏は同じく會員伴野清氏と共に大正八年七月中旬長井から黒鴨を経て朝日鑛泉に行き、一泊後鳥谷原山から小朝日岳を経て大朝日岳を極め、平岩山に野營して荒川谷に下り、針生平ヘナガを通つて五味澤迄行かれた（宮川久雄氏、「東北朝日岳及飯豊山」、大正九年六月發行「登高行」第二年七七—八二頁及大正九年二月發行山岳第十四年一號會員通信欄參照）。私は其年信州大町の對山館で同氏から朝日飯豊の残雪の美しさや藪のひどさを聞いたのであつた。又同年八月中旬大島亮吉氏は單獨で

大朝日岳へ行かれた紀行を發表されてゐる（「東北朝日岳に登り黒侯澤を下る」、「登高行」第二年六一—七七頁）。

其後數年立つて新設の山形高等學校山岳部の有志が大舉して大井澤方面から鳥谷原山に登り、朝日山塊主部を以東岳まで縦走して大鳥池に下り、大鳥川に沿うて下つた時の寫眞と其説明が「アサヒグラフ」一六二號（大正十二年七月五日）、同一六三號（同六日）及び同一六五號（同八日）に連載された。東北アルプス——朝日連峯などとしてあるのが不快であつたが、私達には不完全ながらも之によつて朝日山塊の山容、殘雪、大鳥池の水態並に登山の狀況を概略知り得たのである。なほ此旅行を基にして稍々詳細な説明は幾葉かの寫眞と共に科學畫報に掲載された事があるけれども、號數其他に就て今記憶して居ない。

朝日山塊が其寂寞を破つて多くの人に愛せられる様になつたのは此頃からである。其間山形高学校在校及出身の人達の業績は朝日山塊開發に最も重要なものである。大正十四年二月私どもが朝日鑛

泉に行つた折に手に入れた、山形高校山岳部で編輯して大正十三年七月十五日に發行した「朝日連峯登山案内」といふ小冊子（縦六寸横三寸位、寫眞七葉、總頁二十二、六號活字）は其第一の成果である。此は朝日山塊に關する登山案内記の嚆矢と見るべきであらう。

以上に述べた朝日山塊參考文獻の他に最近私達の知り得たものを擧げると左の如くである。

川崎浩良氏、「山形日刊」新聞、明治四十二年頃の夏、十數日間に渡つて連載、——同氏共一行三人が朝日鑛泉の古川房吉氏を案内として主脈を

縦走し大烏池に到り大烏川を下つた紀行。

安齋徹氏、「山を憶ふ」第二號（大正十四年）

佐藤榮太氏、「山形自由新聞」大正十四年八月十日頃に古川房吉氏を案内とし一行三人にて大朝日岳より尾根傳ひに祝瓶山に行つて野川に下りた紀行を掲載。

國分貫一氏、「飯豊山より朝日岳を経て月山へ」、「登高行」第六年（大正十四年十二月）六三——六九頁の内。出戸より荒川の針生平を経て朝日岳

に登り大井澤村に下つた紀行。

田中三晴氏、「朝日岳より大烏池へ」、「登高行」第六年二二——二八頁。八月下旬朝日鑛泉より主脈縦走大烏池、大烏川への紀行、要領よく記せり。

高槻吉次氏、「第一回東北アルプス朝日登行」、「山懷」創刊號（大正十四年十一月）三一——三四頁。木川、朝日鑛泉を経て西朝日岳迄の七月の紀行。

高槻吉次氏、「第二回朝日連峯行」、「山懷」同右三五——三六頁。根子川より清太岩迄の九月の登降記（此二篇は餘り參考になるものではない）。後藤氏、「東北朝日連峯へ」、「リニクサック」五號。

最近に於ては朝日山塊を探勝する者がふえたので文獻以外に未發表の記録は少くないのである。稍々異つた行き方をしてゐるものに大正十三年

（？）五月山高生三輪氏による主脈の縦走、十二年頃四月東北大學生深町氏の行、大正十四年初夏河田氏の主脈縦走（北より）等がある。尙昭和

二年の正月初旬に別宮、岩永の兩氏は異常な快晴續きに乗じて朝日川の二ッ股小屋を中心として、中ツル、平岩山、小朝日岳、鳥谷原山、御影森山などを探つた事を報じてゐる。(「山岳二十一年二號」黒部號〔會報欄參照〕) 岩永氏は又昭和二年三月下旬から野川方面に出かけて我々三人の宿望だつた祝瓶山の登頂に成功し、葉山に廻つて來られた(同上會員通信參照)。

上記文獻中、「朝日連峯登山案内」は安齋徹氏の専ら草せられたものゝ由だが、文中の用語に慎重を缺く點があつたり、地名の記載、地形其他の叙述に首肯し難い所もあるが、此は少し山に親しんでゐる人にはすぐ氣の付く事でもあるし、他人の作を彼是いふ事は近頃「山岳」でも餘り流行らなしいしするから、茲に謹んで紙面を儉約して置く。

なほ最近山形市には山形高等學校山岳部の他に登山及び山の研究をする會が一二出來てゐる様で、大正十五年三月九日には山形市で朝日會の催しがあつたといふ。郷土の山岳を愛し其美をたゞへ其細微に亘つて調査研究する事は聞くも快よい

事である。只往々にして各地に見受けるが如き我田引水論により或は流行登山趣味により朝日山塊の眞の美を損はざらん事を望むや切である。又同地の土にして土地に新名を附せんとする場合には熟考の後何等不都合を生ぜざるものを選ばれん事を願ふ、日本山岳會に一應合議せらるゝ事は最も賢明にして悔を殘さざる方法であると思ふ。

尙又此は私(沼井)が臺灣に來てから聞いた事だが、山形のある山の會では「山形山岳」といふ定期刊行物を出してゐるといふ話であるから、朝日岳の事も勿論其内に書かれてあると思ふ。

(以上、沼井記)

○地名のこと

山へ這入つて山人から山の名、澤の名を聞くときはには言語の相違で、その意味や稱呼を誤ることはよくあることで、従つて始めて聞いたことが再遊の時に誤つて居たことを發見することが屢々ある。これから書く大朝日岳附近の地名についても私(別宮)が沼井氏と共に大正十三年二月に始めて行つた時に正しいつもりで聞いたことが、昭和

二年一月に再び行つた時には誤りらしいことがあるのでつくづく言語の相違を不便に思つたのである。

鳥小屋峠を越してから頭殿山の頂に出るまでに、ナベコシと云ふ所がある。(沼井氏記事山岳第十二年第三號奥羽號第一〇九頁五行目) 昭和二年の一月二ツ股の小屋で爐邊の漫談の序でに案内の政治にナベコシとはどう云ふわけかと尋ねて見るとナベコシではなくナベコワシだ。昔鍋を壊した人でもあつたと見えると云ふ。その附近にゴンスケ坂だとかハナコスリとか云ふ所もあるが、ハナコスリと云ふのは坂が急で鼻が前へつかへると云ふ意味らしいから、これは歴とした固有名詞と考へない方が妥當であらう。

頭殿山を下つて朝日川を渡る所の橋は置賜橋と云ふ相である。欄杆こそないが大きな立派な橋である。

始めて中ツルヘスキーで登つた時のスキーデポ附近を一本テラシと聞いた。(沼井氏記事山岳奥羽號第一〇三頁三行目) しかし今冬政治と一所に

好天氣に恵まれながら山を歩きつゝ聞いた所によれば一本テラスと云ふ所は遙か上の方の袖朝日から僅かに下つた所らしい。テラスと云ふのは、ガンピの木の方言で(何だかこれはシラカンバ或はタケカンバであるらしい) テラスの木が一本あるから一本テラスと云ふことだ。そらあそこにあるでせうと政治に指さされたが遠くから見ただけでそこには二本あつた。それも中ヅルプロパーではなく袖朝日から黒俣澤へ派出して居る脇尾根(ヨコフツツケの上の峯)の上部であつた。

天狗の角力取場(奥羽號第一〇三頁最後の行)は私が房吉の話から了解して居たのでは大朝日頂上の少し南にあると思つて居たが、これは大間遠で平岩山の頂上より僅かに東、一五〇〇米の等高線で少しく平のあることが示されて居るが、その平が天狗角力取場で赤味を帯びた岩片で平になつて居て、風あたりが強いため冬でも雪が少しもななく天氣ならば遠方からでも容易に指點できる。位置から云へば大朝日の眞南だから、房吉はさう云ふ意味で私等にその存在を説明したのかも知れない。

い。

沼井氏の記事中にアクリと云ふ地名がある。(奥羽號第一二六頁第八行)これは私の記憶では黒俣澤の對岸ではなく朝日俣澤の對岸である。黒俣澤の對岸は沼井氏の記事中にもある通り、一帯に五本檜と云つて居る獵場である。しかし檜が五本あるわけではない。アクリ(アグリ?)と云ふのは澤の名ではないらしいが朝日俣澤に合流する小澤(朝日俣澤、黒俣澤の合流點より地形圖上にて約六耗上流に這入る)の上手らしい。私等が御影森へ行つた時に登つた尾根はアグリの上の峯カミミネと云ふ相で、これはヒノキ澤の下手の尾根である。

赤瀧は中ツルから朝日俣澤に這入る小澤の瀧で冬でも水は滴つて居た。(滴ると云ふよりは水量が多かつたが、しかし水が流れるとか、落下するとか云ふ感じを表す程の水量ではなかつた。)

鳥谷原の神社から正南に澤を距て、一三〇〇米の等高線で圍まれた小隆起がある。それから南に出る澤をコダテ澤と云ふ。この澤が朝日川に合流する前に少しく西から出る澤と一所になつて、然

る後朝日川に合流する様に陸測の地形圖に示されて居るが、コダテ澤は他の澤と合流することなく單獨に朝日川に這入る、コダテ澤と朝日川との合流點は見には行かなかつたが、道は朝日川左岸の可なり高い所を通るので、コダテ澤を渡る手前では二ツ股の小屋も木立を透して見ることが出来る。そしてコダテ澤へ下る所が急なのでスキーでは横滑りで下りた。先年行つた時にもどうもコダテ澤附近の地形が地圖に示されたものと異なるので納得が出来なかつたが今冬の旅でそれが明かになつた。即ち前記の一三〇〇米の隆起と鳥谷原山との鞍部(約一二九〇米)から西に出る澤をドダシと云ふ。(普通ドダシ澤とは云はない)地形圖ではドダシが弧狀に廻つてコダテ澤に合流し、然る後朝日川に合流する様に示されて居るが、實際はドダシは黒俣澤へ直接に這入つて了ふ。その合流點は二ツ股の上流一丁かそこらの近距離である。二ツ股の小屋から眞すぐに尾根を登れば前記の一三〇〇米の隆起へ出るし、また私等が鳥谷原と小朝日との間の隆起(一四〇〇米私は便宜これをドダ

シの頭と呼びたい)から尾根を下つた時に下の方で東側へ下り、ドダシの澤を渡つてその左岸について行くと黒俣澤へ出て、すぐ二ッ股の小屋に着した。御影森の頂上から見るとコダテ澤とドダシとはどうしても合致してから朝日川に合流する様に見えるので、地形圖が間違つたのだらうと思ふ。政治は上倉へは測量部員と一所に來た相だが御影森へ來たのは他所の工夫であつた相だ。澤の表口などはやはり所謂常識では判断が出來ないので、見通して常識で判断するところ云ふ風に誤つて了ふ。

黒俣澤は以前房吉から聞いた所によると随分悪い澤の様であつたが冬行つた経験によれば朝日俣澤より小さいだけ簡單だと思はれる。雪で橋が出來て居て一回も架橋もせず、また足を濡らしもしなかつた。少し上ると迫つて居た兩岸は遠退いて廣くなり、小朝日や、百間乗りの雪溪が美しく見える。中ツル側が傾斜が緩くのみびりした氣分で歩くことが出來た。尤も川通し歩くとすれば随分悪い相で川に用事のない時は皆この右岸即ち中ツ

ル側を廻るのでこの迂廻路をモワダ廻り路と云ふ相だ。モワダと云ふのはシナノキの方言で此邊にはシナノキが多いからだ相だ。

黒俣澤は地形圖の俣の字の少し上手で二つに別れる。右股は小朝日の西の鞍部から出る澤で百間乗りの澤と云ふ。その上流に美事な百間乗りの雪溪があるからである。左股はまた少しく上手で二つに別れて居る。その向つて右の方が黒俣澤の本流で、岩の多い模様を地形圖に表して居る。向つて左の方をヨコフツツケノ澤と云ふ。ヨコフツツケと云ふのは何の意味かついに解らなかつた。その澤の下にヨコフツツケと云ふ所がある相だがやはり獵の時に獲物を追ひつめる所らしい。

百間乗りの澤と黒俣澤との間にある小さな尾根を五本楯のマヘカタミネと云ふ。つまり五本楯と云ふのは前記の如く小朝日からドダシの頭に連る一帶の獵師仲間の稱呼であるが、マヘカタと云ふのは獵の時の指揮者であつて、そのマヘカタがこの尾根に出て、獲物の動きを見て一同に指揮するのでその尾根を五本楯のマヘカタミネと云ふので

ある。小朝日の南面は實に壯觀であるが傾斜が急で岩が多く、クロ木が澤山あるので際立つて黒く見える。それを總稱してクログラと云つて居るが細かく云ふ時には中間の小澤で二分されて居るの
で口元の方をマヘクログラ、奥の方をオホクログラと云つて居る。

マヘクログラよりもつと下手にダイコク岩と云ふ、一寸して岩壁がある。マヘカタミネから手に取る様に見えるがこれもやはり獵をする時に利用する、それから側尾根二つ三つ下手の側尾根を小松峯と云ふ。小さな松がよく茂つて居る。

五本楯のマヘカタミネをずつと登りつめた隆起をヨコフツツケノガンガラと云ふ。ガンガラと云ふのはガラガラと云ふ様な意味であらう岩の多いことを意味して居るので朝日ガンガラと云ふのは大朝日岳の南面をよく熊をしとめる所である。

朝日侯澤は二ツ股から少し上手に三階瀧と云ふ瀧があるので以前は朝日侯澤とは云はずに三階瀧と云つて居た相で、朝日侯澤と云ふ様になつたのは地圖が出来てから後のことの様に政治は云つて

居た。概して中ツルから這入る著しい小澤はない。赤瀧がその最も著しいものであらう。その他の小澤は何れも南側即ち御影森の方から這入つて来る。地形圖で二ツ股より十三耗上手で合流するのがヒノキ澤と云はれて居る。この澤にはヒノキ(ネヅコ)が多いからだ相だ。何しろ此邊の喬木は大抵榎か姫小松であるのにヒノキ澤はその點から云つて甚だ特徴がある。しかしヒノキ澤もやはりずつと上の方では殆ど榎ばかりになつて了ふ。その上の澤がミカゲ澤で丁度地形圖で朝日侯澤の朝の字の點で合流して居る。

日の字の少しく下手で合流するのが下の大澤であつて瀧の多い悪い澤だ相だ。それから目星しい支流もなく最後に澤の字の少し上手で朝日侯澤が二つに別れて居る。右股が朝日侯の本流で左股が上の大澤である。上の大澤は下の方に瀧があるだけで上流はいゝ澤でどこでもスキイが出来たらうとは政治の話であつた。

朝日侯澤と上の大澤との尾根を朝日侯のマヘカタミネと云ふ。やはり朝日侯で獵をする時にヘエ

カタが登つて居るのでさう云ふ。その峯を登ると最後が非常に薄い尾根になつてそれを櫛の峯と云つて居る。そして天狗角力取場から平岩山へ連つて居る。平岩山には隆起が二つある。平岩山と御影森との間には著しい隆起が二つ三つある。私はこれを總稱して大澤の頭と假りに呼びたい。この朝日俣のマヘカタミネに登るとすぐむかふの中ツルの方にある長い松が一行に生えた脇尾根が所謂長松峯であつてそれから上手の方には朝日ガンガラ^ラのガラ／＼した山肌が見える。

○シ、狩のこと

毎度案内をしてくれる古川政治は十七歳の時から獵をやつて居るので今冬ニツ股の小屋で數日を暮した時にも、アヲシ、(羚羊)やクマシ、(熊)の話がいつでも爐邊を賑はして居た。そして獵をする時の準備やまたその實行方法を尋ね殊にその實演を親しく見たので、やり方を大體了解することを得た。

先づ一行の頭をマヘカタと云つてその人は一行とは離れて獵場のマヘカタ峯へ登つて獸の動靜を

見て一行に適當な命令を呶鳴つて居る、一寸呶鳴る位でよく聞えるかとうかは怪しく思はれるが風のない時ならばよく響くものである。そして一行は次のメムバーから成立して居る。トリキリ一人、鐵砲二人或は三人(これを上のタツ、中のタツ、下のタツと云ふ)追ひ落し一人、中勢子一人或は二人(これを中勢子、下勢子と云ふ)。先づ獸の居る澤筋から遙かに迂回してトリキリ、鐵砲の連中が澤の上手の尾根の上に出る。そしてトリキリは最も上手の側尾根の突端に出るのであるがその途中充分に注意をして、獸がそれより上手に出たか出ないかと云ふことを足跡を注意して確めなければならぬ。もし獸がぬけたならば即ち豫定した獵場より尙上手の方へ行つて了つた足跡を發見したならば、一行はまた計畫を改めなければならぬ。要するにトリキリは鐵砲を持たずに音をたてない様にして居て、マヘカタの命令に應じて適當な機會に呶鳴つて獸の進路を變へさすのである。次ぎは鐵砲がその部署につくのであるがトリキリから順に一つづつ、下手の脇尾根の上に陣取るの

である。追ひ落しは少しく遅れて出發し尾根の上の方から、獸を成るべく澤筋へ追ひ落すつもりで音を立てる。中勢子は追ひ落しの居る脇尾根より尙一つ下手の脇尾根の中腹を音を立てつゝからむで獸を追ふ。下勢子は成るべく澤通しを音を立てて登つて獸を追ひ上げる。

さうして皆が聲を立てながら追ふ大抵な所に隠れて居る羚羊や熊が逃げ出すので熟練したマヘカタはすぐそれを發見して了ふ。マヘカタも亦聲を立てると獸は狼狽してずん／＼上手へ逃げ出す。そこでマヘカタの命令でトリキリが聲を立てると獸は行手にも人が居ると感じて、人の氣配のない尾根の方へ登り出す。しかしその尾根の上の方には既に鐵砲が待つて居るので、わけなく撃たれて了ふ相である。そして羚羊や熊はマヘカタの思ふ通りに動かされて遂には悲惨な運命をたどつて了ふのだ相だ。

獵をするのに都合のいゝ天候は風がなく、晴れて居て、新雪が相當にぬかる様な場合が最もよい。新雪があればトリキリや鐵砲の一行が先き廻

りをする場合にも歩くに音が立たないし、且獸自身もぬかるために遠方へ走ることなく、足跡がくつきりと見えるのでマヘカタがその行方を探すのにも好都合である。足跡は實によくついて居るもので私等が五本槍のマヘカタミネへ登つた時にもその反對側の中ツルの中腹に羚羊の足跡がついて居た。

(以上、昭和二年七月別宮記)

○朝日鑛泉及登山小屋の事

朝日鑛泉は明治六年に發見されたもので、此が左澤附近の柴橋村大字平鹽にゐた古川吉次氏(古川屋當主房吉氏の父)の所有になつてから約五十年、浴客が來る様になつてから約四十年になるといふ。現在は此他に新湯と稱する鞠子豐次氏經營の小宿が一軒、古川政治氏の經營するものが一軒、都合三軒の宿屋がある。宮川久雄氏等が行かれた當時は穢い所で蚤が頗る多かつたさうだが、今では東京風(?)の座敷も建て増し大分設備もよくなり、衛生状態も改善された様である。但其丈夏は地方の浴客が押し寄せるので何處迄も清淨と靜寂を尊ぶ登山家には敬遠され勝ちである。此理

由かどうかは知らないが、昨年頃から山形高校の安齋氏等は鳥谷原に天幕を張り實費何十錢とかを取つて朝日連峯縦走者の便を圖つてたさうである。甚だ奇特な事であるが、其程登山者が多いなら官憲を動して山塊の各所に登山小屋を作り、天候不良の際の避難所及び積雪期登山の足溜りとしたいものである。私達の冬山に利用した朝日川二ツ股の小屋は積雪期以外の登山にも充分利用される。

○祝瓶山の事

佐藤榮太氏を案内として行つた古川房吉氏の話
を聞くと、其行は鳥谷原の泊場を朝立つて小朝日岳、大朝日岳、平岩山を經、途中一泊して豪い藪尾根を傳ひ、二日目の夜は祝瓶山の八九合目なる窟いづに泊つた。此山は上の方は非常に景色のいゝ所で、色々の草花が咲き、偃松もあり、殊に窟の泊りは面白かつた、山の下、野川の畔に小屋の部落があるが、絶頂附近から直接に下る事は出来ない、南へ尾根をつたひ、スナ澤といふのを下つて以後は長井に抜けたといふのである。五色温泉

あたりから見てもこの岩山はすぐに知れる。私達はま冬袖朝日岳から見た雪も積らぬ岩壁に鮮やかな印象を残してゐる。其峭壁を探る事は小さいながら中々容易ではなさうである。

○朝日岳の名所と神々

第一回の朝日行の歸り、日影で朝日鑛泉新湯の鞠子豊次氏の息子朝とよ七氏から朝日岳の山中殊に鳥谷原の御田附近には諸々の神様が沼や岩に宿つてゐられる事を聞いた。五六の例だけ聞いたに過ぎないが大變面白く思つた。然し現在朝日岳神社の假社務所になつてゐる鞠子氏方にも別に其記録はないので、其儘にして置いた所、第二回目の時古川政治氏が一番よく記憶してゐて分つてる分だけ教へて呉れた。其時の話に朝日岳神社は現在山形市宮町に住む里見千代松とかいふ人の父勉氏が開山の祖であるといふ事で、其人に問ひ合せれば判明するだらうとの事だつたが、未だに直接調べる機會に接しない。取敢ず政治氏の口傳へを左に録する事にする。

朝日岳の神 (括弧内の神名は編者の補ひたるもの)

神又は名所	實體	所在地
藥師神	岩	朝日鑛泉新湯の對岸
金山彦神	岩	同右
祓戸ノ神	瀧	キンヤマ澤
久々利シホリツ姫ノ神	瀧	菊理瀨織津姫)
八幡ノ神	瀧	同右
沼河姫ノ神	瀧	鳥谷原の神社の手前
水上シホリツ姫ノ神	瀧	同右神社の下の山
朝日嶽御廣前	祠	(鳥谷原の神社)
御井ノ神	沼	同右の附近
稻干場	沼	鳥谷原
大鳥ノ神	沼	稻干場附近
火結ノ神(迦具土ノ神)	沼	同右
月弓ノ神	沼	同右
御岐ノ神	沼	同右
大田ノ神	沼	同右
金山彦ノ神	沼	同右
天狗ノ腰掛松	木	鳥谷原山頂上
辰リ池	沼	小朝日岳の下(東)

雜 錄 ○太平山・寒風山及男鹿の木山

大國主ノ神 岩 小朝日岳の下(東)
 小朝日阿諏訪ノ神 祠 小朝日岳頂上
 熊越 (小朝日岳西方の鞍部)
 金玉水 水 大朝日岳にかゝる所
 朝日嶽神社 祠 大朝日岳絶頂下
 大朝日天照皇大神 祠 大朝日岳絶頂
 以上は奥羽號第一に載せる豫定であつたが、つ
 ひ手後れとなつたもので、雜話となしたものと調
 査不充分故大方の御叱正を希望する次第である。
 (以上、沼井記)

○太平山・寒風山及男鹿の
 本山
 沼井鐵太郎

比立内より岩見三内へ
 太平山にかゝる前に先づ私が旅した此山越えの
 話を緒としなければならぬ。
 大正九年八月末に玉川溪谷奥山の旅を終へた私
 は森吉山に登らうと思つたが、天候が思はしくな

一三五

いので中止し、北秋田郡阿仁銀山の奥なる荒瀬村比立内（大又川上流）に淋しい朝を迎えた後、鏝内澤國有林に入つて谷添ひに山越えの道を進り、河邊郡岩見三内村に出やうとした。此は五萬分一地形圖阿仁合及び太平山圖幅を見ると明かに里道となつてゐるもので距離は随分あるが、兎に角目的の太平山をして秋田市に行く最も近い山道である。宿屋で聞いた所に據ると近年全く人の通らない峠で或は越せないかも知れないといふのであつたが、少々山ずれのした氣安さ、それに心配して呉れる相手もない一人旅の氣儘から、一刻も早く山の縁に浸りたくて比立内澤の奥の方へ出かけて行つた。其は二十八日午前八時半の事である。

田の間を十町ばかり進んでから峽に入り細徑を辿つて行つたが、此小さな澤内は流も林も格利印象に残る風趣を示して呉れなかつた。天狗ノ又澤の落合ふ所あたりから道は怪しくなつて、源流の眞角澤の内をあちこち渡つて進んで行くと、一つの洞門の様な落合の所でとうとう道の行末が分らなくなつてしまつた。感じのよくなかつた比立内

の部落迄引返す氣は毛頭ないので、少し右の澤に入つてから尾根に取付いた。惡縁の藪行が始まる一度伐採した跡と見えて細かい木がやたらに生えてゐる。林相は何だかずつと南の暖國の様な感じがする。かうして何時間か立つてやつと郡境の尾根の上に出られた。見ると其處には相當立派な林道が通つてゐる。是れ幸ひと西に林道を下り、とある箇所折柄時雨、空を恨めしく眺めながら團飯一個丈を惜んで食べた。既に午後二時を廻つた頃で行先も覺束ない事とて用心して節食したのであつた。

林道を更に下ると一寸林の兀げた所に出て、何だか峠道の匂ひがする。尙少し附近を調べた擧句、どうも自分は其昔佐竹氏が鑛穴を掘つたといふ白子森山（一一七九・一米）の東なる八八九米の峯に取り付いたので、今居る所が峠でないとしても大して違ひはなさうなので、斷然南側の窪を下る事にする。林道を傳へばらくにはらくだが一體どこへ連れて行かれるか甚だ不安である。

道にはてんでぶつからない、暫く下ると其窪澤

け瀧になつて直降する事が出来ないので、右手に林中を分け、崩れ澤の下を危い思ひをしてさつき
の澤に出ると又瀧だ。今度は左手の急な尾根を木
につかまりながら下りて行くと、漸く赤倉澤の本
流の河床が見える。最後の下り場では運よく道の
跡らしいの出あひ、右手瀧壺の縁まで腐つて切
れさうな藤蔓にすがつて崖を下る事が出来た。小
徒渉をして右岸に渡り落合の稍々下手から赤倉澤
本流を渡つて左岸に出る。其處も道跡は定かでない
かつたので礫を傳つたり徒渉をしたりして行く。
やがて終日暗澹たりし空はすっかり暗くなつてし
まつて谷行は難しくなつた。止むを得ず礫の上、何
かの闊葉樹が斜に立つた下で野營する事にする。
流水の大きいのがないので焚火の骨折も終に無駄
になる。こんな事もあらうかと比立内で團飯の他
に買つて來た駄菓子のパンを嚙り、河水を飲んで
冷い夢路に入つた。夜中十五夜の月が照つて谷の
趣は好かつたが、木綿の寢袋一つにくるまり上衣
を下に敷いて木にかぶせたレインマントの下で縮
まつてゐる姿は、自分ながらみじめなものだつた。

火のない獨り寢の露營は明けて、二十九日の日
は幸ひに好晴だつた。朝食は取つて置ききの團飯一
つを嚙り、赤倉澤を下つて行つた。やがて大瀧又
澤が落ち、暫くすると鐵砲流しの堰が現れた。
堰に上ると左岸に小さいがよく踏めた道がついて
ゐる。ベ子の兎と此道をどん／＼急いだ。鐵砲流
しの堰はまだ下にも二つ三つある。日照が空腹に
こたへて、ろく／＼景色も心に留めなかつたが、
此谷は中々美しい谷であつた。太平山の脈は見え
なかつたが、築紫森山(三九一米)や岩谷山(三六
七米)等の小さな尖り山は形面白く疲れた脚を慰
めた。其對岸あたりからは最早人里臭く(然し其
時私にはなつかしく)なつて來た。太平山道と分
れて上三内に着いたのが正午であつた。此處で菓
子とサイダーにありつき一時間程休んでから、岩
見三内に行つた。二時頃其處の小野寺といふ商店
兼業の旅舎に入つた。事情を話して中食を頼むと
それは豪いといふので牛肉のすき焼に旨い秋田米
の飯を食べさせて呉れたのは何ともありがたい事
だつたが、二三泊して立つ時勘定に其中食丈つい

てゐないので問ひたゞすと「そんな物はどうでもいい」と取らなかつたのは又飽食にかけては有名な秋田人の氣質がうかがはれて面白い事だつた。

太平山

太平山ダイナンザンは秋田市の東北數里の箇所にある海拔一七〇・六米の絶頂を有する一名山である。他地方の人々には其名は珍しいかも知れぬが、山を背景にした秋田の生活には奥羽第一の靈山出羽富士の鳥海山の姿よりも忘れられないものである。

太平山は日本山嶽志三一乃至三二頁及四九八頁に記載がある。森吉火山群に屬するもので、別稱太平山ヒラ、秋田山アキタ、蛇峰ヲロコネ、古名三本ヶ嶽とあり、引用書日本名勝地誌によれば「太平山神社。太平山の頂上に在り、本殿には大名持命、少名彥命を合祀し、別殿には三吉靈神を祭り、社格は縣社なり、傳へて云ふ、白鳳二年四月、役の小角草創するところにして、延暦二十年、坂上田村麿の中興せし社なりと、舊名を三本ヶ嶽と云ひしが、佐竹義宣嘗て太平村源正寺に於て舊事を探りしより以來は

太平山と稱せり、秋田市より赤沼の太平山遙拜殿まで凡そ十八町許り、赤沼より頂上に抵る凡そ三里餘、神仙山・木曾吉山・劍ヶ嶽、弟子還等を経て神社に達す、其他に四路あり、皆三里餘にして、坂路甚だ峻なり云々」とある。

五萬分一地形圖太平山圖幅で見れば登る道は六つあつて、其内各々獨立して絶頂に至る道が三つである。私は大正九年の八月三十一日に、太平山南腹の炭坑(太平鑛山)を檢分に來てゐた日丸組の丸芳まるはら氏の一行と三人連で早朝岩見三内を出發し、南側の道から太平山の頂に登つて、それから同氏等と別れ弟子還、劍嶽、中嶽、前嶽を経て金山瀧きんたにに下り、木曾石を通つて赤沼から秋田市に入つた。大分の長道で秋田の宿に着いたのは夜の九時頃であつた。歩いた道も今は大分忘れてしまつたし又例の「土民測量」も餘りやらなかつたので山話は仕難いが、ざつと印象記其他を述べて見る。太平山の詳しい調査は秋田に居られる會員の方に是非願ひしたい希望である。

私達が登つた丸舞川流域からの道は、岩見三内

から一里半餘で丸舞川本谷と別れ、加護瀧澤について暫く溯り、以後は此澤と劔瀧のある澤との間の尾根を登つて行く。尾根の下手は一面の良質の無煙炭が埋藏されてゐるとかで、私は導かれて炭坑の一つに廻り道したりした。銅山などと違つて山の森林を左程荒してゐないのがよかつた。

尾根は大分急で、成程急峻で名だゝる太平山の更に急だといふ裏山路だと思つた。道は九四〇米の圏のあたりから尾根をはなれて澤を過り、頂上直南の短い尾根に出る様になつてゐるが、此の過る澤の一つ（頂上に近きもの）が有名なカヘラズノ澤である。昔から此澤に入ると澤山の瀧があるので生きて歸れないと稱せられてゐる太平山の魔所だ。若し頂上から下りて來ると一寸この澤を下つて急に左手に越すのであるが、此の道のつけ様は其自身たしかに魔所たる價值がある。澤といつても窟に過ぎないが、之を少しでも下れば、人は自然に路を失する様になる。最近でも死んだり迷つたりする人があるといふ。それで今は路が澤窟をはなれる所に立札をして「この澤を下れば死に

ます」と珍無類の注意書をしてある。

此のカヘラズノ澤へ明治維新の何年か前に入りこんで兎に角下降し、九死一生を得た向ふ見ずの冒険家が二人居る。其内の一人は私の母方の祖父で、當時の探險記といつたものゝ草稿が私の家に残つてゐる。何でも祖父は當時藩中の武士が遊惰の風に流れるを慨し、當時人の恐れて近付かなかつた太平山の裏山を探險して大に武道の精神を作興してやらうといふ豪い意氣込で、同僚一名を語らひ、秋田から旭川を溯る道を通つて太平山に登り岩見三内方面に下らうとした。所が恐らく現在も迷ふ箇所で樵徑を誤まつたものと見えて、澤を下れば下る程瀧は現れたが、血氣の二人は戻らうともせず跳び下りては進む程に終に日が暮れた、止むを得ずとある岩蔭にたしか秋の末の寒い一夜を過して次の日又苦心を重ね、高い瀧は大廻りをしたりして漸く山稼ぎの獵師に救はれた。何しろ大小を携へての悪場所如何に武道の嗜みありとはいへ随分無茶な冒険をやつたものである。尤も其血を受けた私なども岩山や峽谷で人が見れば危

くなくもない山遊びをしたがるのではあるが、昔と今とでは山の行方からして變つてゐる故、本統に深山だつた當時の行がどんなに難儀だつたか想像されるのである。

絶頂附近は灌木と草本だけで流石に高所らしい。頂上のお宮は屢々火災にあつたとかで新しいものだつたが、堂々たるものだ。面白い事にはこの神様の三吉様サキヤンは酒は元より煙草も好きの神様と見えて、大盃の外に長さ一間餘徑一尺位の大煙管タバコが奉納してある。此他石工の道具などもある。三吉様は即ち鑛山の神様で、土俗の傳ふる所によれば大分近代的の神であり、時折里へ酒買ひか何かに出て來られるが、恐ろしく大きいずんぐりしたお姿ださうだ。

絶頂から本道を下りるとぢきに弟子還かへりの險となる。一寸細い急な岩尾根であるが、大した事はない。其次の劔岳は別に尖つてもゐない木山だ。元は此尾根道は悪くて難儀だつたさうだが、今は道の作りもよく眠つても歩ける位だ。人夫をかへし一人になると積り積つた長旅の心の疲れて、道々

の觀察も詮議も怠り勝ちでどつとと急いだ。中岳は眺望の廣闊な所だつた。此本道には中岳と他にもう一二箇所休み茶屋があつたと記憶する。前岳から先平地迄は暑くて興味の少い道であつた。それから秋田迄の道も只長さに過ぎた。

寒風山

標高からいふと絶頂の藥師長根の三角點が、三百五十五米ばかりで、アルピニストの問題とするに足りないほんの丘だが、寒風カブツ火山帯の名を以て夙に有名な山である。(日本山嶽志三二乃至三三頁参照)。私は船川迄汽車で行く時并に男鹿の本山方面から望んだばかりで登らなかつたが、其の淋しい草生の丘の塊は何となくあてもなくさまよつて見たい思ひを抱かせた。

寒風山では昔大地震が起つた(本誌所載「秋田沿革史」に現れたる山岳資料参照)。

尚寒風山は最近秋田鑛山専門學校スキー部の山口龍輔氏が好スキー場なる事を發見されて以來、秋田地方のスキー家が滑りに出かける所となつ

た。雪量は少いが無樹の山故滑るには差支へなく、雪質は硬くて北海道の粉雪を思はせる。風の強いのと温泉のないのが残念であるが、山頂に佇んで俯瞰し得る男鹿半島の男性的景色と日本海の怒濤とは豪壯なるもの、極みであるといふ。(大正十三年十一月鐵道省編纂發行「スキーとスケート」五〇頁の記載より)。

本 山

男鹿半島の風光を賞美しに來る客は多いが、本山(七一六・一米)に登つて戸賀灣の風光迄瞰下しやうとする人は至つて少い。

私は大正九年九月初旬秋田市を去つて船川に泊り、先づ山道から本山に登つて後、門前から有名な丸木舟で名勝を探り、歸りは濱づたひに船川に歸らうと圖つた。

船川から増川に越える途中から船川港町、南磯村の境なる細道を傳つて丸森山(二二七米)に至りなほ四〇七米の地點を経て毛無山(六七三米)の東方迄到つたが、毛無山への上りは道がなく藪もひ

どいので、終に此日の登山は止めて双六川の小溪に添ふ道を下り、小濱に出て隣りの門前に行つて神主さんの家に泊めてもらつた。此日の道は前半は分りいゝ道でもなかつたが、流石本山の近くは樹林も残つてゐて一寸面白かつた。深い峽を溯り、緑濃い山々を歩いて來た山男には、低い丘から成る半島の兩側の海を眺める事も珍しい見物だつた。

門前から本山迄の往復は半日で充分に事足りる石段を上つて晴れやかな海を眺めつゝ、五社神社に詣でる。之から感じのいゝ山道に入つて、二時間とはかゝらずに毛無山を経て本山に登つてしまつた。たしか毛無山から戸賀灣の特徴ある噴火口灣が二つ三つ見えた。深い紺碧の色、その圓い形、海に浮ぶ舟は實に印象的であつた。毛無山の北は笹原になつて、本山はそれから稍々急な坂道の上りである。しんとした頂上の赤神社で、私は赤神は即ち關羽で、昔飛んで來たといふ傳説を思ひ浮べ、其は男鹿半島の地形と風光が形作るものとして無理ならぬ事だと考へたりした。眞山迄は行か

ないで往路を又戻る。そして濱から子供に操らして丸木舟を行る。珍しく濱が静かだったので、名勝も詳しく見る事が出来た。只海上から見て感じた事は、男鹿の美は畢竟するに海岸に露出せる火山岩の美で、この背景をなす丘陵一帯が昔ながらに樹木鬱蒼と茂つてゐたら一段と立派な景色だらうといふことである。海上遙か鳥海山の見えるのはうれしい事だつた。(日本山嶽志三三頁及四九九頁参照)。

男鹿の風景、本山及赤神社に關して書きたい事もあるが、材料も不足だし、又低い山や海岸の話で貴重な誌面を占領するのも勿體ないので、此で擱筆する事にする。(昭和二年三月稿)

○守屋山

高畑 棟材

數年前の正月、下諏訪のスケートリンクから、諏訪湖の南岸なる眞志野峠の後ろに、槍ヶ岳然

(?)と聳えてゐる守屋山(守屋嶽)の冬姿を望んで、いたく心を牽かれたが、其時は遂に登山の機会を逸したので、おとなしく歸京した。

後にこれが赤石山系に屬する死火山なることを知るに及んで、遊志再燃の折柄、今年の夏思はぬ小閑を得たので、唯一人欣然として出懸けた。然し殆ど終日の豪雨と、登山なかばの發病とに禍ひされ、守屋の絶頂に今一息といふ所から、惜しくも引返してしまつたこと故、山の様子を悉しく調べてみる邊が無かつた。随つて此記文も、頗る不備なものである事を豫め御断りして置く。

偕て此山に就ては、私は最初に日本山嶽志によつて、其大體を知る事が出来た。日本アルプス第四卷「甲州鋸嶽」の條を見ると、

杖突峠の北まで來ると、その西微北に、守屋山といふ小塊の火山が噴出してゐる、今は頂上に噴火口こそ認められないが、その圓錐形は、一見して直ぐ火山であることが知れる、さうして守屋山の噴出は、八ヶ嶽大火山彙の噴出と、同時代であらうといふ想像が、地質學者に依つて

容れられてあるが、要するに守屋山から以北は、土地が平夷して、中山道の往還になつて、諏訪湖で没せられて、山脈らしく無くなつてしまふのである。

と記されてゐる。なほ信濃寶典に、

山頂に物部守屋を祭れる神祠あり、而して物部氏の遺跡と稱するもの多し。

と出てゐるが、日本書紀第二十一卷を繙いてから間も無かつたので、その崇峻天皇紀の頭初を占めてゐる物部氏一族の滅亡前後の記事が、まざりと念頭に蘇つた。

守屋神社の本社は、南麓の上伊那郡藤澤村片倉に鎮座してゐる。南信伊那史料に據ると、

創立古くして詳ならずと雖往昔守屋大連の裔孫當地に來り蟄居し其子孫蕃殖（現今七十三戸ナリ）し姓を守屋と稱す又社地近傍に字古屋敷と稱する地名あり則ち數代居城の地にて字五輪原に古墳あり但寛保年間火災の爲め古記灰燼に歸し詳に知るを得ざるも山上に奥宮あり當社を里宮と稱して今に至れり。

とあるも、吉田氏の地名辭書は、

當時科野は建御名方命（ミコトナカタノミコ）に入るに先立土豪の雄なる者二人あり一を守宅神（モリノカミ）と稱し一を武居大伴主神と稱す共に命に敵して一敗地に塗れ降を乞ひて永く臣下に列す守屋神社は即ち此守宅神を祀るものなり南麓に華表あり題して物部守屋大連と云ふ其訓の相似たるに原くものか。

と載せてゐる故、孰れが正當なのか一寸判断に迷ふ。伊那郡誌は慥か「物部守屋とせるは里俗の附會せるものならん」と曰つてゐたかに記憶する。

諏訪、上伊那の二郡に跨り、諏訪盆地を隔て、龐大な霧ヶ峰と相對してゐる守屋山は、標高一六五〇・三米、大體は圓錐狀をなしてゐるが、元より樹林に恵まれてゐないので、山の浅い憾みがあるうへに、東京から往復するには、かなり多くの時間を要するためか、都人士からはとんと相手にされぬが、諏訪附近の人達の間には、霧ヶ峰と同じく、手頃な遊山地として、且つ山上展望の優れた山として、相等な人氣がある様だ。

左に私が遊行した折の事を記してみる。

八月二十二日の朝、茅野驛に下車して仰ぐと、暗雲低く垂罩めて天候頗る險惡、只纔かに杖突の峠路や守屋の山裾が、霧の中に淡く曳流れてゐるのを、眺め得るのみであつた。町を外れ、横内村附近で上川を渡り、宮川のほとりに出てから、蘆荻の生茂つてゐる川沿ひ道を拾ひ、聽て中洲村神宮寺の諏訪神社上社に着く。蓊々たる大樹の翠葉に掩はれた境内は、寂として聲なく、廻廊から拜殿へかけての有様は何となく神々しい。

參拜を終つてから、杖突峠への立派な縣道（杖突街道）を辿る。此道は高遠町や伊那町を経て權兵衛街道となり、駒ヶ岳山脈三十六峰の一つなる權兵衛峠を越えてから、間もなく木曾谷に入つて、中山道に合するのである。

右に西澤といふ小さな流を見送り、左に下馬澤を迎へて徐ろに爪先登り、聽て神宮寺や高部等の人家が足の下に隠れてしまふ頃、ふりかへつて見ると、諏訪の湖は明鏡の如く輝き、その右上には幅びろな霧ヶ峰附近。紫に明け易きといふ蓼科山のぼつくり高聳してゐる右下には、八ヶ岳の高原

一體が、暗い綠色を示してゐる。

道が左寄りに大きく曲ると、下馬澤は遂に二つに岐れ、右の小谷から來るのが本澤、左のが大入澤と名も改まる。俚稱「諏訪隠シ」から少しの間、左右の山のひらには、雜木乍らかなりの木立があるが、急坂「七曲り」に差懸ると共に、それも忽ち影を隠してしまふ。晴れた夏日には、全くうんざりする程の峠路であらう。峠の頂に近く、新しい馬頭觀世音の石碑が立つてゐる。臺石の上に重いリュックサックを投出して、ひと休みする。猛烈な雨の爲め眺望皆無。とかく歩き澁る兩脚を劬り乍ら少し行くと、諏訪、上伊那の郡界をなす杖突峠（一二四七米）の頂に出た。道の兩側に、低い、なだらかな草山を繞らせてゐる頂の附近は、厄病平といふ俚稱とは相反し、全く闊々とした、健康さうな平であつて、其なごやかな草原のところどころには、清冽な湧泉を湛へた小池が、二つ三つとかたまつてゐるので、キャムピングを試みたら無かし、と思はれるやうな處である。

殆ど平坦な道を行つて「峠」に到る。通稱「賽ノ河

「原」といはれてゐる處である。道を挟んで人家が二軒。道端の清泉で泥塗れの顔や手足を洗つてから、左側の守屋といふ家を訪れ、たつた一人で留守番の老婆に乞ふて熱い茶を貰ひ、早はひ午食といふことにした。

奥座敷の小窓から見下す藤澤川（三峰川の一支流）の、浅い明るい谷の斜面には、若々しい落葉松が整然と殖林されてゐる。

雨に氣を腐らせ乍らも、守屋の絶頂へ登りたい一心から、食後早々に辭去し、家の前の坂を少し下つてから右に折れて、落葉松の林に入り、細い流を二つ許り越えたと小徑（地圖に記號なし）が現れる。四周には幾抱へもある樹が簇々と立ち、草鞋の底に柔くあたる青黄い苔類の觸感も頗る快い。今になつてから漸く「山に來た」といふ歡びを享ける。然しそれもほんの束の間、小徑の導くが儘に左寄りに迂廻し、聽てアケエ澤といふのに沿つて急登しはじめると、また雨に濡れきつた夏草をがさ／＼やるのだ。徑は時々消えてしまふ、其度に叢を掻分けて徑を搜すので、却々手数が掛か

る。

こんなことなら、始めからおとなしく、諏訪上社の脇から鷲ノ巢、鳩峯、蝮山等を経て守屋山頂へ向ふか、或は杖突峠の頂から郡界の尾根（踏跡あり）を傳つて行くか、又は「古屋敷」の下から賽路に従ふかして、樂に登つた方が、より得策であつたらうにと、少々許り後悔の臍を噛む。

徑なき徑を辿り、沛然たる豪雨を冒しつゝ漸くにして、一六二〇米の圈を有する峯の一角に着いた時は、全身ヅブ濡れの惨めさ、加之車中の不眠が祟つたものか、齒の根も合はぬ程の惡寒發熱に襲はれたので、絶頂を直ぐ眼の前にし乍ら、急遽後退のやむなきに至つて了つた。

聽て守屋氏方に立戻り、服薬から濡れた物の乾燥やらに手間取つてゐるうち、宿の主人が里から歸つて來たので、挨拶もそこ／＼に、頂上の様子を訊いてみる。それによると、私の想像してゐた如く、山頂からの眺望は實に素晴らしいものであるといふ。又山頂の守屋奥社は正面を伊那郡へ向けて建てられて在つて、昔からの口碑に基き、夏

期早魃の際に、此社を蹴つくりかへせば、忽ち慈雨に恵まれること疑ひなしといふ。單に拍手禮拜だけの雨乞では何の效目も無いとは、甚だ以て手数の掛かる神様である。尙又山頂附近から細尾澤（其下流は私が遡つたアケエ澤である）中ノ澤、フナクボ澤、ブングイ（ビングイ？）澤などいふ小澤が流下してゐる由だが、主人の説明が不得要領なのか、私の訊ね方が下手なためか、發源流程等に關しては、遂に何も知る事が出来なかつた。

偕て下らぬ故障突發の爲め、殘る主要の旅程を放棄し、孤影悄然と歸京したが、諏訪温泉入浴の序に、一遊を試みるのもあつたら、殊更の登山仕度は全く不必要である。（大正十五年）

○赤久蠅山

黒田 初子

時日 大正十五年十一月。

「赤久蠅山」と云ふ名を地圖に見出した時、其の

變つた名は私の心に深い印象を與へた。頂上のおんびりとした草原は霜に焼けた頃の美しさを豫想せしめたので、十一月の末に出掛ける事にした。

赤久繩の東にある御荷鉾山は古來、名を知られて親しい友の紀行さへ讀んだ事があるが、其の奥の「赤久繩山」の話は未だ物の本にも見た事もなく、山の友達仲間にも行つて來た話はなかつた。

下仁田線富岡から乗合自動車に乗り、鑄川の支流の雄川にそつた小幡村で降りた時にも尙朝の冷氣は頬に氣持よく感じられた。初冬の晴れた空には遠い山がすがすがしく浮んで居た。

小幡村は富裕らしく、土藏の白壁が霜枯れた葉の残つてゐる桑畑の上に眼立つてゐた。行きがかりの村人に脊中のリュックサックを不思議さうに尋ねられれば、藤島さんはすかさず「不景氣で荷は一寸も減りません」と答へた。「何の商賣か」と問はれるまゝに黒田は「馬喰です」などと與太を飛ばす。馬喰のおかみさんになつたわけだと自分は一人後を向いて笑つて居た。

さうかうして雄川の谷とも別れて峠にかゝつ



杖 植 峠 の 北 望



星 尾 峠 の 山 風 及 浅 間 山 間 を 望 む
 (りよチッケスの氏夫正田黒)

た。峠は小峠と言って登りつめた處に物さびた祠があり、眼前には鮎川の谷が奥深く開けてゐた。傍らの一軒家で、旅商人と一緒に爐ばたで御辨當をたべた。一時と云ふので急いで腰をはたいて立ち上る。

落葉をふんでまばらな雑木林を一時間半程登ると寶祿牧場に出た。短い草に覆はれたゆるやかな傾斜を持った廣い原である。黒い土の上に小波の様に生えた霜枯れの草はふみ心地よく、斜にさす日光の影が美しい諧調と變化とを與へて居る。童話風な景色に何處かで角笛でも響きさうな氣がする。そこで草を枕にねころんで冬の陽を心ゆくばかり味はつた。牧場からは尾根續きに赤久繩の頂上に行く。尾根に出れば左に東西兩御荷鉾がよい具合に起伏し、前面には兩神山のぎざ／＼した岩石の後に、なつかしい秩父の山々が波打つてゐる。山の頂に居て遠山を貪る様な目を以て見渡す時、曾つて自分の歩いた山がどれ丈なつかしく目に入ることであらう。笛吹川を東澤から甲武信岳に登つた時、さては西澤の五淵七釜の縁を攀ぢて京ノ

澤の小屋に出た時の眞剣な氣持を一人で思ひ起して居た。金峰の五丈岩も見える。金峰によつて初めて山を知つた私は特別に此の山が好きである。頂上で雷にあつた時の恐しさも今は楽しい思出の内に數へられる。三人が思ひ思ひの氣持で暫くはじつと黙してゐた。友のバイブから淡紫色の煙が靜かに飛んで行く。三時頃立ちあがつた。冷い風が私共の足を早めさせるので長い尾根をどん／＼歩いていった。山の腹の林が繊細な美しさを見せてた時には急ぎながらも時々「きれいだ」と云ふ短い感嘆詞が誰の口からも、もれた。

尾根が終つて杖植峠に立つた時であつた。云ひ知れない喜びと感動に私共三人は思はず立止り坐つて了つた。前面の雲の中に紫に輝いた八ヶ岳が金色の後光に包まれてゐるではないか。私は佛様の御姿の様に思つて涙の出る程の有難さを感じた。三人とも黙々として只見つめて居た。

暮れ易いのは冬の日である。

カサコンとなる自分の足音と大空の星ばかりが私の意識の内にあつた。微かな音は反つて靜寂を

感ぜしめる。あまりの感激に友は鼻の奥の熱くなるを覺えたと後で言つてをられた。

下仁田の町の燈火が遠くにちらついてゐるのを見付けたのは七時頃であつた。

かうして冬枯の低い山の美しさやおとなしさを私は又無く好きである。誰も顧りみない低い山かも知れないが私はこんな處を又地圖で探してだまつて歩いて見たいと思つてゐる。

○石南に就いて

大 平 晟

シヤクナギに就いて、臺灣に於ける實驗を記し、御參案に供します。

新高登山西口、即ち嘉義より阿里山を経て、高山に登る途中、鹿林山（標高約八千尺）には、シヤクナギ巨樹の森林をなす所がある。其大なるものは、目通り幹圍六尺強を算し、眞に驚異に堪へぬのである。幹高約三丈、枝の擴がり七八間に及ぶ。葉は大形で、幅一寸餘、長四五寸。裏面淡

綠色を呈し、毛茸が無い。花淡紅色。上瓣内面に數十百の濃紅點がある。蕾は甚だ長く、内地普通のに比すれば、約二倍もあり、且つ先端著しく尖つてゐる。花は梢端に十個内外を簇生する。

後新高登山北口、即ち水裡坑より登る途中、東浦駐在所に於て、警部猪瀬幸助氏の談によれば、能高山の海拔七八千尺邊に、幹徑二尺以上のシヤクナギがあつて、碁盤を作つたとのことである。

新高山より南湖大山に向ふの途、マレット駐在所に於て、警部補佐塚愛祐氏（蕃地在住十八年）によれば、合歡山の支脈櫻ヶ峰の七八千尺邊に、幹徑三尺餘のものがあつて、下部で火鉢を作り、上部を床柱に用ひたとのことである。又白狗大山にも、七八千尺邊に、幹徑二尺以上のものを、所々で認めたとのことである。

阿里山より新高山に登る途、所謂西山の嶮（約一萬尺）と稱される急斜面の岩壁に密生するシヤクナギは、高度の關係上矮縮して、概ね高は三四尺を超えず、而かも樹齡幾百年、古色蒼然たる趣がある。葉も小形で、鈍頭卵形、幅六七分、長二

寸許、裏面は矢張り淡綠色で毛茸が無い。
 新高山頂上附近のは、更に矮縮匍匐し、葉裏褐色毛茸を有するものもあるが、淡綠色無毛のもある。

南湖大山八九合目邊には、ニヒタカビヤクシンに伍して、シャクナギ夥しく、葉裏は殆ど皆褐色毛茸を有するものであるが、頂上に近づくに従ひ、無毛淡綠色のを混じり、絶頂は、殆ど皆無毛淡綠色のものとなり、葉は甚だ小形で厚く、稍々裏面に反卷する。蕾も頗る短縮して、殆ど楕圓形であるが、内地高山産のそれに比すれば、幾分先端が尖つてゐる。三月末、四月上旬に於ける、前記二山の頂上に産するシャクナギは、蕾尙堅かつたが之を解剖するに花瓣の紅色であるのが窺はれた。臺灣一萬尺以上の高度に産するのは、皆紅色であるが、濃淡種々の差はあるとのことである。花期は五月であると云はれる。

臺灣山岳には、キバナシャクナギは無いが、シロバナシャクナギに就いては、頗る異説がある。臺北植物園主任佐々木舜一氏によれば、紅花に

濃淡の差があつて、其甚だしく淡いものは、殆ど白花の様に見えるが、純粹の白花、即ち内地のシロバナシャクナギは無いとのことである。

予は臺灣山地到る處、之を質したのであるが、平岩山駐在所警部補川西常吉氏(蕃地在任十八年)によれば、北部山地では、所々にシロバナシャクナギを見るところで、予が爲めに特に其産地の經驗を有する巡查宮原理平氏を案内に付された。其産地は、ビヤナン鞍部の付近海拔六千尺の邊である。成る程花は純白であるが、上瓣内面に夥多の紅點がある。蕾は甚だ長く尖り、葉は細長く三四寸位、裏面白色の毛茸を有し、若芽は著しく紅色を帯び、全く内地のシロバナシャクナギとは別種である。この白花のに伍して、紅花のもあつたが、葉裏は淡綠色であつた。後南湖大山に登る時、標高六千尺邊、所々紅花に伍して、白花のを見た。上瓣内面に紅點あることは、前記のと同じだが、葉裏は淡綠色無毛である。

總督府營林所員によれば、南湖大山の支脈太平山(約六千尺)には、純白のものがあつて、上瓣

内面には紅點では無くて、綠點があるとのことで、予は更に精査を依頼して來たのだが、まだ其報告に接せぬを遺憾とする。

要するに、臺灣産のシヤクナギは、一萬尺邊より以上は紅花で、葉裏は淡綠色無毛のと褐色有毛のがある。六千尺邊には、紅花に伍して、白花も見えるが、其白花のは、葉裏淡綠色の外に、著しき銀白色のを見るは珍奇である。樹幹の最も巨大なものを産するは、七八千尺邊で、此種のもものは葉裏皆淡綠色である。(終) (昭和三年六月八日)

雜 報

○秩父宮殿下名譽會員を御受諾

【ロンドン聯合二日發】英國第一流の登山家連をもつて組織するアルパインクラブの幹事會は、さきに秩父宮殿下を同クラブ名譽會員に推戴したが、殿下には快くこの推戴を御受諾遊ばされたので、いよいよ正式に名譽會員となられた。幹事會のこの推舉については同クラブの會員は、英國登山家の日本の登山家に對する友情の表現としていづれも心から賛成してゐる。(昭和三年五月三日東京朝日新聞)

○ウエツテルホルン西尾根の初登攀

【ジュネエーヴ合同電通二十六日發】日本山岳家浦松佐美太郎氏はブラワンドおよびストイリの兩案内者と共に、ウエツテルホルン西山稜登攀を試み、アルプス連峰中の最險難として、以來絶望視されてゐた難所を首尾よく征服し、さきにアイガーの難路を開拓して勇名をうたはれた横有恒氏と相並んで、歴史的成功者との名聲を獲得した。

右の報導について横有恒氏は語る「それは素晴らしい大成功です、ウエツテルホルン西山稜といへば今まで全く登攀不可能と觀られてた所なのです、浦松君は昨年の夏松方三郎君と共に右難所

の征服を企て成功に至らなかつたのですが、今年更に慎重に準備を整へ、丁度雪が消え氷が解けた好機を見計らつて再攀を計り、見事この歴史的壯舉を成就したものと見えす」(八月二十八日東京朝日新聞)

○邦人のロッキ登山

【バンクーバー特派員二十五日發】日本山岳家北田正三氏は山岳旅行を終へて二十三日夜シヤトルからバンクーバーに到着、ロンドン丸の出帆を待つて居るが、二十四日朝記者を迎へて語ると、こゝろによれば、同氏は七月二十一日より三日間て處女峰キャンプ山を征服し、八月六日シヤトルへ赴き、レイニアアおよびペーカーの兩山にも登つた、キャンプ山は一萬千六百フィートの高峰で、カナダ・エドモントンのウォータース、スコツトランドのペーカー教授、スキスの案内者エドワード氏等と共に征服したもので、無名の山だつたのを特に北田氏の名譽のために同氏の頭文字をとリ、マウント・キャンプと命名した、山は古生代の片麻岩で絹絲を列べたやうに見え、頂上は零下六度の寒さで、山の南側には何もないが北側は幅六哩長さ二十四哩といふ大氷河が青光りに光り壯觀を極めてゐる。一種の夏期大學で世界各地の山岳家鑛物學者地理學者の講演が行はれ、夜は原始的な森林中で火をたいてダンスをするといふ有様、北田氏も日本の山岳について講演したが特に「ジャパン・デー」の催しませて歓迎されたといふ。

カナザアン・ロッキには一萬尺以上の處女峰が六百餘もあり、氷河の廣さはどの位かわからない有様で、スケールの大きさは矢

張り世界一。カナナアン・ロッキーを見て特に感じた點は氷河の大と森林の美、たぬき、山羊などの野獸の多いことである。氷河上に住む熊も他では見られないものだ。學術的に非常な興味のあることは鐵石の豊富にあることで、ダイヤモンド鑽たる第三期の岩石が到るところで發見される。日本の高山と同じ草花が種々ある。氷河の美しくしきはスキスなどはおよばない、山火事の大きさにも驚ろかされた。北田氏は今回の成功の結果カナナアン・アルバイン・クラブの名譽會員に加へられ、カナダ行の費用全部付のメダルを贈られた。(八月二十七日東京朝日新聞)

○珍しい存在

【札幌發】北大の松村松年博士大雪山の昆蟲調査の結果、前年雪の上を飛び交ふ薄羽黄蝶、高山夜蛾等を發見、薄羽黄蝶は北極、チベット、アムール、バイカル地方だけに棲む變り種、天然記念物の請願をする。

【仙臺發】東北帝大の高山植物研究所を設置することとなつた青森縣八甲田山で珍しい青蛙を發見、天然記念物に指定されることになつた、大きさは六寸四方以上、木の上に卵を産み、卵は樹上でおたまじやくしとなつて成長するといふ風變りなものである。(七月十三日東京日日新聞)

○クラカトア島陥没

【バタウィヤ聯合十四日發】蘭領インドのジャヴァとスマトラとの間を流るゝスンダ海峽の火山島クラカトア島に一晝夜七千回餘

にわたる大噴火あり、これに次ぐ蘭領インド各地に地震起り被害甚大を極めてゐる、クラカトア島は今やほとんど跡形なく海中に没し、あたり一帯は海水煮えくりかへつて高く水柱をふきあげ、高きは千三百フィート餘に達し、ものすごい光景を呈してゐる。同島は去る三月二十七日から連續的に海中噴火してゐたもので、有名な火山島のため無人である。右について今村明恒博士は語る。

『同島は今から四十五年前、一八八三年八月二十七日大爆發をした有名な火山島で、その時には島が三分の二海中に陥没し、この爆發のため世界中に津波が起り、このため起つた大氣の波が地球を七度回りました、また爆發した灰は數ヶ月間も世界中の大氣へ巻き散らされ、このため太陽は眞赤に見えました、私も子供の時分その記憶があります。來年の五月バタウィアで太平洋學術會議が催されますが、その前に會員が同島を見學旅行することになつてゐました、火山の爆發は地震と違つて局部的です、すなはち日本には影響ありません』(東京朝日新聞)

○故志賀氏の碑

我が地理學界の功績者、故志賀重昂氏の墓碑は、世界各國の地理學協會からの寄贈になる奇岩珍石を蒐めて建立する計畫で、著者準備を進めて居たが、二日英國地理學會寄贈の目覚めるばかりの珍石が到着した、尙近く横濱に入港の便船で到來する南米ブラジル地理學會の寄贈にかゝるものも珍石である。(東京朝日新聞)

○富士山麓に研究所

【御殿場發】富士山における高層氣流並に雲の運動状態について研究を遂ぐるため理學士阿部正直氏(東京本郷在住)は、七月以來自費を投じ御殿場在富士岡村沼田に觀測研究所を設計新築中であつたが、この程出來上つたので、二十一日助手二名を伴ひ御殿場着、直ちに實際觀測の準備に取かゝつた。雲の浮動状態については特に寫眞を撮影し研究資料に用ふると、さきに富士山頂上觀測所が太陽熱研究所として鈴木氏から文部省に寄付され、中央氣象臺所屬として近く内容設備を整へる事になつてなり、阿部研究所の設立によつて富士山を中心とする高層氣象の研究は益々學界の注目と期待を受ける事になつた。(十一月二十三日東京日日新聞)

○大島氏の死體發見

【松本電話】北アルプス前穂高北尾根の魔の第四ヒーク征服中三月二十四日潤澤谷に墜落行方不明となつた大島亮吉氏の死體捜査は、前後數回にわたり行はれたが丈餘に達する積雪のため發掘不能で、現場付近の岩小屋に監視人夫を置いて捜査隊は引揚げたが、一日現場監視の人夫内野常次郎が潤澤谷を捜査中降雨のため雪とけの岩小屋から六町の谷間に登山服を着けたまふ惨死してゐる大島氏を發見した。急報によつて慶應山岳部の早川種三氏外四君は、三日午前七時松本着直に十時二十五分發電車で島々から現場に登山し直に死體を收容することになつた、尙檢視のため豊科警員は現場に登山した。

よろこぶ搜索本部

大島亮吉氏の死體發見の報は一日午後七時日本橋木屋漆器店の搜索本部に到着したので、慶應山岳部の先輩早川種三、豊部園臣の兩氏は同夜十時の汽車で上高地にむけて出發したが、搜索本部では語る。

『必死の搜索も其效無く涙をのんで引き揚げたのは四月上旬でした、其後は例の上高地の主といはれる案内人の常さんに時々見回つてくれと依頼しておいたのです、我々は雪が解ければ死體が流出すだらうと豫想してゐたので、この豫想が當つたものに相違ない、大島氏の御兩親も非常に喜んでゐられますが、御病身なので現場へゆかれません。(六月二日東京朝日新聞)』

○早大遭難者發見

【松本電話】北アルプス針ノ木峠で遭難埋没されてゐる早大山岳部員四名の死體發掘作業は同大學山岳部員の手で續けられてゐるが、五日午後五時頃遭難現場から二百五十メートル下の籠川本流に設備した死體流失防止の金網を張る上方三十數間の箇所を掘返すと、丈餘の雪底に見るも無残な遭難者の一人を發見した。死體は防寒帽子を冠リスキーを穿いたまふだがスキーは滅茶々に破壊され、死體は地熱のため腐敗し一見何人とも識別出來なかつたが、着衣により第一高等學院理科三年生長野縣下伊那郡松尾村出身關七郎(二三)君と判明した。發掘隊一行は六日午前九時半人夫を大町下山口まで下山せしめ各方面に發見の電報を打つたが、關君の

遺族はかかれてから死體のまゝ告別したいと熱望してゐたので、遺族の登山するまで死體は現場に安置し、告別の上だに付する。尙發掘隊はこれに勢ひを得て六日も引續き作業を續けて居るが今日中には他の三君の死體も發掘される模様である。(六月七日)

【大町特電】北アルプス針ノ木峠で遭難埋没された早大山岳部員の内山本家村兩君の死體發掘は、十日早大山岳部員八夫三十名が一生懸命に發掘作業を進めてゐた所、十日午後四時三十四分上原君が発見された所から五メートル左の本流に右足を雪解のため露出して居る山本君を河津山岳部員が発見した。(六月十一日)

【松本電話】北アルプス針ノ木峠の遭難早大生四名のうち最後に殘されてゐた早大理科一年生京都市八條新町東入ル出身家村貞治(二二)君の埋没死體は、二十五日午前六時近藤リーダーの埋没地點より七間下の箇所に出して居るのを捜索隊が発見した。(六月二十六日)(以上東京朝日新聞)

○山の慘事

成城高校生の遭難

【松本電話】東京成城高等學校山岳部員小池孝(一八)及び東京市外西巢鴨町宮仲住友銀行員伊勢環(三二)の兩名は、十六日上高地を出發槍ヶ岳を究め同夜殺生小屋に一泊し、十七日朝尾根傳ひに燕岳に向ふ途中同日午後三時頃大天井岳で大暴風雨に遭遇し進行不可能となつたので、折柄中房口から燕(登山の途にあつた名古屋市中區伊藤吳服店員土谷俊雄(二一)及び同區榮町吳服商伊藤鏡吉(三二)の兩名も共に大天井で露營したが、同夜降りしきつた雨

と寒氣のため一行四名のうち小池君は十八日朝終に凍死し、外三名も半死の状態に陥り救を求めてゐるのを同日午前十時頃通過した登山者が發見救護隊を組織して一行を燕小屋へ收容手當中である、生存者三名も凍傷を負つてゐるが生命には別條ないらしい。

山の犠牲となつた小池孝君は外務省政務局長から後久原の總務理事に轉じた故小池張造氏の三男で長兄の現戸主忠一氏は現に三菱銀行本店證券課に勤務してゐる、遭難の報を齎して市外馬込町平張一二六九の自宅を訪へば家人は語る。

『孝は男五人女二人の七人兄弟の三番目で成城學園の中學部から今年高等部に入り、快活な子で學校の成績も良く運動が好きで現に蹴球の選手をしてゐました、毎年登山をしてゐましたが今年も義兄に當る伊勢環と共に去る十四日午後十時東京縣を出發したのですが夏服を着て防寒具としてはジャケツ一枚と食料のカン詰を持って行きましたが、やはり防寒具が足りなかつたのでせう、又環の方は慶大時代には山岳部員をしてゐる年もいつてゐるので助かつたのでせう、出發直前に寫眞をうつしたのが今はかたみとなりました。

尙遭難の報に接するや長兄忠一、次兄新二、従弟安田峻の三氏及び伊勢氏の家人等は十八日午後十時東京發の列車で現場に急行した。(七月十九日)

府立商業生遭難

【長野電話】東京市神田區猿樂町二二府立第一商業學校四年生福室順之輔(一七)は、同校教諭府下高井戸町大宮二九一、石井元氏

と七月二十五日から上高地中之せきにキャムピングを營み、一日午前七時三十分槍ヶ岳登山のため出發し、一ノ俣の三、四丁下流で梓川の一本橋を渡る際、踏みはずして順之輪が墜落したので、石井氏も救助のために飛込んだが連日の雨で増水した。激流に吞まれ兩人共溺死した。

教諭生徒遭難の悲報に接した府立第一商業學校では羽田校長を始め職員參集して善後策を講ずる一方取敢ず久我教諭を一日夜十一時十分飯田町發の列車で上高地に急行せしめた。羽田校長は語る。

『本校山岳部が上高地で十日間のキャムピングをいとむべく出發したのは七月二十五日の事。富士川教諭が主任となり石井、池野兩教諭および卒業生三名が付添ひ生徒四十五名で槍ヶ岳の高峰を征服する豫定とした。遭難した石井教諭は山岳部の地理の先生で日頃生徒の氣受けも大變い、良教師です。また福室君も成績の優良な生徒で、今不慮の報知を得て我々一同哀惜に堪へません』(八月二日)

その日の遭難状況について山岳部主任富士川教諭は同僚石井教諭の遺骨をかへつゝ聲をうるませて語る。

『東京を去る七月二十五日に出發しまづ穂高と燒を征服して一日には槍の頂上をきはむべく一同かひなく上高地中ノ關を出發し、一ノ俣小屋に差懸つたのは午後一時頃でしたがそこで少憩の上更に前進すべく前行部隊が小屋前の三本丸太の橋を渡らうとする時福室君が橋の反動で踏み外して梓川に墜落したのでした、この騒ぎに小屋を發たうとしてゐた石井君と私はス

ワと許りにかけだし石井君は直に流れに飛び込み私は流に沿つて走りました。丁度雪溶けの水で水嵩が増してゐたので奔下する濁流はまづ福室君を次で石井君のみ込み再び二人の姿を見る事が出来なくなつたのです。我々一同は二人の捜査に全力を盡しました結果夕刻に至つて漸くはるか下流で二人の亡骸を發見し、夜を徹して總がかりで上高地に運んだのです。この頃のあの邊の水は氷のやうで浸れば心臓麻痺をおこす程の冷さであるのに石井君が敢然飛込んだのは一に生徒を救はんとするの責任感からで誠に立派な殉職だと思ひます。一方かうした不祥事を引起した事に對して私は慚愧に堪へません。(八月五日)

日 大 生 遭 難

【松本電話】日本大學山岳部幹事商科學生神田駿河臺高橋俊夫、同山岳部幹事商科學生高築文雄の兩名は三十一日北アルプスの下黒部の祖母谷温泉を出發、白馬、鑓を登攀中猛烈な暴風雨に襲はれて兩人相離れ困難に陥つて居るのを通りかゝつた松本中學山岳部員三名が案内人高橋典兵衛と共に高橋俊夫を救助し、白馬温泉へ引あげて高築の到着を待つたが、遂に到着しないので高橋は案内人高橋と共に搜索に出たが暴風雨のため搜索不能となり、一日朝登山口四家に急を報じたので四家では案内人三名が一日朝搜索に出かけた。(八月二日)

【松本電話】北アルプス白馬ヤリて暴風雨に襲はれて遭難五日間に亘り消息を斷つてゐた日本大學商科學生東京市神田區駿河臺高橋俊夫、同山岳部幹事高築文雄兩氏の行方捜査のため、四日午前

六時高築氏の近親者一行から成る第二班の搜索隊は白馬岳に向けて大町を出發したが同日午後一時半一行が白馬山頂から富山縣側に面した急斜面のはひ松の中を捜査中遭難者の一人高築文雄氏が凍死體となつて引つかかつてゐるのを發見した旨同日午前九時大町署に報告が着いた、今五日富山縣側又は長野縣側で檢視をなし山中で火葬に付し遺骨は六日早朝下山する豫定である。(八月五日)

遭難 二件

【松本電話】北アルプス針ノ木で行方不明となつた長野縣立松本中學校五年生喜多村忠雄(一九)は北葛深で凍死して居るのを二日午前搜索隊が發見した。尙中央アルプス西駒ヶ岳で遭難した東京府下大井町居住東京小倉石油會社員鈴木文治郎(三九)、長野縣西筑摩郡日義村原田四郎(二六)の一行救護のため一日朝五時上伊那郡赤穂口から登山した上伊那山岳會員は下山豫定の二日午後八時に至るも歸來せず情報を絶つたので憂慮されてゐるが、原田君は凍傷で重態だつたので死亡してゐるものと判られてゐる。(八月三日)

強力慘死

【松本電話】東京市深川區富川町一八、玩具商藤野政治(二三)、淺草區須賀町店員井上義勝(二三)の兩名は長野縣北安曇郡北城村高橋宗吉(三五)を案内人として去る二十三日出發白馬の頂上を極め、五龍山脈を縦走中二十六日正午頃ロープを頼りに八峰を下る

時、崖崩れの音に驚き案内人高橋はロープの手を放し數十丈の斷崖に墜落慘死した、残る兩名は案内人を失つた上暴風雨に會ひ山中を迷つた揚句半死半生の態で二十九日夜十一時半頃漸く大町に下山し大町署に届出た。(八月三十一日)

甲武信ヶ岳で遭難

【甲府電話】横濱電話局員同市富士見町一一二、茅根一(二四)、同細金團次郎の兩名は去る三日同僚の早水貞吉、青木彌太郎の兩名と共に甲武信、破風踏破の目的で山梨縣東山梨郡三富村市川林業會社事務所に一泊、四日甲武信ヶ岳を征服し頂上に泊り、五日破風に向ふ途中早水が足を痛め青木は同人を看護して下山したが茅根、細金の兩人は六日下山する豫定の所いまだに消息不明なので、家人や三富村青年團、消防組等出動、以來大捜査を行つてゐたものが遂に發見するを得ず、二十一日まづ捜査を打切り引揚げたが、甲武信と破風の中間に大山くづれありそくて遭難したもののらしい。(十月)

國師岳で死體發見

【長野電話】十二日午前國師岳に登山した京大學生細野重雄外一名は、海拔二千三百メートルの川上村三角點から北方の松林を通行中リュックサックを枕に防水マントをかぶつた男の死體を發見、同村駐在所に届出たので臼田署から保官十三日夜現場に急行した。(十月)(以上東京朝日新聞)

○會員通信

△前略。去る三月十七日上野發、宇奈月温泉に二泊試験後の休養をなし、富山より途中二泊して飛騨中尾に參り、二十四日中崎小舎より穴毛谷を通り笠ヶ岳を往復致しました。それより右俣谷を登り槍平室堂に三泊、槍へ登る豫定をなりましたが激しい風雪に會ひ断念して粉雪の槍澤を下り、一俣小舎、上高地を経て四月一日歸京致しました。(角田吉夫)

△拜啓。小生去る三月三十一日正午新宿驛發日原に至り翌四月一日天氣思はしからず候へば目的の長澤谷を一日延ばし小川(大日谷)大川(日原川)の出合より大川に沿ひカジカ瀧を見、大川と別れて右に孫曾谷を十兵衛小屋下邊まで廻り候。カジカ瀧は雌雄二段に飛瀉し小川の大瀧と相似たる處有之候も谷道らざる爲前者程幽邃の感無之候。

孫曾谷は大川との出合より上、燕岩附近が最も惡場なる由にてセツチン(雪隠?)場の瀧の外二三無名の小瀧有之倒木多く勾配もかなり急に有之候。十兵衛小屋附近は數日前の降雪の爲約二尺程有之梯子坂邊は如何かと案じながら夕頃日原へ歸宅仕候。

二日、はつきりせざるもいくらか薄日さし候へば山崎憲一、黒澤峯吉の兩人を連れ八時四十五分出發。十兵衛小屋へは十時四十分、この邊より水松谷とイヤゴヤ澤の落合ふ處迄は雪殊に深く雪崩の谷を埋めし箇所も有之、意外に時間を費し申候。梯子坂(白石神社一七二三、二△より北へ二ツ目の一五八〇のクビレ)へは三時

三十分積雪六尺餘。眺望は僅かに去來する雲間に長澤ノ峯と芋木ノトツケを見るのみにて雲取から巖巢へかけての山頂は何れも一抹の密雲に閉ざされ居り天候次第に惡く相成候へば直に長澤谷上流の岩茸谷小屋へ一氣に下り申候、五時小屋到着。小屋の中は雪融の水厚く凍り焚火の爲流れ出し床を作るなど燃料も雪深き爲察の外時間を費して得る處少なく寒さに震へて一夜を明かし申候。

三日、心配せし天候は遂に未明より雪となり夜全く明けたるも歇みさうにも無之候へば九時出發長澤谷を下り申候、谷はかなり瀧多くなかゝ立派なるもの少なからず候。惡場は岩茸谷出合よりナギノ谷邊迄にて、その間へずり徒渉等多く、又夏なればとても通行不可なるところも雪や雪崩の爲思はぬ樂をする箇所も度々有之候ひき。下るにつれ雪は雨と變じ強力等は雪崩の起るを恐れ谷半ばにして尾根上を辿ることを主張致し候も断然谷を下ることにし午後四時大雲取谷出合の燒ノ原小屋へ到着、若茸谷小屋よりこゝ迄約二里弱に有之、小屋は相當に大きく、殊に南向に候へば割合に温く日原川流域の小屋としては唐松谷の小屋に次ぐ優秀なるものに有之候。其夜は御幣餅に空腹を満し申候。夜半雨雪と變り申候。

四日、午前六時出發夜來の雨やみ八時頃久し振りにて輝かしき日光に浴し候、百舌四十雀の囀る音に昨日迄の冬はどこへやら深山にも春といふ感を深め申候。麩て天祖山表參道と合し孫曾谷を渡り十一時日原へ歸着仕候。(四月二十三日長谷川長次郎)

△拜啓。小生今年は何處にも行かず脾肉の嘆に堪えざりしが遂に我慢も出來ず古川政治を案内としてかれて希望の春の朝日連峯を

跋渉仕候。二十四日夜行にて出發好天氣の爲めその日の夕方朝日
 鏡泉着久し振りにて突兀たる雪の連峯に接し氣をよく致候。翌日
 天氣にて鳥谷原小朝日行に致しキンヤマ澤附近よりはスキーにて
 登り、小朝日附近迄十分滑走する事を得て愉快に候。その日は鳥
 谷原神社泊。二十七日は曇天なるため附近にてスキー練習、二十
 八日は快晴に恵まれ早發して小朝日、大朝日、西朝日迄參りて戻
 り鏡泉に下り候が眺望もよく全く幸ある旅と思ひ候。特に大朝日
 の頂上にては前年の壯烈の事も想出され感慨無量に御座候。二十
 九日(曇午後豪雨)午前中は熊狩見學午後は鏡泉にて雜談。三十
 日も快晴六時發にて御影森(九時)これよりスキーを樂しみなが
 ら平岩山(十一時)より大玉山(一時)途中にて荷をおき祝瓶山
 (三時半)にて多年の宿望を達せられよい氣持に下り八時木地山に
 泊る。翌日は普通の路を辿り山麓地方の新緑と櫻花爛熳たるを見
 ながら長井驛發の夜行にて無事歸宅仕候が今度は天氣もよく雪
 もよく全く愉快の旅をなし得て非常に心地よく感じ候。(五月五日
 岩永信雄)

△前略。今度宿望の春の笠ヶ嶽に漸く登る事が出来ました。三月
 二十日に富山より入り二十三日笹島から笠谷に入り岩小舎泊、二
 十四日笠にスキーで登り、二十五日は天氣が變つた爲笠の西尾根
 の鞍部を越してコクラ谷の岩小舎泊、二十六日は降雪で滞在、二
 十七日コクラ谷より再び笠に登りそれより抜戸を廻つて穴毛をス
 キーで滑降致しました。穴毛は瀧の處だけスキーを脱いだ丈でし
 た。その日は中尾运行つて泊り再び食糧を整へて中崎の營林署の
 小舎に泊り、二十九日貝掘・小鍋間の尾根より西穂高に登り、三十

日は槍平、三十一日は滞在、四月一日槍平より槍に登り(穂は登
 り一時間四十五分)一ノ俣泊り、それより上高地をへて四月松本
 に出ました、何だか新聞で變な事書かれて大分閉口しました。
 寫真も少しありますが何れ拜眉の節御目に懸ます。(四月九日田
 中菅雄)

△前略。小生去る四月二十二日上野發夜行にて、會員四川國彦君
 同行、雪の野反池に遊び白砂山及び大高山にスキー登山を試みま
 した。日程は下の通り。

二十三日(吹雪)草津泊。二十四日(吹雪)花敷泊、(積雪約
 三尺)二十五日(快晴)花敷―根廣―辨天山―野反池幕營(約
 八時間を要す)、二十六日(快晴)白砂山往復(約十時間)二
 十七日(快晴)滞在スキー練習 二十八日(快晴)大高山往復(約
 八時間)二十九日(晴)野反池―花敷―暮坂峠幕營。三十日
 (晴)暮坂峠―中之條―歸京。

五十年振りとかいふ珍らしい晩春の大雪に恵まれ面白くスキー
 が使用出来ました。すべてが豫想外の長時間を要しましたのは新
 雪が深く落込んだ爲です。白砂山の登路は八十三山の南西のハン
 ノ木澤(?)を廻り、八十三山の南面を絡んで登り、白砂山頂上
 近く迄スキーを使用いたしました。(五月三日角田吉夫)

△前略。左に西谷山行の大略をお知らせします。

第一日(五月二十六日)二俣尾―御岳―上坂―氷川―日原。第
 二日(五月二十七日)日原―天目峰―籾―西谷山―大久保谷―
 寄國土―影森―熊谷―歸京。

日原の上から瀧ノ入峰に至る邊は一面の若緑に覆はれてゐまし

た。藪もスク／＼延びて居りました。藪の南方に小舎がありました。なほ、藪より西北に走る尾根の第二の鞍部及び、西谷山の東の鞍部にも小屋があります。共に茅をとる小屋です。歸途は電車の時間の都合で大久保へ下りました。道は一六六〇米突の突起の右を登き北東に尾根の上を走つてゐます。途中消えた所もありませんが、間違ふ程の事はありません。途中立派な歩道とクロスする所がありますが此處で歩道の方へ引き入れられさへしなければ一時間ばかりで(尾根上の小屋から)炭焼小屋に達します。この小屋の少し下からは大久保谷に沿つて車の通る道が附いて居ます。寄國土の部落への入口たるスイジン橋までは炭焼小屋から一時間二十分位の努力です。當日は曇つてゐたため心ゆくまでの眺望は得られませんでした。新緑の時節は過ぎてゐたかも知れませんが大日谷の若緑は大變に美しく思はれました。(昭和三年五月二十九日幸川稔一)

△前略。五月三十一日よりの四阿山行の大略を御報告いたしました。小諸より新鹿澤までは一ノ城戸平、三方ヶ峰等を経る道に依りました。糠池の東方より一ノ城戸平に至るまでの道は東斜面の唐松林と四方の闊葉樹の森との間を走る尾根の切開道です。一ノ城戸平以上は一面に若い唐松の若緑です。特筆したいのは途中素晴らしい清水のある事で約千九百二十米の等高線の近くと思ひます。三方ヶ峰に着いた頃から雨となり三方ヶ峰の東方の熊笹の原では道を失ひ意外の時間を取られてしまひました。地藏峠に至る道と境界線と一所になる附近から途中千九百二十米の邊まで車の通る立派な道があり北方に向つて澤を下つてゐます。二日は雨の

ため一日新鹿澤に滞在しました。三日はいよ／＼四阿山に向ひました。温泉より直接古永井に向ひました。古永井は寂しい部落です。直に西に長野街道をとり橋を渡つてすぐ地圖の點線の道の上りました。温泉より古永井まで、及び上ノ貝、鳥居時間の道の附近は一面に君影草が咲き揃つてゐました。道は尾根(的岩山の東の尾根)の上を通つてゐます。千八百五十米の道の合さる所には小舎の跡があります。立派な板が残つてゐます。四阿山からは北に浦倉山まで尾根道を走りました。二千二百米の附近道の平になる邊からは雪がありましたので意外に面白い旅が出来ました。浦倉山からは東方に尾根を下りました。雪のあるため熊笹のある斜面に出さへしなければ比較的樂に下れます。地圖を頼りにひた走りに下り萬座川の西岸の道に合したのは六時半近くでした。其の道を少し下り萬座川の岩壁の少し上を涉つて萬座川の分岐點(上砥草山の草の字の眞上)に南走する尾根に登りました。此の頃は七時を過ぎて居り其上牧場であるため馬や牛の道に引き込まれ勝ちでした。千二百八十米の突起を東へ巻くと下の澤に立派な小舎があります。此の小舎へ着いたのが七時四十分でした。農林省か何かの小舎だつたのでせう。荒れてはゐますが唐紙障子のはまつた部屋さへあります。此の小舎を出て間もなく萬座温泉に至る道に合しました。此の地點には萬座温泉まで二里と云ふ標木があります。此處より千五百米あたりまでは道と牛の道が平行して居り暗黒の中でラテルネの光を唯一の頼として進むのは容易な事ではありません。残念ながら途中から引き返して小舎に一夜を明かしました。四日は五時半に出發し三時間の後萬座温泉豊國館に着

きました。二三日前に上つて来たばかりで今年のお客との事でした。五日は白根を経て草津に下り、電車で小瀬まで行きました。此處の温泉で夕食をすまし淺間山へ向つて九時に出發しました。併し霧のため思ふ様に進まぬ二千二百米まで行つてから引きかへし峰の茶やから沓掛へ出て、六日朝歸京いたしました。

四阿山の頂上に着いた時あとから上田の方が数人登つて来て今日は丁度四阿山のお祭だとの事でした。なほ四阿山頂南方の澤、神川には小舎が一つありました。千七百二十米の附近でした。白根山は今年の一月に灰を噴いたとの事です。ために雪どけの水を含んだ火山灰に少なからず悩まされてしまひました。(昭和三年六月十七日芋川稔一)

△前略。去る一日東京を發し岐阜高農の一行と共に長良川に沿ひて白鳥に出て二日町を經、長瀬より山を越して越前に入り九頭龍川源流の山中に演習の爲め參り候、幸ひ天候恢復して連日晴天、森林は主としてブナにしてそれに野生のスギを混じ居ること丹澤高原と趣を一に致し候、ネマガリの丈餘に達するものもありエゾユプリハ、ヒメアヲキの如き北方の分子とシロタモの如き南方の分子ありて中々面白く候、シラカバは稀なるもヨグソミネバリ甚だ多く候。(七月四日武田久吉)

△未だ梅雨もあけ切れません。一昨夜青柳に泊り、翌早朝出發平林村を經て柳形山に登る。頂上から白峰三山は見られなかつたのは残念でした。市の瀨に降り自動車にて青柳に着しました。追て歸京します。(七月七日茨木猪之吉)

△前略。小生去る七月十二日飯田町夜行にて松本に向ひ、燕より

上高地と參りましたが一年毎に登山者キャンパリーの激増と俗化に驚きつゝ、一週間の悪天候に滞在を餘儀なくされました。二十四日天候回復を待つて學友一名と笠ヶ岳より双六、三俣蓮華を經て、黒部川へ岩魚を味はひに下りました。五郎澤出合に一泊薬師澤に二泊、豫想外の岩魚攻めに會ひ薬師澤に登り有峯より富山を經て八月二日歸京致しました。

薬師澤の出合カベヶ原に於ては二十年來黒部に入つてゐる鳥々の老岩魚釣上條新一に再會し、小舎作りを手傳ひ、共に釣をなし、夜は黒部五郎岳の上にかゝる月を仰ぐなど、短かい日數ではあまりりましたが黒部川は深い印象を興へてくれました。(八月一日富山にて角田吉夫)

△何年振りかにて夏の山に出掛け申候、鳥々より徳本越え横尾入り潤澤小舎に四五日を過ごし參り候、前、奥、北、の三峯に登り穂高も中々面白き山と感じ申候、但し槍穂高縦走などは論外にて、よほどの忍耐力を要すべきかと被存候、瑞西仕込の麻生武治君の驍尾に附して、前穂高北壁を直接第二峯に登攀致し岩登りの興味や分りたるやに感じ候。

七月十三日前穂高を上高地へと越え候處小梨平あたり天幕街出現の態にて、今に案内所でも設ければ迷子になりさうな形勢に候。日中は貸竿にて釣を垂れるものあり、いでたちものしくしく山へ向ふものあり、じつとしてぬれば御用聞きが伺候するといふ寸法、夜はキャンプファイヤとやらがあちこちに燃え上り、合唱團の美聲林間にこだまするといふ騒ぎに候、まさかと思ひたるこの繁昌振りに群易し十四日夕立の中を歸京致候、(七月十六日藤鳥敏)

男)

△赤石以南加々森山迄の縦走を志して當地へ来たのが十二日でした。此秋出来たばかりの新らしい廣河原の小屋に一泊、十四日に大聖寺平に着きましたが、其後は連日風と雨と霧に悩まされ、十八日再び廣河原に下山、昨日は徒渉不可能の爲小澁川右岸の悪道を下り、奮闘の末漸く夜の九時當地に戻りました。小澁川に至る所に灰色の淵を作り、大きな岩を下流へ下流へと押し下してゐました。(七月二十日孝川稔一)

△先夜は失禮致しました。十一日に初めて四國の地を踏み、この大歩危附近の調査にかゝつてから今日で一週間になります。山も深く谷も岩壁低く、壯大と言つた氣分のないのは残念ですが、地質の方からは重要な事實を供給する地方とて、六ヶしいだけそれだけ興味多いものであります。劔山や石槌山の方にも足を伸ばしたいのですが、その機會を得られるかどうか疑問です、毎日一里位しか進まぬ程コツ／＼やつて居りますので。(七月二十三日大歩危峽谷にて佐々保雄)

△拜啓。私儀去る七月二十四日上野發夜行にて上市より伊折に入リ同日馬場島手前發電所に一泊、白萩村助役の厚意にて同村住人丸田丈太郎をともし宿望の池の谷に進み、猿の如き丈太郎の活躍により、池の谷合流點より大小三つの瀑を越え、三つ目の約三四丈の瀑を左岸二百米突直立大岩壁をロープにより岩頭を極め悪闘の結果遂に未だ見ぬ池の谷の大瀑を望み候ひしが、今更乍らその數百尺の壯觀實に北アルプス何れの大瀑にも絶對に追躰をゆるさず、百雷の如き普響大轟下をうならし、しばし一行を茫然たらし

め候。直ちに落口に引返し更に上流に入り遂に小窓の末端尾根約四、五百米突の猛烈なる敷を乗越し同夕六時二十五分大瀑上雪溪近くに野營。翌日早朝池の谷下狀の大雪溪を三窓に達し同日劔澤小舎に泊り翌日、富山に出て歸京仕り候、一行六名會員林邦彦氏以下白萩村小學校教員藤田氏他小生友人及發電所より一人に御座候。(長谷川孝一)

△十四日、シアトル發カナダに入り、十七日ベイスキャンプのウイダーメーヤーに着、更に三十九哩を山に入り、スタホードの大氷河を踰えてヘンギンケレシヤーに着く、一行十二人、先年日本に来れるパーカー氏もあり、二十四日終に目的の處女峰登攀に成功す、余の爲に紀念として *McKend* と命名す。唯一人の日本人なれど至る所にて歡迎を受け、明日講演の後名譽章を受くる筈、詳細は後便に譲る。三日後にジャスパーに行き、ロブソン山に登り、九月十日横濱着のロンドン丸にて歸京の豫定。(カナダにて北田正三)

△七月二十四日、吉田へ参りましてから今日で五日富士を駆け廻つて居ます。吉田口から頂上にも登りました、武田博士の御推奨なざる吉田六合目から須走三合目への路も通つて見ました。須走から山中幹津鳴澤精進へ、更に精進から精進口三合目、同所から船津への道も通つて見ました。船津から河口西湖精進へと物持連の我が物顔に逍遙されるあたりも一わたり巡遊しました。これから本栖を経て大宮へ抜けやうと考へて居ます。經驗した所精進口は富士登山路として一等よいやうです。(七月二十九日精進湖畔にて藤岡健藏)

△一昨日青根温泉より蛾々温泉まで霧の旅を続け申候。藏王を論えて高湯迄と思ひ候へどもまだ子供にはちと無理故遠慮致し候。天氣わるく山に行つた人は皆困り居り候。蛾々はよきところ、俗化せぬ山の湯は氣持よろしく候。(七月三十日鳥山梯成)

△拜啓。去る二十四日長谷川孝一、吉田喜久治兩君のお件をして伊折より早月川溪谷に入り、池の谷を廻行して劔岳に出て、積年の希望を達し申候。池の谷は土地の稱「行けぬ谷」をもちりたるものにて正に其至言なるを確むることを得申候。この行けぬ谷を行かんとする今回の舉は、地元の人々の非常なる興味を喚起し、白萩村役場、日電發電所等官民の多大なる援助を受けたは、曲りなりにも今回の目的を達し得たる最大の原因と感謝致し居り候。

今回の行に於て下記の如き四個の收穫を得たる事を會員諸君に御披露申上候。

- 一、白萩村役場が近時大に登山者の爲に力を盡し、目下盛に登山路の改修、橋梁の架設等に從事し居り、今回も出先役場員二名迄一行に加はり實地を踏査せられ候。
- 二、伊折側の所謂裏剣方面に通曉せる丸田といふ良案内者を見出したる事。
- 三、パンバ島に登山小屋建設の計畫ある事。
- 四、池の谷中段には從來知られたるもの以外、數條の大瀑布を発見したるが、この間は全然通過不可能なるのみならず、これを望見せんとせば、非常なる冒險を必要とする事。以上。(七月三十一日林邦彦)

△拜啓。出發に方りては種々御示教を賜はり有難く奉存候。目的の鳥海及び月山はよく開けて居る山だけに充分調べ度く、又道順

等も最も都合よきものを知り度参考書を漁りたるも、あまりに知れて居る所爲かよきもの見當らず閉口致候。『山岳』の大平氏の記事は恐らく今後と雖もよき参考文と被存候。八月四日夜會員田澤昌介君と共に上野驛を發し翌夕遊佐驛に下車、蔵岡の徳宮に至り同所の共榮社に一泊致候。社務所にて求めしもの、内橋本賢助氏著鳥海登山案内は其後よき同伴と相成候。眠られぬ一夜を送り鳥海登山の途につき申候。東京は雨ばかりに閉込められたるに此地方は凡そ二十日ばかり照りつづけ東風烈しく稻作にも悪影響を及ぼさんとする有様に御座候。それにしても中央氣象臺へ問合せて連日晴天との答に俄かに飛出したるを喜び合ひ候。四合目の笹小屋に休み、七合目の河原宿に至り漸く高山らしき氣分に打たれ候。高山植物園と銘うちて標木に名を記すも素人にはよき教へに御座候。大雪小雪路を上り外輪山の縁に登り新山を見下したるときは怪偉なる姿は忘れ難く候。常々何も持たざるものが俄かに背負ひたることゝ薄暮頂上本社に着き小屋一泊致し候。翌朝は新山に登り御來迎に接してより歸路を吹浦口にとり候處漸く雲霧の藪ふところとなり御田ヶ原に至る間眼界狭く聊か残念に候ひき。河原宿より御田ヶ原迄は高山植物多く充分眼を慰め候へ共、小學生や道者達の濫獲は惜しきことに候。俵石坂を漸く下れば後は長き裾野にて風もなく蒸されしには閉口致候。午後四時松林を抜け吹浦より北に當る湯の田鑛泉宿に到着。直に鑛泉に入りて汗を流し室に歸りて渺茫たる日本海を窺ひ飛鳥に入る夕陽を眺め申候。翌日は晝迄同所に休息し、それより鶴岡に至り乗合自動車にて手向村に至り一泊。此八月下旬は鳥海も月山も白衣連の動きときな

るにまして此頃は不景氣の故にて人出少き由開かされ大いに助かり候。翌朝は二千餘階と聞く石段を羽黒山に至りそれより草山三里、木立三里を月山に向ふうち追々天候思はしからず、期待致し居り候ひし八合目御田ヶ原以上の高山植物の多き登路も全く霧と風とに包まれ面白からざれば其儘歸へらんかと思ひ候へ共、折角來たもの故唯通過丈けのことにして出かけ申候。途中島海山の如く標木に草の名を記したるもの諸處に有之候へ共追々風烈しく水滴を増し強く相成り候へば駈けるが如き思ひにて九合目佛生池の笹小屋に入り一泊と定め申候。當夜は外に客なく悠々と談じ火にあたりたるは忽怪の幸に御座候。明ければ風聲稀々弱きも依然として霧深し。早朝發足頂上本社に至り直に下山。路を湯殿山に取り姥ヶ嶽に至れば漸く霧薄れ、下界は依然晴天と窺ひ知られ候。裝束場より輕裝して、鐵鎖、鐵梯を辿り湯殿山の御寶前五味の藥湯噴出を拜し、再び裝束場より蛇多き石跳澤を下り志津の五色沼を眺め、本道寺を四時半の乗合自動車に間に合はせる可く幅廣き縣道を急ぎ參り、漸く自動車を捉へ海味より電車、高松より省線に乗り山形に至り、自動車にて上ノ山温泉に至り連日の汗を流し、翌日藏王山に赴かんかと思ひ候へ共雲深く何日晴るゝとも知れざれば、書間緩行列車にて歸京致し候。(昭三・八・一六、松井幹雄)

△拜啓。私は去る八月十一日夜汽車にて飯田町驛を發して三日午前中大町へ着き對山館で中食中人夫を頼み同行三人人夫三人にて同所を立ち其日は大澤小屋へ宿り十三日は早朝出發針木峠より針木岳三等三角點を極め天氣は日本晴で四方の山は全部見えまし

た。平の小屋に午後五時四十分に着きました。十四日は刈安峠を左へ尾根傳ひに新道を通り、五色ヶ原へ正午少し過ぎに出ましたから、中食後私ともう一人にて奥大薙及大薙岳へ上り、十五日はザラ峠より鬼及龍王岳を経て淨土山の頂上に至り、其より雄山へ向ひ一等三角點を極めて雄山神社に參拜、中食後最高點の大汝を往復して下り、其日は室堂へ早齋して一宿。翌十六日は早朝出發劔岳へ向ひました。別山北平の小屋へ荷物を置き、長次郎谷より最高點を極め、尾根傳ひにて別山北平小屋へ午後四時五分前に歸着。十七日早朝出發彌陀ヶ原の途中より稱名ヶ瀧へ下り、中食後稱名川の新道を通り千垣富山を経て十八日午前歸宅致しました。(吉田竹志)

△權太よりの歸途大雪山に登り山中に野臥すること六夜、連日快晴に恵まれ宇内の大觀を擅に致し候本日白雲岳の野營地を出發して夕刻層雲別温泉に下り候。(八月十七日武田久吉)

△拜啓。先日松本君よりの御便りによれば島海山より出羽三山方面へ御旅行の由、幸ひ天候も宜しかりし機承り居候間賑御愉快なる山旅を御納げ被成候事と拜察申上候。私事本夏は、秋田縣小坂へ歸郷する友人に誘はれ、十和田湖へと去る三日出發、雨中を藁温泉に寄り一浴仕候。大町桂月翁の推賞する程宜しき處には無之候。それより有名なる奥入瀬の溪流に沿ひ十和田湖に出て、湖畔の養魚場に旅裝を解き舟遊仕候、鍋山峠に立て俯敵したる十和田湖の圖は又格別と被存候。小坂鏡山にては坑内工場を隅なく見學し、森吉山へ登るべく、荒瀬村に向申候、荒瀬村幸屋の佐藤村長邸にて御厄介に相成候處、同氏の切なる勸誘と休暇日數の關係よ

り憧れの森吉山は只望観するのみにて割愛、焼山直下の鹿湯へと向申候、森吉山は杉木澤を経て登ると最も好しと聞及候。鹿湯への新道は、途中數里の間は、ブナの密林にて眺望絶無と謂ひ得べく、只一度見晴臺とも名附け得べき、樹木を切拂ひある處より駒ヶ岳（駒形山）及附近の山々を遠望し得候のみにて、行け共々森の中の割合に樂な平凡な路を上下するのみなれば實にあきく仕候。其後樹間より白き肌の大裂口を表はせる焼山を眺め得らるる事も有之候へ共先を急ぐ吾々には、それも、ホンの瞬間にて宛然夜行に等しく、それが爲か此行程は特に長く感ぜられ申候。鹿湯は浴槽もあれど前を流れる溪流に入る人々も多く、私等も先づ此處にて汗を流さんと思ひ候處、間も無く、あたりは夕暗に閉され候間、遂其機を逸し申候。

宿は苗場の赤湯より穢く一寸閉口仕候。然し山の湯としては眞に推賞し得る處と存候。

翌日は鹿湯の珍らしき湯に別れを告げ、玉川の溪谷を下り、玉川の部落にて一休みの後、田澤湖春山の旅舎に落付き申候。翌朝、湖上より思ひがけなく懐しの森吉山の眞黒の鈍峯を遠望し候時は今二三日の休暇を得置き候は、同山の頂上より四方の山々を大觀し思ふ存分山の氣分に浸りしものと心密かに残念に思ひ候。

十一日朝には再び郡の塵埃の中に歸り勤務致居候。御承知の通り、八幡平を中心に同附近の山々は高度は勢々五六千尺内外のものなれど其周圍には温泉も數多く種々逸話に富む部落も有之候由に付機會を見て是非再度の旅行を試み度く考へ居候。當時の寫眞駄作に候へ共四葉同封御送附申上候間御笑納被下度候。（八月二十

日野口末延）

○山岳圖書紹介

△尾瀨地方に於ける保護林と其の景觀

△仙境尾瀨の景觀

前者は東京營林局後者は大日本山林會の發行となつてゐるが、兩者とも内容は全く同じである。折角の好著を單に官廳の報告として埋藏して置くのは惜しいといふので、題名を改めて大日本山林會から發賣することになつた、お蔭で自由に吾々の手にも入る譯である。専門の報告書類は別とし、一般の讀書子に向くやうなものはずべて斯様な方法によりて頒布されたものであると思ふ。

本書は武田、田村の兩博士が營林局の囑託を受けて、各自専門の立場から尾瀨を調査された報告書であるけれども、分りよく要領が摘記してあるから、尾瀨を知らうとする人又尾瀨に遊ぶ人に、恰好の指導者となり案内者となるものである。殊に尾瀨の先覺者である武田博士の記事は尾瀨通を以て任ずる人の必讀す可き文字である。

田村博士の著は「尾瀬の風景」と題し、一、緒言。二、地理、地形、地質、氣象及森林の概況。三、風景地としての特色。四、尾瀬沼及尾瀬原に於ける水力電気計畫とその風景に及ぼす影響の四項に分ちて記述し、十一葉の寫眞版が添えてあり、武田博士の著は「尾瀬の植物景觀」と題し、一、緒言。二、地勢一般。三、植物景觀。四、注意すべき植物。五、結尾の五項に亘りて詳説し、百十四葉の寫眞版と相待つて、尾瀬の植物景觀を手取り早く一目瞭然たらしめてゐる。菊版假綴七十三頁寫眞版六十五頁定價壹圓五拾錢、大日本山林會發賣。

△原色高山植物

山 川 默 著

我國に於ける高山植物の書は甚だ乏しい、乏しいといふのは本がないといふ意味ではない、良い本がないといふことである。殊に圖譜に於て其感が深い。曩に武田博士の著高山植物及高山植物の話の二書が出版されて、高山植物に就ての一般的知識は得られたけれども、遺憾ながら圖版の数は甚だ限られてゐた。三好、牧野兩氏共撰の日本高

山植物圖譜は上下二卷にて四百種ばかりの山地植物を網羅し、初學者を益すること大であつたが、惜しいかな圖が餘り上手でなく、色も形も實物とは大分隔りがあつて、生品と引き合せる場合に困難なことがあつた。それすら今は絶版で容易に手に入らない。吾々は丸善などで一寸氣のきいた手頃の外國出版の高山植物圖譜などを見ると、全く羨しくなつたものである。本書は丁度其缺陷を補ふ爲に生れたものと稱してよく、そして實物から直に原色寫眞に撮影製版されたものであるから、植物の生態が失はれてゐない、このことは初心者又は好事家に取りては極めて重要なことである。試に第一、第五、第一四圖版などを熟視してゐると、身はいつか山上に遊んでゐるやうな感が起つて來る、すべての植物が斯様な風に寫されてゐたならと慾の深いことを考へるのも寧ろ嬉しさの餘りである。この小冊子に四百種程を收めたのは著者の苦心の存する所であらう。圖解をも少しく詳しくして欲しかつたといふ人が多い。和名索引、科別索引も添えてある。此上の希望として著者及

び出版書肆に、尙ほ一冊四百種ばかり集めて出版されんことをお願ひする。さうすれば普通山で目に觸れる種類は大抵網羅されるであらう。四六版、圖版八十八、圖解及索引合せて六十頁、皮製で丈夫な上に嵩張らないから携帶にも至便である。定價二圓、三省堂發行。

△黒部 齧谷 冠 松次郎著

黒部川が登山者の間に注目されたのは明治四十年頃からで、中村清太郎氏などは其中でも熱心な方であつた、然し機運といふものは恐ろしいもので、それが熟さないと骨が折れるのみで仕事の成績は上らないものである。大正八九年頃から黒部の下廊下を目指す人が多くなり、それから根氣よく引繼いで今日まで毎年多き時は二三回も足を入れられた冠氏に依りて、本書の出版を見るに至つたことは、努力の結果とはいへ當然のこと、更に又本書が他の黒部に關する群小出版物を歴して、嶄然頭角を抜いてゐる所以である。黒部の概観、下廊下の記、双六谷から黒部川へ、黒部川溯行記、紅葉と新雪の黒部流域、春の黒部川、

赤牛岳へ登る等が主項目で、有峰のことや登山に於ける慣用語等が添えられ、十二頁の寫真版で一般を推するに便してある。四六版總クロス二百七十三頁、定價壹圓八拾錢、アルス發行。

△R・O・C報告2

ロツク・クライ
ミンク・クラブ

菊版假綴二百七頁の大冊で、神戸市に在るロツク・クライミンク・クラブ本部の發行である。内容は文叢、紀行報告、研究と大別され、前者に藤木氏のアルプスの山案内(翻譯)、西岡氏の天狗は山人也等、中者に水野、海野兩氏の道場の岩場、美田氏の小樽近郊の山々、巖氏の横山行、伊藤氏の三月の槍・穂高其他三篇、後者に中村氏のアイスピツケルと鋌靴に就て、水野氏の「スキ一の驚異」に於ける廻轉法體系の紹介等がある。殊に最後のものは體系の多數寫真版と共にスキ一にたづさはる人に取つて興味ある記事であらう。其他本文の説明に必要な寫真版八葉と五、六のスケッチがあり、巻頭に口繪としてゴルナーグラートよりのパノラマ寫真が添えてある。實價二圓。

△北大山岳部部報1

文武會山岳部

此頃の元氣潑瀾たる若い登山者の書いた文を讀んでみると、自分にもいつか若い時の血が再び巡つて來て、心ばかりか體までも輕くなつたやうな感じがする。殊に北海道の山を多く知らない私は、本書を手にして一氣に讀了するまで巻を措くに忍びなかつた。私の癖としてどんな淺い低い山の紀行でも眞面目なものであれば必ず讀む、讀む時には必ず五萬分一圖と對照するのであるが、本書ではその出來ないものがあつて残念だつた。取り分け私は自分の最も懂れてゐる阿頼度島のことを書いた伊藤秀五郎氏の北千島の印象を再讀三讀した、そして阿頼度島の地圖を油斷して買ひ損なつたことを深く後悔してゐる。で今後讀みたいと思つてゐるのはチャ／＼ヌブリの紀行である、誰か讀ました呉れる人はないかしら。

餘談はさて置き目次の一班を紹介すると、冬の十勝岳、冬の石狩岳、美生岳登山記録、三月の武利岳、斜里岳、五月の石狩岳、三月のトムラウシ山、春の阿寒行、北海道登山の發達、狩場山、冬のニセイカウシュベ山、北千島の印象、三國山よ

り石狩岳へ、十勝岳より大雪山へ、漁岳とオコシベ湖、小さな岩登り等で本文二百二十一頁、それに四十四頁の年報が添えられ、寫眞十一葉、スケッチ四及び地圖三。菊版の假綴で實價壹圓八拾錢、北大文武會山岳部發行。

△山 想 2

法政大學山岳部
年報

菊判假綴百五十頁、盛るに春の笠ヶ岳、冬の仙丈岳、御岳スキリ登山、二月の乗鞍岳、三月の西穂高岳、初冬の常念岳、以下八篇を以てし、充實した内容である。雪の山の好い寫眞が誌上に花を添えてゐる。願價壹圓五拾錢、法政大學山岳部發行。(以上木暮)

會報

○第二十一回大會記事

昭和三年五月十二日午後六時、赤坂區溜池三會堂に於て、本會第二十一回大會を開催、木暮幹事開會の辭を述べ、左の講演があつた。

アルプスの二三の山々に就て 松方 三郎氏
講演の大意は、冒頭先づアルプスの地理と其山群の概略は勿論、登山の現況などに就て感想を述べられ、斯る數多き高峰の中で、最も氏の氣に入つた山は、何といつても第一にマッターホーンを推さなければならぬ、次はメイジとアイガーであるといはれ、夫よりマッターホーンの登山史に入り、あの恐ろしい悲劇を演出した初登山のことから、引いて現在の有様に説き及ぼし、各方面より

見たる山頂附近の山稜の傾斜や登路の工合などを多くのスケッチによりて詳細に説明し、更に美しい幾多のスライドを用ゐて印象的な解説を加へ、來會者の耳目を魅了した。これにて暫時休憩の後、峻難を以て聞えたメイジ群峰の地理と登攀を同じくスケッチとスライドとに依つて詳しく説かれたが、それこそ鋸の齒のやうな山稜を登つて岩にしがみ付いてゐる時雷雨に襲はれて岩角が唸り出し、體にビリ／＼電氣を感じられたと話された折には、恐らく聽者も息をつめて手に汗を握つたことと思はれる。最後はアイガー本尾根に續くホルンリーの初登攀の話であつたが、之は同氏の成功されたものゝある爲に、謙遜して簡單に述べられたのであつた。何にしても滯歐八年の間、暇あればアルプの山々に親しまれて實地と見聞と二つながら豊富に持たれてゐる氏のことゝて殆ど三時間に亘る長講演も少しのダレ氣味もなく、聽者は孰れも緊張して時の移るを知らなかつた。
斯くて満場の喝采裡に閉會したのは十時近くであつた。來會者殆ど四百名、爲に場の狹隘を告げ

た様であつた。

○第四十回小集會記事

昭和三年六月二十三日午後六時半から赤坂區溜池三會堂に於て開催、左の講演があつた。

新高登山失敗談 高 頭 式氏

雜誌二十二年三號に北田正三氏の「阿里山より新高東山へ」が掲載されて居るが、北田氏の登られた時（大正十五年五月十三日阿里山發、十六日に主山と東山を攀ぢて八通關着）は、まだ今日の新高登山新路が出来て居なかつたので、楠仔仙溪から西山に登られる豫定であつたらしかつたが、大雷雨のために沙里仙溪を下られて、東埔トウポから八通關、新高山と云ふ事になつて居る、氏は本年の三月十三日に本會の名譽會員大平晟氏と同行されて、巡查一名と蕃人三人の案内で阿里山を出發されて、新路（昭和元年九月十七日起工、十一月十三日竣功）に登られた、普通は鹿林山の小舎、新高山下の小舎（約一萬尺）に宿するのであるが、登山時期でないのと蕃人が居ないので不便であるか

ら、一里許手前の經木製作所へ依頼され、翌日は雨を冒して登られたが、約一萬尺許の前山の小舎からは雪になつて來て、蕃人が弱つたので頗る閉口された、殊に西山（一一、六七八尺）の嶮などでは蕃人が滑るのでヒヤ／＼された。十五日は降雪のために新高山下の小舎に滞在、十六日に雪を踏んで一時間半許り登られて、頂上までは一時間弱の所まで行かれたが、蕃人が雪に怖れて泣て歎願するので已むを得ずに其日も新高山下の小舎に宿された、氏は八通關方面から頂上に登られる意で、十七日に新高山下の小舎を出發されて阿里山に戻られた、阿里山から新高山下の小舎までは七里弱だから、縱令努力坂や奮闘坂の嶮道でも健脚者ならば、一日で登る事は困難で無いと云ふことである、氏は十八日に臺灣鐵道の新高登山口の二水驛ニスイヤクに宿されて、翌日は内茅埔ウチカサに宿された。二十日の朝は快晴であつたので、氏は生來はじめて新高山の雄姿を仰がれた、其日は新高山表口（八通關）の中繼所であつて、温泉が湧出して居る東埔へ宿された。二十一日には護衛の巡查の案内で午後三時

に八通關に着された、二十二日に部長と巡查二人と蕃人三人の案内で午前十時半に約一萬二千六百尺の地點まで登られたが、山脚の狭い登り口が一面の厚い氷であつて、唐鍬で足場を切るのに骨が折れて、其上に頭上の鞍部から吹き下す烈風が、微細の氷の破片を飛ばすので、その破片は硝子の屑を擲つやうで、その屑が打つかると手先や顔から出血したさうである、夫れから氷の斜面は可なり急であつて、非常に滑るので危険であると云ふので部長が下山を諭されたので、其日は觀高に宿されて、秀姑巒山（一二、六五〇）やマボラス（一二、五六〇）を望見された、觀高からは快晴には次高山（シルビヤ）も仰がれるさうである、八通關口から登つて面白いと思はれるのは、楠子脚ナマカ萬から雲懸橋を渡ると小標があつて比叡標高二、七九九とある、次第に登ると六甲山三、〇五九、多良岳三、二四二、大屯山三、六〇九、金剛山四、〇八二、温泉岳四、四八七、箱根神山四、七四八、高千穂峰五、一九四（内臺踏破二十名山）、阿蘇山五、二五五、藏王山六〇七五、石槌山（天狗岳）

六、五三七、大山（中國）六、六七六、鳥海山七、三五九、旭岳七、五五八、男體山八、一九八、白山八、九一七、御岳一〇、一〇九、能高一〇、七三〇、富士一二、四六七とあるさうであつて、商業學校の教諭とかが建てられたとの事である、新高山に最初に登られた知識階級の人は、多分本多静六博士だらうと想はれ、それは今日の新高五峰の内の北山（一二、七六〇）だと推せられる、明治三十三年四月十日に鳥居龍藏博士が主山の絶巔に登られた、その日記は『日本地理精説』の巻首に載つて居て、三峰より成るとあつて、多分は今日の北山と主山と西山を指したものだと思へられるさうである。

沼尻山附近 武田久吉氏

沼尻なる山名から説き起して、箕輪山、鬼面山、土湯峠、野地温泉、幕の湯と次第に北に進み、終に吾妻山にまで及ぼされた。其間特異なる地形に就ては、殊に詳細に説明し、成因に關して意見を述べられ、通路の模様や道程なども入念に説かれ、植物の景觀に獨自の見解を下されて、聽者を

益すること例に依つて多大であつた。司會者は高頭幹事。

當夜の來會者は、額田敏、川崎吉藏、品田豊一郎、大木宏、神谷恭、小倉志郎、大熊保夫、山田多市、村越匡次、大賀智、山崎武士、吉田竹志、岡田喜一、伊藤一郎、飯塚篤之助、黒田正夫、岩瀬昌治、岩瀬勝治、矢作太郎、佐々保雄、渡邊漸、木村久太郎、小島染之助、武田久吉、木暮理太郎、藤島敏男、鳥山悌成、高頭仁兵衛の二十八氏にして他に黒田初子夫人及び會員外六名の出席があつた。

○物故幹部及會員追悼會

去る四月八日、花祭の日、本會の物故幹部及會員の追悼會が芝區白金臺町の正源寺に於て營まれた。本會が過去二十三年の努力によりて我山岳界に重きをなすに至つた事は、何と云つても亡くなられた幹部諸君は勿論會員の力に待つものが多かつたのである。

梅澤親光氏、辻村伊助氏、城數馬氏、志賀重昂

氏と數へると、未だに其面影が髣髴として記憶に新たなるものがある。逝かれたのではない、生きてゐられるのである。と死の事實を否定する事さへある。然し追悼會を開きたいとの相談が餘程前から出てゐたので、茲に四月八日を選んで諸氏の冥福を祈る事となつた。當日の出席者は左の十九氏であつた。

小島久太氏、近藤茂吉氏、同夫人、高頭仁兵衛氏、冠松次郎氏、辻本滿丸氏(代)、別宮貞俊氏、藤島敏男氏、飯塚篤之助氏、田中菅雄氏、岡田喜一氏、松井幹雄氏、松本善二氏、神谷恭氏、渡邊漸氏、吉田直吉氏、小島染之助氏、角田吉夫氏、鳥山悌成氏。

○有志晩餐會

別項の追悼會を終へてから芝區田町八ノ一、家庭料理つかさに於て有志晩餐會が開かれた、出席者は二十名、追悼會出席者の他に岩永信雄、伊藤英三郎、武田久吉の三氏があつた。同日の献立は

前 菜 鯛の油成、胡瓜、うど、芥子味噌。

吸物 吹き寄せ蛤、椎茸、細根、
 差味 酢とめじの造合せ。
 煮物 なんきん、小巻ゆば、ふき、木の芽。
 皿 鶏の博多煮、地下生婆。
 止 椀 身巻鮎、ぜんまい、かいはり菜。

盃酬の間に山の話に花が咲き、歡を盡して散會したのは午後八時を過ぎてゐた。

○大平晟氏歡迎會

古稀に近い齡ながら強健壯者を凌ぐばかりに臺灣の諸高山を跋涉して歸京せられた大平晟氏の歡迎會を四月二十八日午後六時から芝區田町八丁目一、家庭料理つかさに於て開いた。主賓と武田久吉、木暮理太郎、高頭仁兵衛、鳥山悌成の幹部四氏に會員大賀智氏を加へ合せて六名、臺灣の山々に就て大平氏及び同行の高頭氏から御土産談を伺つた。

者

同

○交換及寄贈圖書目

ツ ー リ ス ト	第十六年第四、五、 六、七、八、九號	ジャパン・ツォー リスト・ビュローリ
歩 跡	第二年四、五、六、 七、八、九號	テ ク リ 會
管 見 録	第四年三、四、五、 六、七號	大 阪 管 見 社
キ ヤ ン ピ ン グ	第七十、七十一、七 十二、第七十四號	シヤパン・キヤン ブ・クラブ
山 岳 資 料	第五輯	關 東 山 岳 會
山 行 案 内	第三年四、五、六、 七、八號	昭 和 マ ウ ン ・ ク ラ ブ
旅 行	第八年五、六、七、 九月號	東 京 ア ル カ ウ 會
旅 行	第二十六、二十八 號	東 京 旅 行 ク ラ ブ
ア ル カ ウ 趣 味	第十五、五、六、 七、八、九、十號	日 本 ア ル カ ウ 會
山 嶺	七月號	東 京 野 步 路 會
旅 程 と 費 用 概 算	第五卷五、六、七、 八、九十號	日 本 旅 行 協 會
		ジヤパン・ツォー リスト・ビュローリ

會 報 ○除名者○會員の訃報○交換及寄贈圖書目

山水巡禮

第五年三、四、五、六、九號
第四年五、六、七、九號

サンシャイン旅行會

會報

第九年第一號

東京登山會

山行

第三號(新高山集)

城南山岳會

臺灣山岳

R・C・C報告II

R・C・C本部

白樺

第四年第二號

白樺旅行會

岳友

第四十、四十三號

日本岳友會

會報

〔大阪旭山岳俱樂部
大阪愛旅俱樂部〕

筒臺山岳會

彙報

第二十二號

大日本山林會

やま

大前繁義著

六甲研究會

仙境尾瀬の景觀

昭和三年度

信濃山岳會

山人

山梨縣北巨摩郡菅原村登山者案内強力組合

山梨縣山林會

日本アルプス登山要項

山梨縣北巨摩郡菅原村登山者案内強力組合

山梨縣山林會

日本アルプス登山案内

山梨縣北巨摩郡菅原村登山者案内強力組合

山梨縣山林會

富士山及其附近

二五八八年度

サン・シャイン旅行會

ステツブ

御正體、畦ヶ丸、加入道、大室及び朝日山、鞍岳と日原川上流の山谷の比較的詳細な記行を載す。

山とスキー

御正體、畦ヶ丸、加入道、大室及び朝日山、鞍岳と日原川上流の山谷の比較的詳細な記行を載す。

本邦に於ける唯一最良のスキーに關する毎月の出版物である。山の記事は割合に少ない。第八十號には大島亮吉君の「登山史上の人々」が載つてゐる。

みなかみ

山岳部報

二年六、七、八、九月號

東京みなかみ會

黒部 磐谷

四卷十四號

日本齒科醫專山岳部

北大山岳部々報

冠松次郎氏

文武會山岳部

吉野群山の山水

大和山岳會吉野支部

美探勝案内

La Montagne, N° 209, 210, 211, 212, 213, 214.

Revue Alpine, Vol. 29 N° 1, 2.

Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLVII, Num 1—2, 3—4, 5—6.

Bulleti Excursionista de Catalunya, Any XXX-VIII Num. 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397.

The Mountaineer, Vol. XX No. 4, 5, 6, 7, 8, 9.

Bulletin du Club Alpin Belge, 2^e série. Tome V, n^o 10.
 The Geographical Journal, Vol. LXXI No. 3, 4, 5, 6, Vol. LXXII No. 1, 2.
 The Alpine Journal, Vol. XL No. 236.
 Trail and Timberline, No. 113, 114, 115, 116, 117, 118.
 Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. XVII No. 2, 3, 4, 5.
 The Prairie Club Bulletin, No. 174, 175, 176, 177.
 The Prairie Club, Year Book 1928.
 Sierra Club Bulletin, Vol. XIII No. 2, 3.
 Sierra Club Bulletin, Annual Number 1928.
 Therapeutische Berichte, Nr. 2. 1928.
 Revista Mensual de la Societat D'Iniciativa, Ano I Num. 1.
 The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 18, No. 105.
 Die Alpen les Alpes, le Alpi, IV-N^o 3, 4, 5, 6,

7, 8.

Natural History, Vol. XXVII No. 6, Vol. XX

VIII, No. 1, 2, 3, 4.

Annual of the Mountain Club of South Africa,

No. 30-1927.

Svenska Turistföreningens Arsskrift. 1928.

Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen

Alpen vereins. Band 46, Jahrgang 1915.

○本會規則拔萃 (大正十三年九月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナヌヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス、又

時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルヘシ

第四條 本會ハ毎年大會及ビ小集會ヲ開ク

第五條 本會ハ會長ヲ裁カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セム

第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ

幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セララルモノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住

所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付ス

ヘシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス (入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケラレ)

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス

第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ尙後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

現任幹事八名

別宮 貞俊 藤島 敏男 冠 松次郎 木暮理太郎

楨 有恒 高頭仁兵衛 鳥山 梯成 沼井鐵太郎 (在臺灣)

評議員十七名

小島 久太 武田 久吉 高野 鷹藏 近藤 茂吉

中村清太郎 三枝 守博 辻本 満丸 田部 重治

山川 默 及現任幹事八名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿願意のこと。

一、用紙は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと。(但し原稿用紙は事務所へ申越次第直に送ります)

一、。、。」「()」等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時はその

旨を括弧内に明記されたきこと。

一、スケッチは複製の際誤記、脱漏等の虞あるを以て豫め本誌面に適せる大きさに調製ありたきこと。(但し其儘寫眞版に附し得るものは大さ隨意)

一、原稿は左記宛御送附のこと。

東京市本郷區駒込蓬萊町三一 「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

昭和三年十二月二十三日印刷
昭和三年十二月二十六日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

島連太郎

發行所

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

林學博士 田村 久 剛氏 共著
理學博士 武田 吉氏 共著

仙尾瀨の景觀

▼菊版・羅紗紙表裝・本文七三頁・寫眞一二五個・地圖大判二葉▲

尾瀨地方は群馬、福島兩縣に跨り廣袤拾數萬町歩に互る原始的林野地域にして、尾瀨沼を中心としての神秘的風光は正に天下に冠たりと稱するを得べく、又其の植生は世界的珍として世に誇るに足るべきものあり。

本書は曩に田村、武田兩博士が其風景美と植生の眞價を調査せられしものにして、殊に寫眞百二十五葉は總て兩博士の撮影に係り、報文と併せて斯界希觀の錦著たり。輓近登山、高山研究、國立公園設置等の高唱せらるゝの際、本書の如き眞摯なる良書の出現は蓋し大に意義あるものと謂ふべきなり。

東京市赤坂區溜池町 大日本山林會

電話 青山六三三〇番
振替 東京五七九二番

定價 金壹圓五拾錢
送料 金拾 貳 錢

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXIII

1925

No. I